

国際医療福祉大学審査学位論文（博士）

大学院医療福祉学研究科博士課程

知的障害を伴う自閉スペクトラム症児と
養育者の交流の分析

2021 年度

保健医療学専攻・作業療法学分野・作業活動分析学領域

氏名：長 志保

知的障害を伴う自閉スペクトラム症児と養育者の交流の分析

長志保

要旨

自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorders: ASD）は社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応の障害や常同的・限定的行動を特徴としている¹⁾。ASD 児の養育者は抑うつ・不安・育児ストレスが強く^{2) 3)}、養育者の精神的健康は養育行動に関連し⁴⁾、子どもに影響を与えることが指摘されている⁵⁾。しかし中には良好な関係性を築いている親子も存在する。

本研究では、ASD 児と親の相互作用に関する既知事項を調査し、良好な関係性の親子の交流の特徴を明らかにすることを目的に、親子の交流場面の分析とアンケート調査を実施した。

結果、ASD 児と養育者の支援には、日常生活場面で研究を進めていく余地があること、良好な関係性の親子の共通点は「自分のペースで行動する」「母親に返答する」「母親に従う」「子どもを見守る」「子どもに話しかける」であった。しかし相違点も多く、支援方法には個別性が求められること、さらに、周囲の存在も親子関係に必要な要素であることが明らかとなった。

Key words

自閉スペクトラム症, 発達障害, 相互作用, 親子, 青年期

An Analysis of Interactions between Caregivers and Children with Autism Spectrum Disorder with Intellectual Disability

Shiho Naga

Abstract

Autism Spectrum Disorders (ASD) are characterized by impairments in social communication and interpersonal interactions, as well as addictive and restrictive behaviors¹⁾. Caregivers of children with ASD experience high levels of depression, anxiety, and parenting stress²⁾³⁾. The mental health of the caregivers relates to their nurturing behaviors⁴⁾, and has been noted to have an impact on the children⁵⁾. Nevertheless, some parents and children maintain good relationships.

In this study, an analysis of parent-child interaction scenes and a questionnaire survey were conducted with the aim of investigating what is known about the interaction between ASD children and their parents, as well as to identify the characteristics of interactions within good parent-child relationships.

The results showed that there is room for further research on daily life situations to identify ways to support ASD children and their caregivers. Furthermore, good parent-child had certain aspects in common, such as: "acting at their own pace," "responding to the mother," "following the mother," "watching the child," and "talking to the child.,". However, several differences were also found, indicating that individualized support methods are required, and that the presence of other individuals is also a necessary element in the parent-child relationship.

Key words

Autism Spectrum Disorder, Developmental Disability, Interaction, Parent-Child, Adolescent

目次

第一章 序章.....	1
I. 背景.....	1
II. 目的.....	4
III. 倫理上の配慮.....	5
IV. 本研究の構成.....	7
第二章 研究 1. 親子の相互作用に関するスコーピングレビュー.....	8
I. 背景.....	8
II. 目的.....	9
III. 方法.....	10
III-1. リサーチクエスションの特定.....	10
III-2. 関連する論文の特定.....	10
III-3. 対象論文の選択.....	11
III-4. データ抽出.....	11
III-5. 研究のまとめと報告.....	12
IV. 結果.....	13
IV-1. 検索方法.....	13
IV-2. 最終調査対象論文の特徴.....	14
V. 考察.....	25
V-1. マッピングされた論文の特徴および実験環境.....	25
V-2. 対象児の特徴.....	26
V-3. 養育者の特徴.....	27
VI. 本研究の限界.....	28
VII. 結語.....	29
第三章 研究 2. 知的障害を伴う ASD 児とその親の交流の分析.....	30

I. 背景.....	30
II. 目的.....	32
III. 方法.....	33
III-1. 対象者の選定.....	33
III-2. 環境設定.....	33
III-3. 測定方法.....	33
III-4. データ生成.....	34
III-5. 妥当性の検討.....	37
IV. 結果.....	38
IV-1. 概要.....	38
IV-2. 事例 A.....	39
IV-3. 事例 B.....	57
IV-4. 事例 C.....	69
IV-5. 事例 D.....	85
IV-6. 事例 E.....	97
V. 考察.....	109
V-1. 事例 A.....	109
V-2. 事例 B.....	114
V-3. 事例 C.....	116
V-4. 事例 D.....	119
V-5. 事例 E.....	121
V-6. 研究 2 (事例 A～E) 全体考察.....	124
VI. 本研究の限界.....	126
VII. 結語.....	127

第四章 研究 3. ASD 児の適応行動能力と母親の養育力の関係性について	128
I. 背景	128
II. 目的	130
III. 方法	131
III-1. 対象者の選定	131
III-2. 測定方法	131
III-3. データ生成	132
IV. 結果	133
V. 考察	142
V-1. 事例 C	142
V-2. 事例 D	143
V-3. 事例 E	144
V-4. 研究 3 (事例 C~E) 全体考察	145
VI. 本研究の限界	147
VII. 結語	148
第五章 総括	149
I. 総合考察	149
II. 今後の展望と研究の限界	152
III. 結語	153
IV. 謝辞	154
引用文献	155
添付資料 1	164
養育レジリエンス要素質問票 (PREQ) (研究 3)	164
添付資料 2	165
自由記載: アンケート用紙 (研究 3)	165

第一章 序章

I. 背景

DSM-5¹⁾における自閉スペクトラム症 (Autism spectrum disorder: ASD) の診断基準の内、社会的コミュニケーションおよび相互関係における持続的障害は以下の①～③で構成されている。

- ①社会的・情緒的な相互関係の障害
- ②他者との交流に用いられる非言語的コミュニケーションの障害
- ③年齢相応の対人関係性の発達や維持の障害

自閉傾向のある子どもは対人交流の障害を持ち、発話の困難さから非言語的な手段（指差し、ジェスチャー、サイン）を多く用いていること、親が子どもの要求が理解できないことが指摘されている⁶⁾。ASD 児の社会性の障害によるコミュニケーションの困難さや強いこだわり、および ADHD 児の不注意や強い衝動性は、不登校、引きこもり、各種精神神経的症候、いじめ、虐待などの社会的不適応の原因になりうると言われている⁶⁾。さらに、障害のある子どもは育児に手がかかりやすく、以前から虐待ハイリスクであると指摘されている。そして、発達障害と子ども虐待の関連についても注目されている。宮本⁷⁾、白石⁸⁾は自閉症児の虐待予防のポイントとして以下の 6 点を挙げている。①療育の責任を母親だけに負わせないように父親の参加を促す、②日常生活場面においても夫婦の協力を強く促す、③療育の成果をあげ、子どもに対するネガティブなイメージをポジティブなものに変換させる、④両親・家族に療育の効果を具体的に説明して、それが日常生活に取り入れられ定着するように働きかける、⑤夫婦以外の家族構成員の理解や協力を促す、⑥地域の中で子どもと暮らしていくことが容易になるように地域の情報や社会資源の活用についてレクチャーする。

つまり、発達障害のある子どもを持つ親は子どものコミュニケーション方法や親子関係の構築に苦慮している可能性が考えられる。実際、発達障害児を持つ保護者は日々の子育て

を通じてストレスを感じ、抑うつ度が高まることが報告されている^{2) 3)}。また、保護者の精神的健康は養育行動に関連し⁴⁾、その養育行動は子供に影響を与えることも指摘されている⁵⁾。しかし中には、コミュニケーションが成り立っており、良好な親子関係を築いている親子も存在する。

非言語的な交流に関する研究には、柳谷ら⁹⁾の、行動評価尺度の開発を目的とした行動分析を行った研究、岩永ら¹⁰⁾の広汎性発達障害児に対する小集団作業療法の治療効果で行った課題の一つにジェスチャーを用いた研究等、子どもの能力向上を促した研究が数多くなされている。

ASD 児と母親のコミュニケーションに関する国内文献レビューを行った先行研究¹¹⁾によると、ASD 児と母親のコミュニケーションに関する文献は全 131 文献であり、その内 ASD 児の特徴に関する文献が 64 文献、ASD 児を持つ母親の子育てに関する文献が 55 文献、ASD 児と母親のやりとりに関する文献が 12 文献であった。この文献レビュー¹¹⁾では、「ASD の子どもと母親の間には接近・回避動因的葛藤をめぐる悪循環があることが報告されている。また、母親と子どもの双方を視野に入れ、治療やセラピーを行い、その中で子どもと母親のやりとりの変化、子どもに対する母親の気持ちの変化についても検討していた。日常生活における親子のコミュニケーションを取り上げた文献は少なかった。」と報告されている。

また、O'Rourke¹²⁾は 15 歳から 17 歳の青年と両親を対象とし、家庭と実験室で家族構造に関する相互作用と両観察環境について比較し、家庭と実験室の間で家族の相互作用に相違があることを示している。さらに、Moustakas¹³⁾らは親やセラピストとの相互作用の記録方法について検討したが、観察結果に相違があることを示している。つまり、親子の日常生活場面におけるやりとりを分析するためには、研究室などの構成された環境ではなく、日常生活場面の観察を行う必要があるといえる。

以上より、知的障害を伴う ASD 児とその母親の日常生活における交流を観察・分析し、

親子の交流の特徴を明らかにする必要がある。さらに、得られた交流の特徴から親子指導のあり方を考察することで、今後の親子指導の一助となると考える。

II. 目的

本研究の目的は、①ASD 児と親の相互作用に関する既知事項を調査すること②知的障害を伴う ASD 児とその母親の交流場面を観察し、その交流が成り立つ要因の分析を行うことで、親子の交流の特徴を明らかにすること③親子の交流の特徴から親子指導のあり方を考察し、今後の親子指導に必要な視点を探求することである。

Ⅲ. 倫理上の配慮

本研究は、国際医療福祉大学大学院の倫理審査委員会（IUHW-20-Io-3）の承認を得て行った。

研究対象者への説明は書類と口頭にて実施し、文書による同意を得た方のみ実験に協力して頂いた。説明内容は、以下①～⑭である。

- ① 研究の名称及び当該研究の実施について研究機関の長の許可を受けている旨
- ② 研究機関の名称及び研究責任者の氏名
- ③ 研究の目的及び意義
- ④ 研究の方法（研究対象者から取得された試料・情報の利用目的を含む。）及び期間
- ⑤ 研究対象者として選定された理由
- ⑥ 研究対象者に生じる負担並びに予測されるリスク及び利益
- ⑦ 研究が実施又は継続されることに同意した場合であっても随時これを撤回できる旨
- ⑧ 研究が実施又は継続されることに同意しないこと又は同意を撤回することによって研究対象者等が不利益な取扱いを受けない旨
- ⑨ 研究に関する情報公開の方法
- ⑩ 研究対象者等の求めに応じて、他の研究対象者等の個人情報等の保護及び当該研究の独創性の確保に支障がない範囲内で研究計画書及び研究の方法に関する資料を入手又は閲覧できる旨並びにその入手又は閲覧の方法
- ⑪ 個人情報等の取扱い
- ⑫ 試料・情報の保管及び廃棄の方法
- ⑬ 研究の資金源等、研究機関の研究に係る利益相反及び個人の収益等、研究者等の研究に係る利益相反に関する状況
- ⑭ 研究対象者等及びその関係者からの相談等への対応

⑪個人情報の取り扱いについては、研究協力者から提供された情報は、個人を特定できないように氏名を暗号化した上で電子データとして管理する。また、⑫に関して、電子データと紙資料はカギのかかるロッカーに入れて保管し、資料の保管期間は10年間とした。

IV. 本研究の構成

本研究は、研究 1「親子の相互作用に関するスコーピングレビュー」、研究 2「知的障害を伴う ASD 児とその親の交流の分析」、研究 3「ASD 児の適応行動能力と母親の養育力の関係性について」の研究 1～3 で構成される。研究 1 では ASD 児と養育者の相互作用に関する研究のマッピングを行い、既知情報を明らかにする。続いて研究 2 では、親子関係が良好な親子を対象に、日常生活場面における親子の相互作用に関する質的研究を実施し、各親子の特徴を検討する。さらに研究 3 において子どもの日常生活場面の適応行動能力と養育者の養育力の関係性を検討していく。

第二章 研究 1. 親子の相互作用に関するスコーピングレビュー

I. 背景

DSM-5¹⁾より、自閉症スペクトラム障害 (Autism spectrum disorder :ASD) の診断基準には、「社会的コミュニケーションと対人相互反応の欠陥」と「行動、興味、または活動の限定された反復的な様式」の2点がある。前者の「社会的コミュニケーションと対人相互反応の欠陥」に含まれる非言語的コミュニケーションの障害は ASD の中心的特徴の一つである。ASD は、自閉症やアスペルガー症候群を総称したものであり、「社会性」「コミュニケーション」「想像力」といった「三つ組み」の障害特性および常同行動や感覚過敏などを認める脳の機能障害である。生まれつきの脳の発達が通常とは異なるために、他人との関わりや学業や就業などに影響し、当事者は「生きづらさ」を、親は「育てにくさ」を感じることもあるといわれている¹⁴⁾。

2012年に実施された先行研究¹¹⁾によると、親子に関する論文のうち、親子のやりとりに着目した研究は約1割と少数であることが報告されている。2020年に筆者がASD児と親の相互作用をPubMedにて検索した際には、1126件がヒットし、その内592件が2009年～2019年の文献であった。そのため、近年増加傾向にある研究内容であることが読み取れた。

今回、ASD児と親の相互作用に関するエビデンスギャップを特定し、今後の研究の必要性を調査するためにスコーピングレビューを実施する。スコーピングレビューとは、既存のエビデンスから主要な概念を統合してマッピングするレビューであり、現在の診療における知識やエビデンスのギャップに対処するために活用されてきた。作業療法分野においても2012年のガイドラインの策定に伴い研究のギャップを明らかにすることが求められるようになり、近年スコーピングレビューの実施件数が増加傾向にある。

II. 目的

既存のASD児を持つ親子の関係に関する文献をマッピングすることで、ASD児と親の関係に関する研究におけるエビデンスギャップを特定し、さらなる研究の必要性を述べることである。

Ⅲ. 方法

ASD児と親の相互作用に関する研究をマッピングし、研究ギャップを特定するためにスコーピングレビューを選択した。スコーピングレビューは、Arksey and O'Malley¹⁵⁾ およびJoanna Briggs Institute guidelines for scoping review¹⁶⁾ のスコーピングレビューガイドラインに沿って実施した。また、ArkseyとO'Malleyが述べた以下(1)～(5)の5つのステップに従って、スコーピングレビューを完成させた。5つのステップとは、(1)リサーチクエスションの特定(2)関連する論文の特定(3)対象論文の選択(4)データ抽出(5)研究のまとめと報告である。

Ⅲ-1. リサーチクエスションの特定

本研究のリサーチクエスションは以下の通りである。

- ・研究被験者の人数・年齢・性別はASD児・養育者ともにどうなっているか？
- ・研究が実施されている場所は自宅・研究室・その他のうちどこか。また、その環境は構造化されているか？
- ・研究が掲載されている雑誌の国はどこか？
- ・研究では何分間の親子の観察が分析されているか？

Ⅲ-2. 関連する論文の特定

論文の抽出は、医学中央雑誌web版、PubMed、CINAHL、MEDLINE、Cochrane Libraryの5つのデータベースを使用した。検索ワードは"interaction"AND"parent-child"AND"autism spectrum disorder"、検索年は2010年-2020年の原著論文のみを対象として検索を実施した。

Ⅲ-3. 対象論文の選択

本研究では、ASD 児とその養育者の相互作用に関する論文の内、日本語と英語で書かれた論文のみを対象とした。論文の選択基準は以下の4点「ASD 児と養育者の相互作用に関する原著論文」「日本語または英語論文である」「2010年～2020年の論文」「ASD 児の年齢は20歳以下」である。除外基準は以下の4点「検索ワードに適合していない文献」「ASD 児以外も対象としている文献」「介入研究である」「親子双方に着目していない文献」「原著論文以外の文献」と設定した。

タイトルとアブストラクトはASD 児と養育者の相互作用とは関係のない論文や重複した論文を排除するため、著者全員で確認をした。その後、筆頭著者が中心となって全文のスクリーニングを行い、論文が選択基準を満たしているかどうかを副研究指導教員と協議の上、判断した。不一致があった場合には研究指導教員の判断を仰ぎ、全員で判断した。

Ⅲ-4. データ抽出

チャートニングのテンプレートは、研究疑問に合わせて検討し、指導教員・副指導教員からの助言や議論の上作成した。著者は論文のデータを抽出し、副指導教員が信頼性を再確認した。筆頭著者と副指導教員の意見が一致しなかった場合には指導教員を含めて議論をし、コンセンサスを得た。チャートニングでは以下「論文題目」「著者名」「掲載誌」「掲載年」「検索したデータベース」「出身国（第一著者の所属）」「観察場所」「観察場所の構造化の有無」「観察時間」「対象者の基本情報（年齢・性別）」「対象者数」を調査した。研究テーマは、筆頭著者がすべての論文のデータ抽出を担当し、次に副指導教員による確認を経たのちに指導教員が全体の確認を行うことにより信頼性を担保した。

Ⅲ-5. 研究のまとめと報告

論文の質を担保するため、筆頭著者は、研究指導教員および副指導教員に助言をいただきながら、結果の確認および考察を行った。

IV. 結果

IV-1. 検索方法

過去10年間で434件の論文がヒットした。まず初めに183件の重複論文を除外し、続いてタイトルとアブストラクトの確認を行い211件の論文が除外となった。最後に全文確認を行い10件の論文を除外した結果、28件の論文が対象となった(図1参照)。

また、全文確認の段階で10件の論文を除外した理由は以下の通りである。検索ワードに適合していない文献(n=2), ASD児以外も対象としている文献(n=1)介入研究である(n=2)親子双方に着目していない文献(n=2)原著論文以外の文献(n=3)。

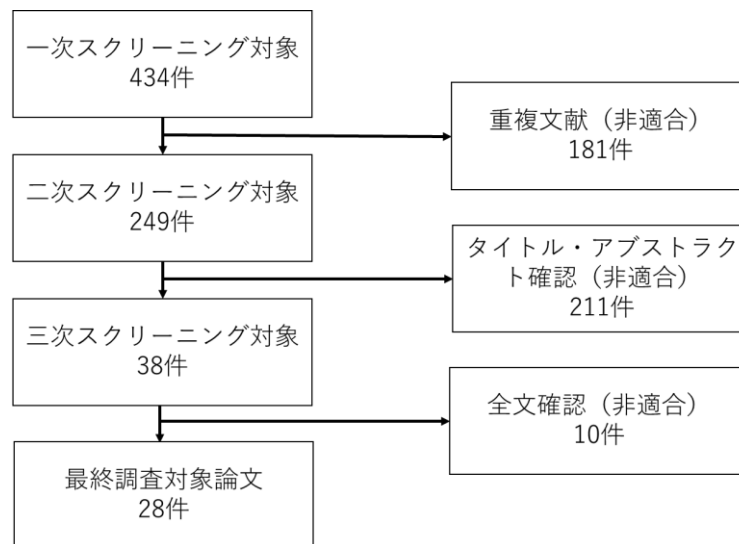


図1. 論文選定のフローチャート

IV-2. 最終調査対象論文の特徴

IV-2-1. 論文の特徴

最終調査対象論文¹⁷⁻⁴⁴⁾を表1に示す。また、対象論文の特徴を図2に示す。調査対象となった論文はアメリカからもっとも多く出版されていた (n=22)。続いてオーストラリア (n=4)、イスラエル (n=4) が多かった。イギリス、デンマーク、ベルギー、スウェーデン、ルクセンブルグ、フランス、中国 (n=1) はわずかであった。

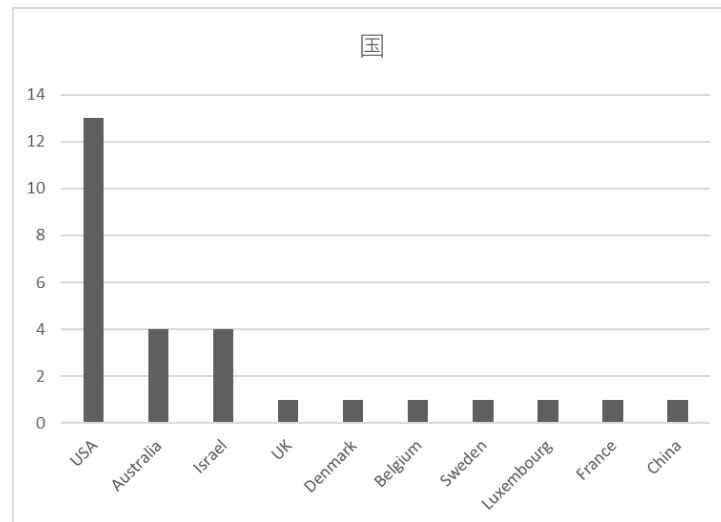


図2. 対象論文の特徴 (国)

表 1. 最終調査対象論文

著者/年	論文題目	国	対象者 (児)			対象者 (養育者)			観察		
			年	性別	対象者数	年	子どもとの関係	対象者数	場所	構造化の有無	観察時間
Baker JK, et al. 2010 【17】	A pilot study of maternal sensitivity in the context of emergent autism.	アメリカ	2-18カ月 (M = 7.18, SD = 4.38),	女児16%	3歳時点でASD診断12人 (全員が高リスク群), TD21人	記載なし	母親	33	研究室	構造化	5分
Wan MW, et al. 2019 【18】	A systematic review of parent-infant interaction in infants at risk of autism.	イギリス	記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	記載なし	不明	記載なし
Baker JK, et al. 2015 【19】	Brief Report: A Pilot Study of Parent-Child Biobehavioral Synchrony in Autism Spectrum Disorder.	アメリカ	4-10歳 (M=6.70)	男児79%	28	記載なし	主介護者 (父親n=1)	28	黒い壁と2つの大きな鏡がある部屋	構造化	4分
Flippin M, et al. 2015 【20】	Fathers' and Mothers' Verbal Responsiveness and the Language Skills of Young Children With Autism Spectrum Disorder.	アメリカ	40-69カ月 (M=53.3)	男児12人、女児4人	16	母親:30-47歳 (M=38.0), 父親:31-56歳 (M=39.6)	父親と母親半数ずつ	父親16人、母親16人	記載なし	半構造化	15分
Fusaroli R, et al. 2019 【21】	Hearing me hearing you: Reciprocal effects between child and parent language in autism and typical development.	デンマーク	TD:20.27カ月, ASD : 32.98カ月 (Mean)	TD: 29男児, 6女児 ASD : 28男児, 4女児	TD:35 ASD:32	記載なし	父親と母親	記載なし	自宅	半構造化	30分
Hudry K, et al. 2018 【22】	Interaction Behaviors of Bilingual Parents With Their Young Children With Autism Spectrum Disorder.	オーストラリア	2-6歳 (Bilingual: 21-82(53.63), Monolingual:35-68(50.00)か月)	記載なし	48 (9人の除外を含む)	Bilingual : 31-71歳 (M=40.47), Monolingual : 28-45歳 (M=38.30)	英語が第二言語のバイリンガル(n = 19;父親2人, 祖母1人), 英語が第一言語のモノリンガル(n = 20; 父親3人)	39	記載なし (自宅以外)	半構造化	記載なし
Wicks, Rachelle, et al. 2020 【23】	Looking or talking: Visual attention and verbal engagement during shared book reading of preschool children on the autism spectrum.	オーストラリア	39-70カ月 (M=56.68, SD=6.19)	男児33人、女児7人	40	21-30歳: N=3 (7.5%) 31-40歳: N=26 (65.0%) 41-50歳: N=10 (25.0%)	記載なし	39	・自宅 ・療育センター (n=1)	場所は非構造化だが、物品 (本) は指定されている	指定なし (読書の時間)

表 1. 最終調査対象論文 (つづき)

著者/年	論文題目	国	対象者 (児)			対象者 (養育者)			観察		
			年	性別	対象者数	年	子どもとの関係	対象者数	場所	構造化の有無	観察時間
Hirschler-Guttenberg Y, et al. 2015 【24】	Mothering, fathering, and the regulation of negative and positive emotions in high-functioning preschoolers with autism spectrum disorder.	イスラエル	ASD:63.38 (M=12.35)カ月, TD:53.56 (M=13.83)カ月	ASD:5女児 TD:6女児	ASD:39 TD:40	母親: ASD:37.6 (SD = 4.45) TD:36.14 (SD = 4.39), 父親: ASD:40.34 (SD = 5.33) TD:38.6 (SD = 4.86)	父親と母親	父親79人、母親79人	自宅	半構造化	・7分間の自由遊び ・5分間のパベットとの遊び
Rabin SJ, et al. 2019 【25】	Parent-Adolescent Reciprocity in a Conflictual Situation Predicts Peer Interaction in Adolescents With ASD.	イスラエル	12-17歳 (M=ASD: 13.16, TD: 12.90)	28男児, 2女児 (ASD,TD共に)	ASD : 30 TD : 30	ASD:M=46.83 (SD = 5.27), TD: M=39.37 (SD=3.66)	ASD・TDともに	母親27人, 父親3人	記載なし	構造化	5分
Flippin M, et al. 2018 【26】	Parental Broad Autism Phenotype and the Language Skills of Children with Autism Spectrum Disorder.	アメリカ	40-69カ月 (M=53.3)	男児12人、女児4人	16	母親:30-47歳 (M=38), 父親:31-56歳 (M=39.6)	父親と母親半数ずつ	32	研究室	半構造化	15分
Baker JK, et al. 2019 【27】	Parental criticism and behavior problems in children with autism spectrum disorder.	アメリカ	4-11歳(M=6.48)	男児78%	46	記載なし	父親5%	40	大学の研究室	半構造化	4分
Boorum O, et al. 2020 【28】	Parental Responsiveness During Musical and Non-Musical Engagement in Preschoolers with ASD.	アメリカ	25-56カ月 (M=40.33, SD =9.23)	女児4人	12	26-40歳 (M=34.27, SD=4.08)	母親8人,父親3人, 祖母1人	12	記載なし (自宅以外)	半構造化	10分
Bontinck, Chloë, et al. 2018 【29】	Parent-Child Interaction in Children with Autism Spectrum Disorder and Their Siblings: Choosing a Coding Strategy.	ベルギー	M=ASD: 68.06, NonASD:47.75カ月	6組の男児-男児兄弟 (ASD—nonASD), 7組の男児-女児兄弟, 2組の女児-男児兄弟, 1組の女児-女児兄弟	ASD : 16 ASDのない弟妹 : 16	27-47歳 (M=33.87, SD = 4.77)	母親	16	記載なし (自宅以外)	半構造化	7分 (中央5分をコード化)
Hudry K, et al. 2013 【30】	Predictors of parent-child interaction style in dyads with autism.	オーストラリア	24-59カ月 (M = 44.8)	女児14人	151	20 and 73 years (M = 33.9, SD = 6.9)	父親18人	151	記載なし (自宅以外)	半構造化	15-20分

表 1. 最終調査対象論文 (つづき)

著者/年	論文題目	国	対象者 (児)			対象者 (養育者)			観察		
			年	性別	対象者数	年	子どもとの関係	対象者数	場所	構造化の有無	観察時間
Strid K, et al. 2013 【31】	Pretend play, deferred imitation and parent-child interaction in speaking and non-speaking children with autism.	スウェーデン	M=ASD:66.8, TD:35.0カ月	ASD:男児18人 TD:男児12人	TD : 23 ASD : 20	記載なし	記載なし	記載なし	記載なし (自宅以外)	半構造化	24分
Bottema - Beutel, Kristen, et al. 2020 【32】	Question-response-evaluation sequences in the home interactions of a bilingual child with autism spectrum disorder.	アメリカ	5歳 (with ASD)	男児1人	1	母親:32歳, 父親 31歳, 妹:3歳, いとこ2歳	父,母,妹,いとこ	4 (1家族)	自宅	非構造化	230分 (1日2回 以上、10日間)
Ostfeld-Etzion S, et al. 2016 【33】	Self-regulated compliance in preschoolers with autism spectrum disorder: The role of temperament and parental disciplinary style.	イスラエル	ASD:36-82カ月 (M=63.4),TD:29-78カ月 (M=53.6)	ASD:女児5人, TD:女児6人	TD : 40 ASD : 40	記載なし	母親80人, 父親80人	160 (80家族)	自宅	半構造化	90分×2
Patterson SY, et al. 2014 【34】	The association between parental interaction style and children's joint engagement in families with toddlers with autism.	アメリカ	M=31カ月, SD =3カ月	男児70人	85	記載なし	母親76人, 父親8人, 祖母1人	85	記載なし (自宅以外)	半構造化	10分
Costa AP, et al. 2019 【35】	The role of alexithymia in parent-child interaction and in the emotional ability of children with autism spectrum disorder.	ルクセンブルク	3-13歳 (M=8.68, SD=2.42)	ASD:女児4人, TD:女児9人	ASD:35、TD : 41	26-53歳 (M=39.88; SD=4.70)	父親もしくは母親 (両親のどちらか)	76	研究室	半構造化	3分45秒
Brigham NB, et al. 2010 【36】	The sequential relationship between parent attentional cues and sustained attention to objects in young children with autism.	アメリカ	18-50カ月 (M=31.9)	記載なし	25	記載なし	母親24人, 父親1人	25	大学の研究室	半構造化	20分
Plumet MH, et al. 2015 【37】	Typical and atypical pragmatic functioning of ASD children and their partners: a study of oppositional episodes in everyday interactions.	フランス	ASD: 5;11-9;2, TD:2-6;6歳	男児のみ	ASD:10,TD:15	記載なし	記載なし	25家族	自宅	非構造化	6時間×3回観察 し、内1時間を分析

表 1. 最終調査対象論文 (つづき)

著者/年	論文題目	国	対象者 (児)			対象者 (養育者)			観察		
			年	性別	対象者数	年	子どもとの関係	対象者数	場所	構造化の有無	観察時間
Goldberg MC, et al. 2017 【38】	Examining the reinforcing value of stimuli within social and non-social contexts in children with and without high-functioning autism	アメリカ	ASD:9.56, TD:9.43歳	男児41人	ASD:21,TD:20	記載なし	記載なし	41	医療機関内の研究室	構造化	30秒
Wang H, et al. 2020 【39】	Synchrony of Respiratory Sinus Arrhythmia in Parents and Children with Autism Spectrum Disorder: Moderation by Interaction Quality and Child Behavior Problems.	中国	ASD:8.00, TD:7.32歳	ASD:男児24人,TD:男児22人	ASD:29,TD:39	記載なし	記載なし	68	大学の研究室	構造化	4分
Beurkens NM, et al. 2013 【40】	Autism severity and qualities of parent-child relations.	アメリカ	M = 7.4 歳, SD=2.2歳	男児19人、女児6人	25	33-61歳	母親80%, 父親20%	25	クリニック	半構造化	10分
Westerveld, Marleen F, et al. 2020 【41】	Shared Book Reading Behaviors of Parents and Their Verbal Preschoolers on the Autism Spectrum.	オーストラリア	48-70カ月 (M=57.53; SD=6.22)	男児39人、女児8人	51	記載なし	記載なし	51	自宅	場所は非構造化だが、物品 (本) は指定されている	199~1116秒、M=391、SD=174
Zaidman-Zait A. 2020 【42】	The contribution of maternal executive functions and active coping to dyadic affective dynamics: Children with autism spectrum disorder and their mothers.	イスラエル	3-6歳 (M=4.6, SD=0.9)	男児40人	40	35.4歳 (SD=4.5)	母親	40	自宅	半構造化	30分
Haven, Erin L, et al. 2014 【43】	The relation of parent-child interaction qualities to social skills in children with and without autism spectrum disorders.	アメリカ	3歳0カ月-6歳11カ月 (TD:56.62 (SD10.48)、ASD:69.57 (11.14))	TD:男児67%, ASD:男児86%	42	記載なし	TD:父親10%, ASD:父親5%	42	・自宅 ・大学の研究室	半構造化	5分
Saxbe DE, et al. 2017 【44】	HPA axis linkage in parent-child dyads: Effects of parent sex, autism spectrum diagnosis, and dyadic relationship behavior.	アメリカ	2-6歳の未就学児	ASD:女児5人, TD:女児6人	ASD:40, TD:40	記載なし	父親と母親半数ずつ	160	自宅	場所は非構造化だが、物品 (本) は指定されている	7分

IV-2-2. 研究環境の特徴

研究環境の特徴を図3～5に示す。研究環境は研究室（n=9）、自宅（n=8）、研究室と自宅の両方（n=2）、記載なし（n=9）であり、研究室と自宅が約半数ずつとなっていた。また、研究環境が構造化されている（n=21）、構造化されていない（n=7）となっており、構造化された場面で観察されている研究の割合が多かった。観察時間は5分未満（n=8）、6～10分（n=7）、11～15分（n=2）、16～20分（n=2）、21～25分（n=1）、26～30分（n=2）、31分以上（n=3）、記載なし（n=3）であり、観察時間が10分以下と設定されている論文が過半数を占めていた。

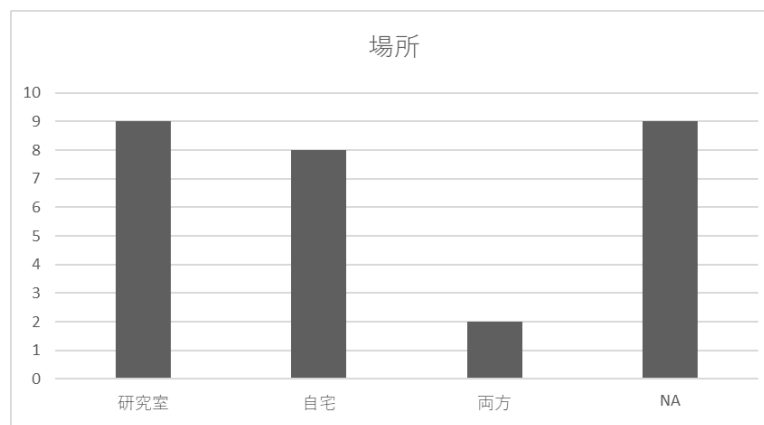


図3. 対象論文の特徴（観察場所）

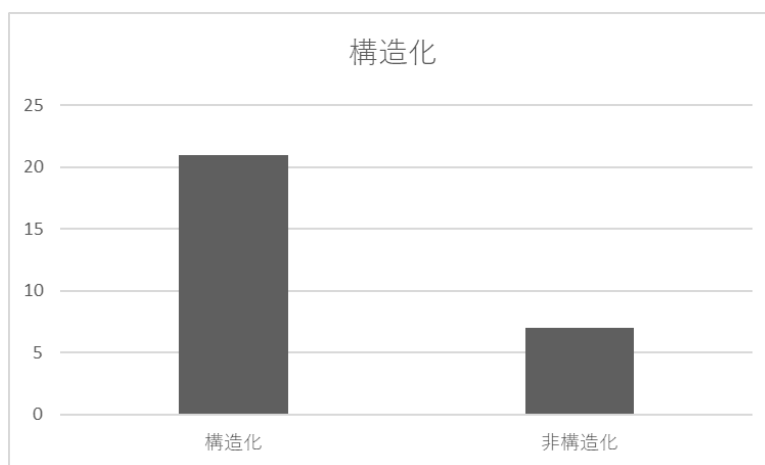


図 4. 対象論文の特徴（構造化の有無）

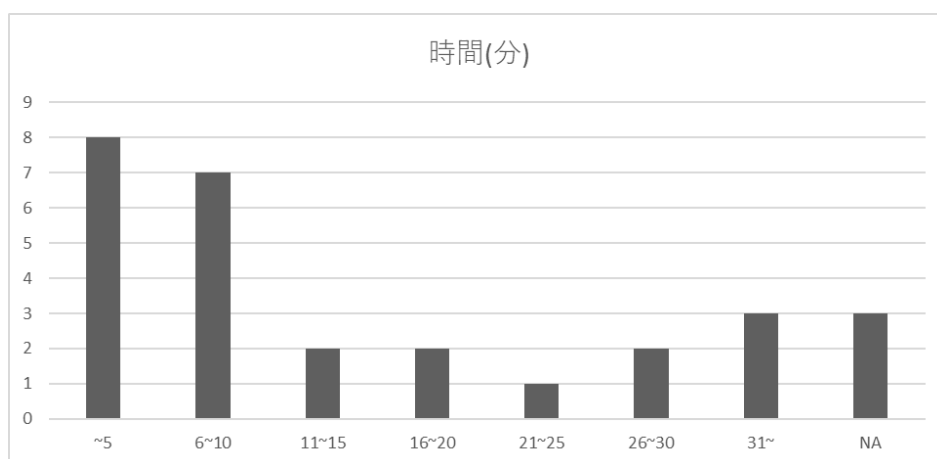


図 5. 対象論文の特徴（観察時間）

IV-2-3. 対象児の特徴

対象児の特徴を図6～9に示す。対象児の属性としては、ASD児のみを対象(n=16) ASD児と健常児を対象(n=12)であった。被験者の数は1～10人(n=1)、11～20人(n=7)、21～30人(n=6)、31～40人(n=8)、41～50人(n=3)、51～100人(n=1)、101人以上(n=1)、記載なし(n=1)であり、対象児を11人～40人と設定している研究が多かった。対象児の性別は、全研究対象児の71.2%が男児、17.8%が女児、記載なしが11%と男児の割合が多かった。年齢は0～5歳(n=19)、6～12歳(n=7)、13歳以上(n=1)、記載なし(n=1)と未就学児が最も多く、続いて小学生が多かった。

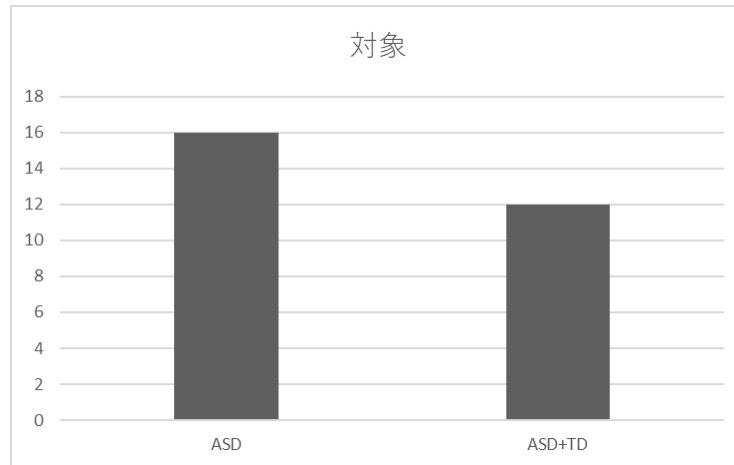


図6. 対象児の特徴(診断)

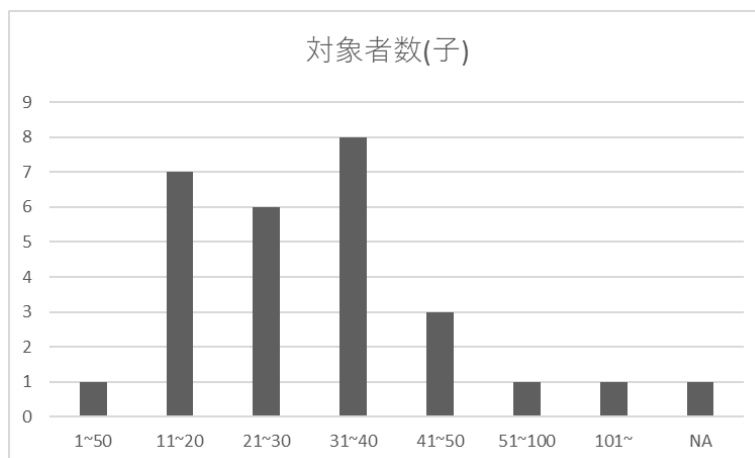


図7. 対象児の特徴(対象児数)

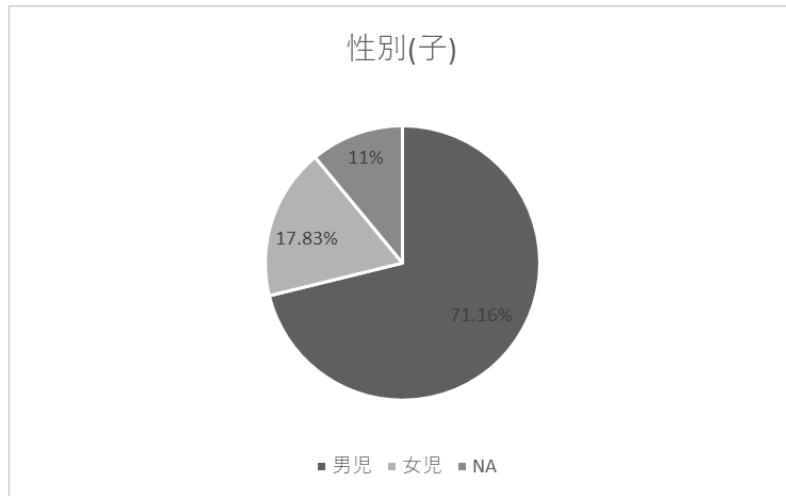


図 8. 対象児の特徴（性別）

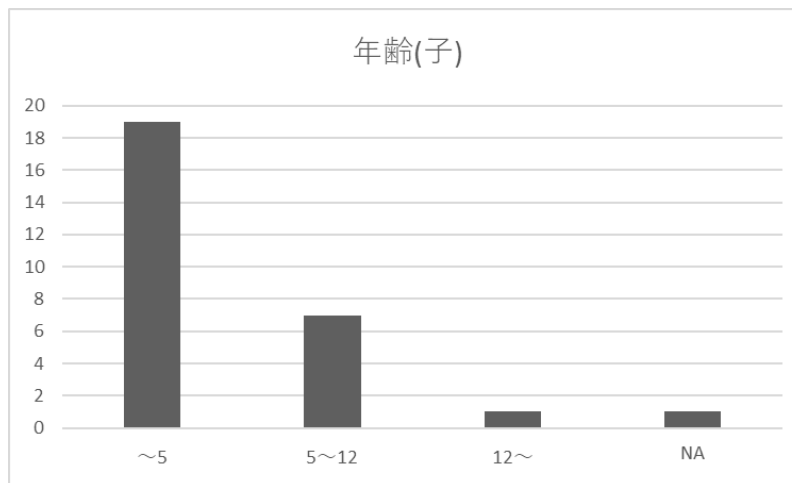


図 9. 対象児の特徴（年齢）

IV-2-4. 対象者（養育者）の特徴

対象となった親の特徴を図 10～12 に示す。親の対象者数は、1～10 人 (n=1), 11～20 人 (n=2), 21～30 人 (n=4), 31～40 人 (n=6), 41～50 人 (n=2), 51～100 人 (n=6), 101 人以上 (n=4), 記載なし (n=3) であった。対象児の数と比較すると、子どもと同数 (n=18), 子どもの 2 倍の数 (n=6), その他 (n=1), 記載なし (n=3) となっていた。養育者の子どもとの関係としては、母親が 25.0%, 父親が 14.3%, 母親または父親が 11.4%, 祖母 0.4%, 祖父 0%, 記載なしが 25% となっており、母親が最も多かった。年齢は、31～35 歳 (n=4), 36～40 歳 (n=6), 41 歳以上 (n=1), 記載なし (n=17) であった。

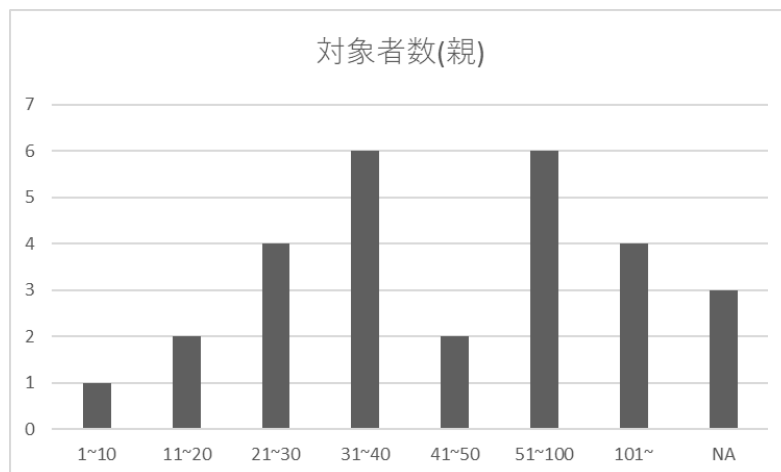


図 10. 親の特徴 (対象者数)

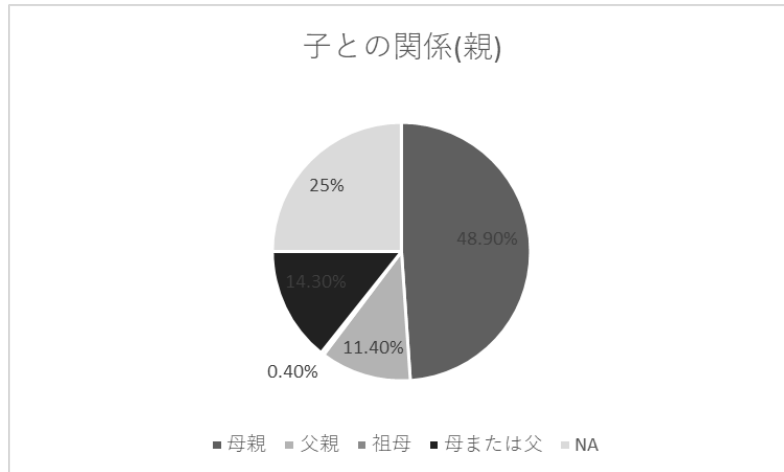


図 11. 親の特徴 (子どもとの関係)

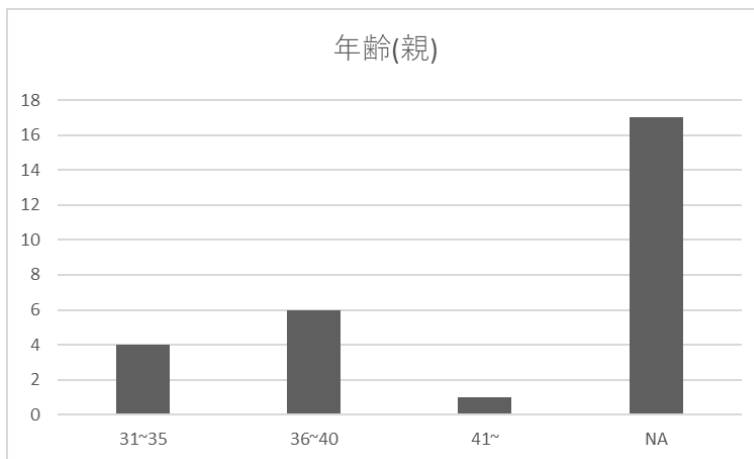


図 12. 親の特徴 (年齢)

V. 考察

このスコーピングレビューは、既存の ASD 児とその養育者の関係性に関する文献をマッピングすることで、ASD 児と養育者の関係性に関する研究におけるエビデンスギャップを特定し、さらなる研究の可能性を述べる事を目的として実施した。

V-1. マッピングされた論文の特徴および実験環境

調査対象となった 28 件の論文のうち、親子の相互作用に関する研究は欧米で最も多く実施されていた。一方アジアは 1 件のみであり、日本の論文は含まれなかった。親子の相互作用の方法は言語や文化の影響によって左右される可能性が考えられるため、今後日本国内でも研究を実施していく必要があると考える。

研究環境としては、研究室で実施されている研究と自宅で実施されている研究がどちらも約半数であった。自宅内で観察されている研究の 75%は、自宅内において構造化した環境を設定し、撮影・分析を行っていた。そのため、対象文献のほとんどが構造化された環境において研究を遂行していた。しかし構造化された環境では、日常生活場面における親子の相互作用とは異なる結果が出現する可能性が考えられる。また、ASD 児・者は 1 つの状況でスキルや行動を学んでも、異なる条件でそのスキルを応用することが非常に困難であることが指摘されており⁴⁵⁾、ASD 児を指導する際にこの般化の問題はきわめて重要な課題となる⁴⁶⁾。さらに、日常場面でのコミュニケーション・スキルの指導の際には対象児の日常場面における行動をアセスメントし、その結果を元に指導方法を検討する必要があると言われている⁴⁷⁾。以上より、日常生活場面に着目し、観察を実施していく余地があると考えられる。また、観察時間が 10 分以内の研究が 53%と過半数を占めていた。しかし、日常生活における親子のやりとりを分析するためには、10 分程度の短時間では不十分であると考えられる。そのため、今後、観察時間を延長し、幅広いシチュエーションにおいて研究を実施していく余地がある。

V-2. 対象児の特徴

対象児は5歳以下の未就学児が60%、中学生以上は3%（1人）のみであったことから、中高生、つまり青年期にあたる年齢の子どもを対象とした研究は限られていることが分かった。青年期の定義は諸説あるが、本研究では14歳～22歳を青年期とし、14歳～17歳を青年期前期、17歳～22歳を青年期後期と分類する説を採用する⁴⁸⁾。また、本研究においては、14歳～17歳の青年期前期を青年期と定義し、述べていく。

発達障害児を持つ家族の支援においては、先行研究で幼児期後期まで育児疲労が持続し慢性化し、自信の喪失や子を愛せない親という自らの疑念の誘因となり、自責の念や罪障感という発達障害特有の母親の抑うつ状態を作り出す⁴⁹⁾と言われており、会話やジェスチャーなどの親子間のコミュニケーション方法は未就学児では確立されているとはいいがたい。青年期の年代に着目することにより、成長過程である程度確立された親子のコミュニケーション方法に関する知見を得ることができる可能性がある。また、対象児の70%が男児であったが、これはASDの性別による診断の男女比は4:1⁵⁰⁻⁵²⁾と報告されており、男児の方が多く結果が反映されていると推察される。

対象児の人数は、20人以下が14%、20～50人が43%、50人以上が32%という結果であった。この結果からは、相互作用を研究するにあたり、親子1組1組を質的に調査している研究数は少ない可能性が示唆された。これは研究室での研究が多いという観察環境とも関係性があると考えられる。

V-3. 養育者の特徴

親の特徴としては、母親を対象としている研究が最も多く、次いで父親が多かった。これは主な養育者が母親である割合が高いことを表した結果であると考えられる。母親と父親や祖父母では子どもとの交流方法や普段の交流時間が異なる可能性があるため、養育者の属性によって児との相互作用が異なる可能性がある。そのため、母親以外の養育者に着目した研究を実施していく余地があることも示された。

VI. 本研究の限界

本研究は、Arksey and O'Malley¹⁵⁾ および Joanna Briggs Institute guidelines for scoping review (2020 version)¹⁶⁾ のガイドラインに基づいて実施した。今回のスコーピングレビューでは、親子の相互作用に関する文献のマッピングを実施したが、各論文の質を調査していないため、研究結果の信頼性については不明である。また、今回は英語と日本語で記載された文献のみを対象としているため、その他の言語で出版されている文献については調査できていない。

VII. 結語

研究 1 では、ASD 児と親の相互作用に関する論文をマッピングし、調査対象となった論文の特徴、各論文の対象者である養育者と対象児の特徴について示した。その結果、論文の特徴としては、この分野における日本国内やアジアにおける研究数が少ないことや、構造化された環境で実施されている研究が多いことが分かった。被験者の特徴としては、養育者は母親を対象としていることが多く、ASD 児の特徴としては未就学児を対象としている研究が多いこと等が示された。今後、日常生活における養育者と ASD 児の相互作用の特徴を把握する上で、非構造化場面において研究を進めていく必要があること、また、親子のコミュニケーション方法がある程度確立されている青年期に着目して研究を進めていく余地があることが示唆された。

第三章 研究 2. 知的障害を伴う ASD 児とその親の交流の分析

I. 背景

先に述べたように、自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorders: ASD) は社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応の障害や常同的・限定的行動を特徴としている。このような ASD 特性は児童期から青年期への移行期において社会的不適応だけでなく、心理面にもネガティブな影響を及ぼすことが示されている。また、ASD 児の養育者においても抑うつ・不安・育児ストレスが強い^{53) 54)}と言われている。保護者の精神的健康は養育行動に関連し⁵⁵⁾、その養育行動は子どもに影響を与えることが指摘されており⁵⁶⁾、親子は相互に作用し合っていると見える。先行研究によると、ASD 児の親は支配的な行動や否定的な行動が多い⁵⁷⁾とも言われているが、中には青年期の ASD 児と良好な関係性を築いている親子も存在する。

そこで研究 I では、ASD 児と親の相互作用に関する既知事項を調査するため、スコーピングレビューを実施した。その結果、未就学児を対象とした研究、そして構造化された環境における研究が多いことが分かった。しかし構造化された環境は日常生活とは多少なりとも異なる環境であるため、親子の自然な相互作用を観察することは困難であると予想される。先行研究においても、家庭と実験室では家族の相互作用に相違があることが示されている¹³⁾。そのため、関係性の良好な親子の日常のコミュニケーションの様相を把握することが、今後の支援の一助となると考える。また、観察時間は 10 分程度が過半数を占めていた。以上より、ASD 児と親の相互作用の特徴を把握するためには、非構造化場面、つまり、日常生活場面において研究を進めていく必要があることが示唆された。さらに、良好な関係性を築くことができている親子を対象に研究を実施することで、作業療法士が ASD 児とその養育者に関わる際の知見を得ることができると考える。対象児の年齢については、先行研究では未就学児を対象としている研究が多いという結果であった。しかし、未就学児では、親子のコミュニケーション方法を模索している段階である可能性が高いため、親子のコミ

コミュニケーション方法がある程度確立された青年期のASD児に着目し研究を進めていく余地があることが示唆された。今後青年期に着目することで、親子の成長過程で確立されたASD児と養育者のコミュニケーションについて知ることができると考えられる。また、知的障害の有無について、ASD児はその有無に関わらず、適応行動能力の低さが認められる。知的障害のあるASD児と知的障害のないASD児で比較すると、知的障害のないASD児は、「読み書き」や「微細運動」など学業面で適応の問題が生じにくい。一方、知的障害のあるASD児は、より広範囲に適応行動能力の低さが出現すると言われている。これらの結果より、生活全般においてより困難さが強く現れる可能性が高いにも関わらず、良好な関係性を築くことができている知的障害を伴う青年期のASD児と親のコミュニケーション方法を日常生活場面に着目して研究していく必要があると考える。

Ⅱ. 目的

関係性が良好な知的障害を伴う青年期のASD児と養育者の交流場面を観察し、その交流が成り立つ要因の分析を行うことで、親子の交流の特徴を明らかにすることである。

Ⅲ. 方法

Ⅲ-1. 対象者の選定

対象者は、知的障害を伴う ASD 児とその養育者である。対象者の条件を「知的障害を伴う ASD 児とその親」「親子関係が良好であり、親子のコミュニケーションが成り立っていること」とし、以上の条件を満たす親子を ASD の親子を支援する NPO 団体の責任者・発達支援センターの施設長・特別支援学校の教員等から推薦してもらった。さらに、親子からも関係性が良好であるとの回答を得た。その中で口頭および書面にて同意が得られた親子を本研究の対象とした。

Ⅲ-2. 環境設定

子供が慣れ親しんでおり、自然な親子の相互交渉が得られやすい場所を養育者に提案して頂いた。その後、感染症や怪我など環境面のリスクを検討し、場所を決定した。

Ⅲ-3. 測定方法

観察項目は、作業療法評価学⁵⁸⁾でコミュニケーション能力の非言語として挙げられている「表情・視線・姿勢（うつむいている、前傾姿勢など）・動作（手遊びや貧乏ゆすりなど）」と発語である。親子の交流場面のビデオ撮影を 1 時間程度実施した。養育者には研究概要を説明し、内容の理解が得られたのちに研究を開始した。親子のコミュニケーション場面の撮影とフィールドノートの記載に関しても承諾を得た。

親子の自然な相互作用が出現している場面を撮影するため、以下の配慮を行った。

- ① 事前に養育者に自然な親子の相互作用が得られやすい環境を聴取する。
- ② 研究者の存在に慣れてもらうため、測定日以前に、ビデオ撮影をしない状況で親子の活動に参加する時間を設ける。

③ ビデオ撮影時には、ストレスの軽減のため、真正面からの撮影は避ける

ビデオ撮影が困難な場面ではフィールドノートを使用し、子どもの反応・養育者の反応・その他をメモした。養育者には後日面接を行い、子どもの反応の意味が不明な部分や聞き取り困難であった場面の聴取を行った。

Ⅲ-4. データ生成

撮影されたビデオと観察内容を文章化（図13，表2）、カード化（図14，図15）し、カテゴリ化を実施した。フィールドノートも同様に文章化を行った。データ生成では、データの文章化の段階は鯨岡⁵⁹⁾の手法を参考とし、その後、藤本⁶⁰⁾らの先行研究を参考にカテゴリ化を行った。全体の流れは以下の通りである。尚、この過程はビデオ分析の経験者である指導教員と共に実施した。

1. ビデオ記録を文字起こしし、文章化する。
2. 1番の文章について、「誰から誰に働きかけたのか」「働きかけた内容と生じた反応」を抽出し、カード化する。
3. 「誰から誰に働きかけたのか」毎に区分する。
4. 作成した区分（カード）毎に、「生じた反応」に名称を付ける。これが小カテゴリとなる。
5. 小カテゴリを内容の類似性に従って組み合わせ、中カテゴリを作成する。
6. 中カテゴリを内容の類似性に従って組み合わせ、大カテゴリを作成する。中カテゴリから大カテゴリを作成する段階では、類似するカテゴリを全て組み合わせる。そのため、大カテゴリ同士で類似性を持つものは存在しない。

本研究では、「誰から誰に働きかけたのか」に関して、子どもの行動から起こる養育者の

反応（以下、子から母）と、養育者の行動から起こる子どもの反応（以下、母から子）の2つに分類した。

以下、文章化の例（図13）について述べる。図13 シーン①では、母親は歩きながら子どもへ視線を向け、子どもの前に右手の示指を出し「ラーメンと」と子どもに質問をしている。この場面は、“子どもを見ながら、子どもの前に右手の示指を出し、「ラーメンと」と聞く”と文章化した（表2 シーン①）。図13 シーン②では、子どもは歩きながら母親が出した右手の示指へ視線を向けている。この場面は、“母親が出した右手の示指を見る”と文章化した（表2 シーン②）。図13 シーン③は、母親は歩きながら子供へ視線を向け、さらに子どもの前に左手の示指を出し、「パスタ」と話しかけている。この場面は、“子どもを見ながら、さらに子どもの前に左手の示指を出し、「パスタ？」”と聞くと文章化した（表2 シーン③）。

これらのシーン①の場面の文章とシーン②の場面の文章を合わせたものをカード化した。これらのカードは母から子としてまとめた（図14）。同様に、シーン②の文章とシーン③の文章を合わせたものをカード化し（図15）、子から母のカードとしてまとめた。このように、全てのシーンのカード化を実施した。



シーン①



シーン②



シーン③

図 13. 文章化の例

シーン① 母親は歩きながら子供へ視線を向け、子どもの前に右手の示指を出し、「ラーメンと」と話しかけている。

シーン② 子どもは歩きながら母親が出した右手の示指へ視線を向けている。

シーン③ 母親は歩きながら子供へ視線を向け、さらに子どもの前に左手の示指を出し、「パスタ」と話しかけている。

表 2. 文章化の例

シーン	対象	行動
①	母親	子どもを見ながら、子どもの前に右手の示指を出し、「ラーメンと」と聞く
②	子ども	母親が出した右手の示指を見る
③	母親	子どもを見ながら、さらに子どもの前に左手の示指を出し、「パスタ？」と聞く

母：子どもを見ながら、子どもの前に右手の示指を出し、「ラーメンと」と聞く
子：母親が出した右手の示指を見る

図 14. カードの例（母から子）

子：母親が出した右手の示指を見る
母：子どもを見ながら、さらに子どもの前に左手の示指を出し、「パスタ？」と聞く

図 15. カードの例（子から母）

カテゴリ化の例として、図 14 の母から子のカードは、小カテゴリ「母親が指で提示する選択肢に子供は一方を見る」となる。その他「母親が指で提示する選択肢に子供はどちらも選択する」「母親が指で提示する選択肢に子供は自分の指を指す」などの小カテゴリと組み合わせたり、中カテゴリ「母親の提示する選択肢を選ぶ」が作成される。さらに他の小カテゴリから作成された「母親の話しかけに子供は YES の反応を示す」「母親の話しかけに子供は NO の反応を示す」等の類似性のある中カテゴリと組み合わせることで、大カテゴリ「母親のジェスチャーに YES・NO で反応を返す」が作成される。

Ⅲ-5. 妥当性の検討

ビデオデータの文章化と並行して、指導教員にビデオデータの文章の分析の依頼をし、一致率を調査した。分析の結果、一致率は83%であった。不一致であった箇所は指導教員、副指導教員と共に協議した。

IV. 結果

IV-1. 概要

IV-1-1. 対象者

12 施設に研究の依頼をし、4 施設から同意が得られた。同意が得られた施設の代表者から研究概要を親子に伝達して頂き、研究代表者による研究概要の説明を受けても良いと同意が得られた親子を選定して頂いた。研究代表者は、施設の代表者から推薦して頂いた親子に口頭と書面で研究概要を説明し、8名の親から同意が得られた。そのうち5組が今回の研究対象となった(表3)。3名の除外理由は「双子のASD児であり、個別の撮影が困難」「撮影されたビデオに母親が映っていない場面が多かった」「ASDの確定診断がついていなかった」である。対象児は14～17歳のASD児5名(男児1名、女児4名:15.0±1.4歳)であり、対象となった養育者は全て母親であった。

IV-1-2. 環境

5組の撮影環境はショッピングモールが2組、学校からの帰宅路～自宅でのお手伝いや遊び、学校からの帰宅路～スーパーの買い物、お菓子作りであった。撮影者の影響を最小限にするため、撮影日とは異なる日程で事前に子どもに挨拶をした。また、撮影は可能な限り親子の後方から実施した。

表3. 基本属性

	年齢	性別	観察内容
A	14歳	女	買い物, トイレ, お昼ご飯
B	14歳	女	帰宅路, 整容, 着替え, お絵かき, 洗濯物, DVD鑑賞
C	17歳	女	帰宅路, 買い物
D	14歳	女	お菓子作り
E	16歳	男	買い物, 本屋, おやつ

IV-2. 事例 A

IV-2-1. 子どもの行動から起こる母親の反応について

子から母の全カード数は 733 枚であった。その内、大カテゴリは 13, 中カテゴリは 28, 小カテゴリは 66 であった。

表 4. 事例 A 大カテゴリ (子から母)

大カテゴリ	カード数	割合
①子どもを見守る	137	19%
②子どもに注意を促す	127	18%
③子どもに話しかける	124	17%
④子どもの終了の合図で母親は次の行動に移る	64	9%
⑤子どもの意思を確認する	61	8%
⑥子どもと移動をする	50	7%
⑦子どものYES・NOのジェスチャーに応じる	41	6%
⑧子どもの不適切な行動を修正する	36	5%
⑨子どもと別行動をする	25	3%
⑩子どもが行いたい事を察し補助する	23	3%
⑪子どもの反応を見逃している	20	3%
⑫聞き取り困難	13	2%
⑬子どもの反応を求めない行動	12	2%
	733	

以下、抽出された大カテゴリの概要について述べる。

① 子どもを見守る (137 枚)

母親が子どもの様子を見ている、「見守り」の行為が最も多く、子どもの行動や動作を見守るというような母親が子どもの反応を求めないカテゴリが多くを占めていた。次いで、子どもの反応を求め、訴えを理解しようとするカテゴリが続いた。

母親は、子どもを見守る行為を、「外出中は周りに迷惑がかからないよう、目立つ色の服装にし、子どもを視野に入れるように注意している」と述べていた。また、母親は、外出時に子どもを視野に入れている理由を、「過去に目を離したすきに子どもがいなくなってしまう、自身のトラウマになった」と述べていた。

② 子どもに注意を促す (127 枚)

母親は子どもに進む方向や物などの対象への注意を促すカテゴリや、子どもの危険を回避するような働きかけをするカテゴリがあった。そのうち、母親は進む方向を指さし、子どもの注意を進行方向に向けるカテゴリが最も多くを占めていた。次いで、物に対して指さしを行い、子どもの注意を物に向けるカテゴリや、子どもに直接触れることで合図を送る、もしくは行動を抑制するカテゴリが続いた。

移動時に指をさすといった注意の促しが多く、母親は、移動時に見られた指さしについて、「無意識に行っている」と述べていた。母親は、行動の抑制を「子どもは行動するとき周りが見えていないことがあり、母親は周りを見て子どもの行動に抑制をかけている」と述べていた。また、「日常的に意識して行っていたことが、徐々に意識せずに行っていたというような変化がある」とも述べていた。

③ 子どもに話しかける (124 枚)

母親が子どもに説明や質問などの話しかける行為がみられた。そのうち、母親は子どもに次の行動の促しや子どもの場にそぐわない行動を言葉で抑制をする・説明をするといったカテゴリが最も多くを占めていた。次いで、母親が子どもに質問をするカテゴリが続いた。

次の行動の促しには、「買いたいものがあるから付き合ってよ」など母親自身の希望も子どもに伝えている場面が見られ、他にも、子どもに要求の確認や選択肢のある質問をする行為が見られた。また、母親自身の気持ちや子どもと共感する声かけが見られた。

選択肢のある質問では、両手の示指を立て2択にし、視覚的に分かりやすく、子どもが指

差しで選択しやすいように工夫していた。母親は、「選択肢のある質問をしながら、徐々に子どもの要求を絞っている」と述べていた。

母親は、子どもに次の行動を話す理由として、「あらかじめ次の行動を伝えることで、子どもが理解できていないまま突然できごとが生じる場面を減らし、子どもの混乱や事故を事前に防いでいる」と述べていた。

④ 子どもの終了の合図で母親は次の行動に移る (64 枚)

子どもの動作が母親の行動のきっかけとなっている場面があった。例えば、子どもが母親に近づくなど、子どもの行動が母親の次の行動に繋がるカテゴリが占めていた。次いで、子どもの頷きなど母親に対しての返事が、母親の行動のきっかけとなったカテゴリが続いた。

⑤ 子どもの意思を確認をする (61 枚)

母親は声かけや行動で、子どもに確認を取っていた。例えば、同じ問いを繰り返し繰り返す行為や「ねえ」と、子どもに声かけで確認をしているカテゴリが多くを占めていた。中でも、「ねえ」という声かけには「確認」の他に「同意」「質問」というような多くの意味を含んでいた。次いで、声を出さずに指さしで子どもに確認をとるカテゴリが続いた。

⑥ 子どもと移動をする (50 枚)

移動時に母親は子どもの近くを歩いていた。母親は子どもと並んで歩くことや子どもの後ろをついていき、一緒に行動をしているカテゴリが多くを占めていた。次いで、子供よりも前を歩くカテゴリが続いた。

⑦ 子どもの YES・NO のジェスチャーに応じる (41 枚)

母親は子どものジェスチャーに対して、理解しているような言動や子どもを見続ける行為があった。例として、母親は子どもの訴えを「分かった」「食べる、食べる」など、子どもの訴えを理解したことを言葉で伝えるカテゴリが多くを占めていた。次いで、母親は子

ものジェスチャーが理解できないために訴えを見続け、理解しようとするカテゴリが続いた。また、子どもが左頬を掌で叩き「おいしい」とジェスチャーをすると、「おいしかったね」と子どものジェスチャーを母親が代弁するカテゴリがあった。

⑧ 子どもの不適切な行動を修正する (36 枚)

子どもの不適切な行動や必要な行動を母親が教えていた。例として、子どもの危険な行動を注意するカテゴリが多くを占めていた。次いで、買い物をする際にはレジに並ぶことを子どもに伝えるなど、日常生活で必要な行動を子どもに教えるカテゴリが続いた。

⑨ 子どもと別行動をする (25 枚)

母親と子どもは別々の行動をしていた。例として、子どもは商品を見ているが、母親は子どもとは別の商品を見ているというように、同じ行動をしている場合にも別々の物を見ている場面が見られた。また、子どもは目の前にある物を触っているが、母親は別の行動を取っている場面が見られた。

⑩ 子どもが行いたい事を察する (23 枚)

子どもの行動から、子供が何をしたいのか母親が察し、補助をする場面がみられた。子どもが欲しいものを察し、母親が物を渡す行動や、子どもが母親に物を渡したいことを察し、母親が物を受け取るといった物の受け渡しをするカテゴリが最も多く観察された。次いで、子どもの行動から予測できることを補助するカテゴリが続いた。

⑪ 子どもの反応を見逃している (20 枚)

子どもの行動を母親が見ていない場面があった。子どもが母親や周囲を見る行動や、母親に対して訴える行動に対して、母親は子供の行動を見逃しているカテゴリが多くを占めていた。次いで、母親は、子どもが母親の腕に抱きつく行動を目視せずに別の行動を行うなど、子どもの動作に関心を払っていないカテゴリが続いた。

⑫ 聞き取り困難 (13 枚)

周囲の騒音により聞き取り困難な場面を認めた。

⑬ 子どもの反応を求めない (12 枚)

子どもの反応を求めずに働きかけを行う場面があった。母親は子どもに触れるカテゴリや、母親が子どもに近寄るといように子供へ何らかの働きかけを行うが、母親の動作に対し子どもの反応を求めないカテゴリがあった。

表 5. 事例 A カテゴリ分類 (子から母)

		交流の内容	カード数
1	大カテゴリ	子どもを見守る	137
	中カテゴリ	子供の反応を求めない	80
		母親は子供の行動を見ている	33
		母親は歩いている子供を見ている	22
	小カテゴリ	母親は階段を下りている子供を見ている	2
		母親は子供が手に取った商品に目を向ける	2
		母親は子供が母親や周りを見ているのを見ている	17
		母親は子供が興味を持った様子を見ている	4
	中カテゴリ	子供の反応を求める	33
		母親は子供の訴えを理解しようと質問をする	3
		母親は子供が示す反応を待っている	15
	小カテゴリ	母親は子供が何を訴えたいのか理解しようと様子を見る	9
		母親は子供の行動から分かったことを口にする	2
		子どもの呼びかけに母親は子どもを見る	4
	中カテゴリ	子供の様子を気にしている	24
		母親は子供の行動から同じ動きをする	13
	小カテゴリ	母親は無意識に子供を見ている	11
2	大カテゴリ	子どもに注意を促す	127
	中カテゴリ	母親は子供に方向に注意を向けるようにする	69
		母親は子供に進む方向が分かるように指さす	39
	小カテゴリ	母親は子供に進む方向が分かるように指差しと声かけを行う	10
		母親は子供が持っている物を掴みながら移動をする	2
		母親は子供に触り、行動の合図をする	18
	中カテゴリ	母親は子供の危険の回避をする	25
		母親は子供の行動を制する	7
	小カテゴリ	母親は子供の腕を掴み、行動を制する	10
		母親は子供に声かけをしながら注意を促す	8
	中カテゴリ	母親は物に対して注意を向けるようにする	26
		母親は物を指し、子供の視線をそちらに向ける	15
	小カテゴリ	母親は物を指し、問いかけながら子供の注意を向ける	8
		母親は物に視線を向け、子供の視線を促す	1
		母親は物を叩いて子供に注意を向けさせる	2
	中カテゴリ	母親は子供の注意が自身に向くよう働きかける	7
		母親は子どもの肩を叩いて注意を自分に向けさせる	2
	小カテゴリ	母親は子どもに呼びかけて注意を自分に向けさせる	1
		母親は子どもに手を振り注意を自分に向けさせる	2
		母親は子どもに手を伸ばし自分に向けさせる	2

表 5. 事例 A カテゴリ分類 (子から母) (つづき)

		交流の内容	カード数
3	大カテゴリ	子供に話しかける	124
	中カテゴリ	母親は子供に質問をする	32
	小カテゴリ	母親は子供に質問をする	22
		母親は子供に選択肢のある質問をする	10
	中カテゴリ	母親は子供に説明をする	78
		母親は子供に次の行動を話している	3
	小カテゴリ	母親は子供を促す (理解を得ようとする)	39
		母親が子供を納得させようとする	36
	中カテゴリ	母親は子供に話しかける	14
	小カテゴリ	母親は子供に会話を投げかける	14
4	大カテゴリ	子どもの終了の合図で母親は次の行動に移る	64
	中カテゴリ	母親の行動のきっかけが子どもの行動	42
	小カテゴリ	子供の行動が母親の次の行動のきっかけ	42
	中カテゴリ	母親の行動のきっかけが子どもの返事	22
	小カテゴリ	子供の返事が母親の次の行動のきっかけ	22
5	大カテゴリ	子どもの意志を確認する	61
	中カテゴリ	母親は子どもに声かけで確認する	46
	小カテゴリ	母親は子供に問いかけて確認をする	32
		母親は子供に「ねえ」と確認する	14
	中カテゴリ	母親は子どもに行動で確認する	15
		母親は物を指して子供に確認する	7
	小カテゴリ	母親は物を指しつつ子供に問いかけて確認する	5
母親は子供に訴えて確認する		3	
6	大カテゴリ	子どもと移動をする	50
	中カテゴリ	母親は子どもと行動している	34
		母親は子供の後をついていく	19
	小カテゴリ	母親は子供に続いてトイレに入る	1
		母親は自然と子供の前を歩く	3
		母親と子供は並んで歩く	11
	中カテゴリ	母親は子どもより先に歩いている	16
	小カテゴリ	子供は母親の後をついていく	16

表 5. 事例 A カテゴリ分類 (子から母) (つづき)

		交流の内容	カード数
7	大カテゴリ	子どものYES・NOのジェスチャーに応じる	41
	中カテゴリ	子どもの訴えに母親は理解したことを示す	23
	小カテゴリ	母親は子供の訴えに対して行動で同意する	4
		母親は子供の訴えを理解したことを声に出す	9
		母親は子供の訴えに繰り返すように声に出す	7
	中カテゴリ	母親は子供の訴える動きを真似をする	3
		母親は子どもの訴えを見続ける	17
		母親は子供の声に頷いている	1
	小カテゴリ	母親は子供の訴えを見ている	11
		母親は子供の訴えに頷いている	5
	中カテゴリ	母親は子どもの訴えを理解しようとモノに視線を向ける	1
	小カテゴリ	母親は子供が指す物に視線を向ける	1
	8	大カテゴリ	子どもの不適切な行動を修正する
中カテゴリ		母親は子どもの不適切な行動に注意する	23
小カテゴリ		母親は子供に注意する	23
中カテゴリ		母親は子どもに必要なことを教えている	13
小カテゴリ		母親は買い物で必要な行動を教える	10
		母親は子供に食べ方を教えている	3
9	大カテゴリ	子どもと別行動をする	25
	小カテゴリ	別行動	25
10	大カテゴリ	子どもが行いたいことを察し、補助する	23
	中カテゴリ	母親は子どもと物の受け渡しをする	15
	小カテゴリ	母親は子供に物を渡す	7
		母親は子供から物を受け取る	8
	中カテゴリ	母親は子どもの行動を察し、手助けをする	8
	小カテゴリ	母親は子供に物が見えやすいようにする	1
		母親は子供の行動の手助けをする	7

表 5. 事例 A カテゴリ分類 (子から母) (つづき)

		交流の内容	カード数
11	大カテゴリ	子どもの反応を見逃している	20
	中カテゴリ	母親は子どもを見ていない	3
	小カテゴリ	母親は子供の訴えを見ていない	3
	中カテゴリ	母親は子供の行動に関心を払っていない	
	小カテゴリ	母親は子供のやりたいようにさせている	1
	小カテゴリ	母親は子どもを見ていない	16
12	大カテゴリ	聞き取り困難	13
13	大カテゴリ	子どもの反応を求めない行動	12
	中カテゴリ	母親は子どもに反応を求めている	6
	小カテゴリ	母親は子供に触る	6
	中カテゴリ	母親は子どもに反応を求める	6
	小カテゴリ	母親は子供に近寄る	6

IV-2-2. 母親の行動から起こる子どもの反応について

母から子の全カード数は 746 枚であった。その内、大カテゴリは 10、中カテゴリは 24、小カテゴリは 82 であった。1つのカテゴリは大中小のカテゴリと内容が適しており、4つの小カテゴリは中カテゴリとの内容が適しているため、中カテゴリとした。

表 6. 事例 A 大カテゴリ (母から子)

大カテゴリ	カード数	割合
①母親のジェスチャーにYES・NOで反応を返す	186	25%
②子ども自身の意思で行動する	176	24%
③母親が注意を促す対象を見る	157	21%
④母親と別行動をする	58	8%
⑤母親と同じ方向に歩く	55	8%
⑥母親と同じ行動をする	37	5%
⑦母親に密着する	21	3%
⑧母親と物の受け渡しをする	23	3%
⑨母親の制止行動に従う	13	2%
⑩聞き取り困難	13	2%
⑪母親の顔を見る	7	1%
	746	

以下に見出されたカテゴリについて説明をする。ただし、不明であったカテゴリについては除外した。

以下、抽出された大カテゴリの概要について述べる。

① 母親のジェスチャーに YES・NO で反応を返す (186 枚)

母親のジェスチャーや言葉に対し、子どもは頷く、手を挙げるなど肯定をする反応、また、首を横に振ることで否定を示す反応があった。このように、母親からのジェスチャーや言葉

に対して、子どもは何らかの YES・NO で肯定・否定の反応を示すカテゴリが多くを占めていた。次いで、子どもは左手の拳を顎に当てる「飲みたい」、掌を顎に当てる「食べたい」のように、欲求をジェスチャーで伝えているカテゴリが続いた。また、母親の話しかけに意図的に反応しないカテゴリもあった。これは拒否を表現する反応である。

母親は、「選択肢のある質問をしながら、徐々に子どもの要求を絞っている」と面接時に述べていた。

② 子ども自身の意思で行動する (176 枚)

母親の働きかけがない場合にも、子どもは周囲のものに視線を向けていた。子どもの視線は母親や周囲の人や物を見ている場面が多くを占めていた。次いで、子どもは「食べたい」「飲みたい」など自発的に母親に意思を伝えようとするカテゴリが続いた。また、母親の働きかけに関係なく、子ども自身の興味があるものに注意が向いていたカテゴリもあった。

母親は、「子どもの興味があるもの（お菓子、CD、TV 等）がある時には、母親の話しかけを聞かず反応が薄いため、子どもが満足するまで時間をおいてから行動を促している」と述べていた。また、母親は、「時間をおいてから、行動の促しを行うことで子どもの混乱の防止をしている」とも述べていた。

子どもは、自発的に「食べたい」「飲みたい」といったジェスチャーを使用し、母親に伝えようとしている行動が何度も観察時に見られ、カード数も 2 番目に多いカテゴリとなった。子どもの訴えを母親が理解していない場合でも、同様の行動が見られた。

母親は、子どもの意思表示については、「子どもが自ら考案した表現である」と述べていた。また、「マカトン法など決まった方法は、子どもは覚えられなかった」とも述べていた。マカトン法とは音声言語・動作によるサイン・線画シンボルの 3 つのコミュニケーションを同時に用いることを基本とした言語指導法である⁶¹⁾。

母親は、「子どもの訴えたいことが分からない時があり、しばらく様子を見て、それでも分からない際は分からないことを伝えている」と述べていた。「子どもが母親に伝えたいこ

とがあると、実際にその場に母親を連れていき、伝えたいものを指さすことがある」ことも述べていた。

③ 母親が注意を促す対象を見る (157 枚)

子どもは母親が指した対象（方向・物）に対して歩く・視線を向ける・頷くカテゴリが多くを占めていた。次いで、母親が子どもに直接接触することで子どもが歩く・止まるといったカテゴリが続いた。母親は、子どもの注意を喚起する手の動きを「無意識に行っている」と述べていた。

④ 母親と別行動をとる (58 枚)

子どもと母親は別々の行動をしていた。地図を親子で見るというように、一見同じ行動をとっているが、各々別の場所を見ている場面が観察された。また、近くで異なる行動をとっている場面が見られた。

⑤ 母親と同じ方向に歩く (55 枚)

移動時に子供が母親の前後や隣を歩く場面があった。母親の移動した方向に子どもが付いていくカテゴリが多くを占めていた。次いで、母親の動きに関係なく歩くカテゴリが続いた。母親が進む方向を確認し、母親の近くを同じ方向に向かって歩く様子も観察された。

⑥ 母親と同じ行動をする (37 枚)

母親が子供に合図を出し、同じ行動をする様子が多く観察された。続いて、子どもが母親の動作を見て真似をする行動がみられた。

⑦ 母親と物の受け渡しをする (23 枚)

子どもは母親から物を受け取る行動や物を渡す行動があった。子どもは母親の行動を察して物を受け取るカテゴリが多くを占めていた。次いで、母親の行動を察して物を渡す行為や子どもが自ら母親から物を受け取る行動のカテゴリが続いた。

⑧ 母親と密着する (21 枚)

母親が子どもに近づくが、子どもは気づかないカテゴリが多く観察された。続いて、子どもが母親に近づく行動が観察された。

⑨ 母親の制止行動に従う (13 枚)

母親の注意に対して、動きを止める場面が観察された。子どもが身体を揺らす・物に寄り掛かるなどの行動をした際に、母親が「やめなさい」等の注意をすると、子どもが動きを止めていた。

⑩ 聞き取り困難 (13 枚)

周囲の騒音により聞き取り困難な場面を認めた。

⑪ 母親の顔を見る (7 枚)

母親の視線に子どもが反応し、お互いに見つめているカテゴリが観察された。

表 7. 事例 A カテゴリ分類 (母から子)

	交流の内容	カード数
1	大カテゴリ 母親のジェスチャーにYES・NOで反応を返す	186
	中カテゴリ 母親の話しかけに子供はYESの反応を示す	66
	母親の促しに子供は頷く	6
	母親の声かけに子供は頷く	14
	小カテゴリ 母親の促しに子供は行動する	10
	母親の質問に子供は頷いている	20
	母親の問いかけに子供は手を挙げて返事をする	15
	母親の指示に子供は従っている	1
	中カテゴリ 母親の話しかけにNOの反応を示す	19
	小カテゴリ 母親の問いかけに子供は首を振って拒否をする	15
	母親の2択の問いかけに子供はどちらも拒否をする	4
	中カテゴリ 母親の提示する選択肢を選ぶ	15
	母親が指で提示する選択肢に子供はどちらも選択する	5
	小カテゴリ 母親が指で提示する選択肢に子供は一方を見る	7
	母親が指で提示する選択肢に子供は自分の指を指す	3
	中カテゴリ 母親の話しかけに子供はジェスチャーや声に出し反応する	42
	母親の問いかけに子供は訴えている	16
	小カテゴリ 母親が促しても子供は訴え続ける	11
	母親の声かけに子供はジェスチャーをする	13
	母親の話しかけに子供は声を出す	2
	中カテゴリ 母親の話しかけに子供は反応していない	38
	母親の会話に子供は反応していない	8
	小カテゴリ 母親の促しを子供は聞いていない	14
	母親の声かけに子供は反応していない	9
	母親の質問に子供は反応していない	7
	中カテゴリ 母親の話しかけに子供は母親を見る	6
	母親の会話に子供は母親を見る	2
	小カテゴリ 母親の問いかけに子供は母親を見る	2
	母親の会話に子供は笑顔で母親を見る	2

表 7. 事例 A カテゴリ分類 (母から子) (つづき)

	交流の内容	カード数
2	大カテゴリ 子供は自分の意志で行動する	176
	中カテゴリ 子どもは自発的に母親に意志を伝えようとする	28
	子供は母親の注意を自分に向けようとする	4
	小カテゴリ 子供は母親にジェスチャーで訴える	11
	子供の訴えが分からない母に子供は母親に訴え続ける	13
	中カテゴリ 子どもは自身の意意志を母親に伝え続ける	9
	母親のジェスチャーに子供は訴え続ける	2
	小カテゴリ 母親の顔に子供は訴え続ける	4
	子供はジェスチャーで母親に伝えようとするが、母親は子供を見ていない	3
	中カテゴリ 母親の働きかけは関係なく、子供は別の対象に注意が向いている	17
	子供は興味のあるものに視線を向ける	6
	小カテゴリ 子供は興味のあるものをじっと見ている	6
	子供は物を見ている	2
	子供は商品を見ている	3
	中カテゴリ 子どもは母親や周りを見ている	39
	子供は歩いている母親を見ている	5
	子供は周りを見ている	7
	小カテゴリ 子供は母親の動きを見ている	11
	子供は母親の動きから物に視線を向ける	9
	子供は母親や周りを見ている	6
	子供は母親と観察者の話に視線を向けている	1
	中カテゴリ 母親の視線に子どもは反応していない	83
	母親の視線に子供は気付かずに行動する	48
	母親の視線に気づかず子供は周りを見ている	12
	小カテゴリ 母親の視線に気づかず子供は歩き続ける	17
	母親の視線に子供は反応しない	3
	子どもは商品を戻す	3

表7. 事例A カテゴリ分類 (母から子) (つづき)

		交流の内容	カード数
3	大カテゴリ	母親が注意を促す対象を見る	157
	中カテゴリ	子どもは母親が指した物に対する反応	97
		子供は母親が指した方向に歩く	43
		子供は母親が指した物に視線を向ける	27
		子供は母親が指す物に頷く	14
	小カテゴリ	子供は母親が指す物に手を伸ばす	6
		子供は母親が指す物を取る	5
		子供は母親が指した方に物を置く	1
		子供は母親が指した物に視線を向けるがすぐに逸らす	1
	中カテゴリ	母親の直接的に働くことに対する子どもの反応	31
		母親が子供に触ると子供が視線を向ける	6
		母親が子供の持つ物を掴んで歩くと子供も歩く	1
	小カテゴリ	子供は母親に体の向きを変えられる	2
		子供は母親の合図(触られ)行動を止める	8
		子供は母親の合図(触られ)で歩く	14
	中カテゴリ	母親の動きに対する子どもの反応	14
		母親が子供の動きを制すると子供は動きを止める	7
	小カテゴリ	子供は母親の手の動きから母親に付いていく	4
		子供は母親の手の動きに視線を向ける	3
	中カテゴリ	子どもは母親の注意反応しない	10
		子供は母親が指した物に反応しない	1
	小カテゴリ	子供は母親が指した方向を見ない	1
		子供は母親の促しを見ていない	8
中カテゴリ	母親の危険回避への声かけに対する子どもの反応	5	
小カテゴリ	子供は母親の声かけで歩く	3	
	母親が子供に声かけで注意を促すと子供は前を向く	2	
4	大カテゴリ	母親と別行動をする	58
	中カテゴリ	母親と別行動をする	58
	小カテゴリ	母親と別行動をする	58

表 7. 事例 A カテゴリ分類 (母から子) (つづき)

		交流の内容	カード数
5	大カテゴリ	母親と同じ方向に歩く	55
	中カテゴリ	母親の働きに関係なく歩く	9
	小カテゴリ	子供は自分のペースで歩く	7
		子供は歩くことに集中している	2
	中カテゴリ	母親の働きかけに対して歩く	46
	小カテゴリ	母親の移動した方向に子供はついていく	43
		母親が作ったスペースに子供が入る	3
6	大カテゴリ	母親と同じ行動をする	37
	中カテゴリ	母親の行動で見られる子どもの行動	31
	小カテゴリ	母親の行動が子供の次の行動のきっかけ	19
		子供は母親と同じ動きをする	12
	中カテゴリ	子どもは反応しない	6
	小カテゴリ	子供は母親の行動に反応しない	6
7	大カテゴリ	母親に密着する	21
	中カテゴリ	子どもが母親の近くで待つ	1
	小カテゴリ	母親の近くで子供が待つ	1
	中カテゴリ	子どもから母親に近づく	7
	小カテゴリ	子供は母親に近づく	7
	中カテゴリ	母親が子どもに近づいた時の子どもの反応	13
	小カテゴリ	母親が子供に近づくが子供は気が付かない	9
		母親が近づくと子供が気が付く	4
8	大カテゴリ	母親と物の受け渡しをする	23
	中カテゴリ	子供は母親から物を受け取る	16
	小カテゴリ	母親の行動を察して物を受け取る	10
		子どもが自ら母親から物を受け取る	6
	中カテゴリ	子供は母親に物を渡す	7
	小カテゴリ	母親の行動を察して物を渡す	6
		子ども自ら母親に物を渡す	1

表 7. 事例 A カテゴリ分類 (母から子) (つづき)

		交流の内容	カード数
9	大カテゴリ	母親の制止行動に従う	13
	中カテゴリ	母親の制止行動に従う	13
	小カテゴリ	母親の制止行動に従う	13
10	大カテゴリ	聞き取り困難	13
11	大カテゴリ	母親の顔を見る	7
	中カテゴリ	母親の視線に子どもは反応している	7
	小カテゴリ	子供と母親がお互いを見ている	7

IV-3. 事例 B

IV-3-1. 子どもの行動から起こる母親の反応について

子から母の全カード数は 746 枚であった。その内、大カテゴリは 10、中カテゴリは 29、小カテゴリは 77 であった。

表 8. 事例 B 大カテゴリ (母から子)

大カテゴリ	カード数	割合
①子どもの行動を管理する	192	26%
②子どもに話をする	125	17%
③子どもに質問をする	94	13%
④子どもを見ている	83	11%
⑤子どもに注意を促す	78	10%
⑥子どもの助けをする	63	8%
⑦子どもの言動を察する	52	7%
⑧子どもに教育をする	34	5%
⑨子どもを見ていない	14	2%
⑩子どもと歩く	11	1%
	746	

① 子どもの行動を管理する (192 枚)

「靴をそろえなさい」「うがいしよう」など子供に次の行動を口頭で指示・提案するカテゴリが最も多く観察された。続いて、子供の体に触れて誘導することや、子供が次にすべき行動を指さしやジェスチャーにて伝える場面が観察された。こどもの行動を制する動作も観察されたが、192 枚中 10 枚と少数であった。

② 子どもに話をする (125 枚)

この大カテゴリでは、こどもに話しかける場面も観察されたが、子供の言動に対しコメントをする場面や、子供が行っている行動に関連する話題を提供している場面が最も多くを占めていた。子供の行動を称賛・ほめる場面も観察された。

③ 子どもに質問をする (94 枚)

子どもの反応や行動に対し「嬉しいの?」「おやつが欲しいの?」のように質問をしている場面が最も多く観察された。続いて「お着がえする?」のように次の行動を質問する場面が多く観察された。

④ 子どもを見ている (83 枚)

このカテゴリでは、子供と直接的なやりとりは行わないが、子供が行っている動作や子供の様子を把握しながら母親は自分の作業を行っている場面が最も多く観察された。続いて、母親自身は作業を行わず、子供の様子を観察しているカテゴリが続いた。また、屋外では、子供とその周囲の様子を観察している場面が観察された。

⑤ 子どもに注意を促す (78 枚)

「がまんがまん」「前を見て歩く」など子どもの行動をたしなめる場面や注意する場面が観察された。また、屋外では言葉や子供のリュックを掴むことで周囲への注意を促す場面が観察された。

⑥ 子どもの助けをする (63 枚)

子どもからのお願いの有無に関わらず、子どもが行っている動作の補助をするカテゴリが過半数を占めていた。子供がこれから行う遊びの準備をするカテゴリ、子供に見本をみせるカテゴリが続いた。

⑦ 子どもの言動を察する (52 枚)

子どもの言動から、子どもの気持ちを察し、補助や回答をするカテゴリが約半数を占めていた。そして子供のジェスチャーを言葉にするカテゴリ、子どもが苦手とする動作を事前に注意するカテゴリの順に続いた。

⑧ 子どもに教育をする (34 枚)

母親は子どもにジェスチャーや言葉を教えていた。ジェスチャーは子供との遊びの中で観察され、言葉を教えるカテゴリでは、子どもの発音を修正する場面や、子どもの行動を言葉にして伝える場面が観察された。

⑨ 子どもを見ていない (14 枚)

子どもの姿が見えない範囲で母親は自分の作業を行っている場面が観察された。これは自宅内でのみ観察され、屋外では目を離す場面は見られなかった。

⑩ 子どもと歩く (11 枚)

屋外では、子どもの前後・隣を歩き、子どもと同じペースで歩行する場面が観察された。

表9. 事例B カテゴリ分類 (子から母)

		交流の内容	カード数	
1	大カテゴリ	子どもの行動を管理する	192	
	中カテゴリ	子どもに次の行動を口頭で促す	169	
		子どもに次の行動を指示する	82	
		子どもに次の行動を提案する	40	
		子どもの次の行動を誘導する	25	
		子どもの行動を見て提案する	8	
	小カテゴリ	子どもの反応に対し説得をする	9	
		子どもの間違いを訂正し、次の動作を誘導する	4	
		子どもにジェスチャーを促す	1	
		中カテゴリ	子どもに次の行動をジェスチャーで促す	13
		子どもに触れて誘導し、次の行動を指示する	7	
	小カテゴリ	子どもに次の行動をジェスチャーで指示する	4	
		子どもに見てほしい対象を指さしする	2	
	中カテゴリ	子どもの行動・要求を止める	10	
	小カテゴリ	子どもの次の行動を制する	10	
	2	大カテゴリ	子どもに話をする	125
中カテゴリ		子どもの言動に対する話をする	90	
		子どもの行動に対しコメントする	34	
		子どもが行っている遊びに関する話題を投げかける	20	
		子どもの反応に対し、話を続ける	18	
		子どもの行動に対し話題を投げかける	2	
小カテゴリ		子どもの行動・注意の対象に対し冗談を言う	15	
		子どもの返答が正しいか、一緒に確認をする	1	
		中カテゴリ	子どもの評価をする	8
		小カテゴリ	子どもの行動を称賛・応援する	4
子どもの出来を評価する			4	
中カテゴリ		子どもに話しかける	23	
		子どもに話しかける	18	
小カテゴリ		子どもに自分の間違いを謝る	1	
		子どもに頼み事をする	4	
中カテゴリ		子どもに説明をする	4	
小カテゴリ	子どもに指示の理由を説明する	4		

表 9. 事例 B カテゴリ分類 (子から母) (つづき)

		交流の内容	カード数	
3	大カテゴリ	子どもに質問をする	94	
	中カテゴリ	子どもの言動を質問・確認する	74	
	小カテゴリ		子どもの反応に対し、質問する	33
			子どもの行動に対し質問をする	30
			子どもが発した言葉や周囲の物品のサインを質問する	4
			子どもが発した言葉や周囲の物品のサインを質問する	4
			子どもの行動を察し、確認する	2
			子どもの反応に対し質問し、口角を上げる	1
	中カテゴリ	子どもに次の行動を質問する	13	
	小カテゴリ		子どもに次の動作を質問する	10
			子どもに次にすべき行動を質問する	3
	中カテゴリ	子どもに質問をする	4	
	小カテゴリ	子どもの顔を見て問いかける	4	
	中カテゴリ	子どもに問題を出す	3	
	小カテゴリ	子どもの周囲にある物品の名称を質問する	3	
4	大カテゴリ	子どもを見ている	83	
	中カテゴリ	子どもの様子を見ている	82	
	小カテゴリ		子どもの様子を気にしながら自分の作業をする	22
			子どもの様子を観察しながら自分の作業を行う	15
			子どもの行動を見ている	18
			子どもの様子を見ている	18
			子どもと周囲を観察する	3
			子どもの反応に対し、子どもの顔を見る	4
		子どもを見て口角を上げる	2	
	中カテゴリ	子どもの周囲を見ている	1	
小カテゴリ	子どもの周囲を観察しながら自分の作業を行う	1		

表9. 事例B カテゴリ分類（子から母）（つづき）

	交流の内容	カード数
5	大カテゴリ 子どもに注意を促す	78
	中カテゴリ 子どもの行動を指摘する	64
	子どもの行動をたしなめる	32
	子どもの行動に対し注意をする	15
	小カテゴリ 子どもの声に対し言葉で注意をする	1
	子どもの服装・髪型を注意・修正する	9
	子どもの行動を注意・指摘し、次の行動を考えさせる	7
	中カテゴリ 子どもの危険を回避する	6
	子どもの行動に対し言葉で注意を促し、車道側を歩く	1
	子どものリュックをつかみながら声掛けをし、周囲に注意を促す	1
	小カテゴリ 子どものリュックを掴み、行動を制する	2
	子どもの車道側を歩く	1
	子どもの前方で周囲を確認する	1
	中カテゴリ 子どもに周囲への注意喚起をする	8
	子どもに言葉で周囲への注意を促す	4
	小カテゴリ 子どもに質問をして注意を促す	2
	子どもの行動に対し言葉で周囲への注意を促す	2
6	大カテゴリ 子どもの助けをする	63
	中カテゴリ 子どもの補助をする	37
	小カテゴリ 子どもが行っている動作の補助をする	34
	子どもの行動後の修正をする	3
	中カテゴリ 子どもに見本を見せる	9
	小カテゴリ 子どもの行うことに対し、見本を見せる	9
	中カテゴリ 子どもが行う動作の準備をする	17
	小カテゴリ 子どもが行う遊び・作業の準備をする・要求に答える	17
7	大カテゴリ 子どもの言動を察する	52
	中カテゴリ 子どもの行動を察し、対応する	25
	子どもの行動を察し、補助する	6
	小カテゴリ 子どもの行動を察し、注意をする	6
	子どもの言いたいことを察し、提案する	4
	子どもが伝えたいことを察し、回答する	9
	中カテゴリ 子どもが苦手な行動を把握し、注意する	11
	小カテゴリ 子どもが苦手な動作を予想し、注意を前もって行う	11
	中カテゴリ 子どものジェスチャーを言葉に変換する	16
	小カテゴリ 子どものジェスチャーを察し、言葉にする	16

表9. 事例B カテゴリ分類（子から母）（つづき）

	交流の内容	カード数	
8	大カテゴリ 子どもに教育をする	34	
	中カテゴリ 子どもにジェスチャーを見せる・教える	13	
	小カテゴリ 子どもが聞いている音楽に合わせてジェスチャーをする	13	
	中カテゴリ 子どもに言葉を教える	11	
		子どもの言葉を正しい単語に修正して繰り返す	8
	小カテゴリ 子どもが行っている動作を言葉で表現する	2	
		子どもに物品の名称を教える	1
	中カテゴリ 子どもの真似をする	10	
		子どものジェスチャー・ポーズを真似する	6
	小カテゴリ 子どもが行ったサインを真似し、サインの示す単語を言う	3	
		子どもの言葉を繰り返す	1
	9	大カテゴリ 子どもを見ていない	14
中カテゴリ 子ども以外に注意の対象が向いている		14	
小カテゴリ 子どもの行動に関係なく、自分の作業を行う		13	
		近くの子どもの声かけに返答する	1
10	大カテゴリ 子どもと歩く	11	
	中カテゴリ 子どもと一緒に歩く	3	
		子どものリュックを掴みながら、子どもと同じペースで歩く	1
	小カテゴリ 子どもと手をつないで歩く	1	
		子どもの横を歩く	1
	中カテゴリ 子どもの前方を歩く	5	
	小カテゴリ 子どもの前方を歩く	5	
	中カテゴリ 子どもについていく	3	
	小カテゴリ 子どもを後を追う	3	

IV-3-2. 母親の行動から起こる子どもの反応について

母から子の全カード数は 742 枚であった。その内、大カテゴリは 8、中カテゴリは 17、小カテゴリは 53 であった。

表 10. 事例 B 大カテゴリ (母から子)

大カテゴリ	カード数	割合
①母親に従う	198	27%
②母親に応答する	193	26%
③自分の意志で行動する	167	23%
④母親に要求する	83	11%
⑤母親の注意の対象を見る	44	6%
⑥母親を見る	40	5%
⑦母親の真似をする	13	2%
⑧母親以外を見ている	4	1%
	742	

①母親に従う (198 枚)

母親の指示や誘導に従う行動がこの大カテゴリの約 8 割を占めていた。残りは母親に従おうとする様子が見られたが、不十分なカテゴリとなっている。

②母親に応答する (193 枚)

母親の話しかけや質問に対し、ジェスチャーで返答をするカテゴリが最も多くを占めていた。続いて言葉や声のみ、またはジェスチャーと併用をして返答をしている様子が観察された。残りの 1 割程度は、返答はないものの、母親の顔を見るというような何らかの反応を示す様子が観察された。

③自分の意思で行動する（167枚）

母親の行動に関係なく、子ども自身のペースで歩行・移動するカテゴリが約8割を占めていた。これは屋外での移動の際に観察されたカテゴリである。残りの2割は母親の指示や注意に従わず、自分の好きな行動を継続している場面であった。

④母親に要求する（83枚）

母親への要求はジェスチャーや母親に近づく、母親に触れるというような行動による訴え方が約9割を占めていた。言葉や声を出すことによる要求の伝え方は1割程度であった。

⑤母親の注意の対象を見る（44枚）

このカテゴリでは、母親の指さしや母親が話している対象物品を子供が見る・触る場面が観察された。

⑥母親を見る（40枚）

子どもが母親をただ見つめている場面がこの大カテゴリの約9割を占めていた。

⑦母親の真似をする（13枚）

母親の真似をしようとする場面が観察された。中でも、母親の言葉を真似し、繰り返そうとする場面が最も多く観察された。

⑧母親以外を見ている（4枚）

注意の対象が母親やその場面で子供が行っている行動ではなく、母親以外の周囲の人物や、風景に向いている場面が少数観察された。

表 11. 事例 B カテゴリ分類 (母から子)

		交流の内容	カード数	
1	大カテゴリ	母親に従う	198	
	中カテゴリ	母親の指示通りの行動をとる	156	
	小カテゴリ		母親の言葉・指示に従う	94
			母親の誘導・指摘に合わせた行動をする	37
			母親の言葉に口角を上げ、従う	5
			母親の指示に頷き、従う	2
			母親の誘導に従い歩く	15
			母親の補助に従う	3
	中カテゴリ	母親の注意に従う	7	
	小カテゴリ		母親の注意に従う	5
			母親の注意に対し声で反応し、従う	2
	中カテゴリ	母親の指示通りの行動をとろうとするが、不十分	30	
	小カテゴリ	母親の注意・指示に従うが、不十分・間違える	30	
	中カテゴリ	母親の手伝いをする	5	
	小カテゴリ	母の頼み事を引き受ける・手伝いをする	5	
	2	大カテゴリ	母親に応答する	193
中カテゴリ		母親の言葉に反応する	90	
小カテゴリ			母親の言葉に対し、ジェスチャーや頷き・首振りで反応する	49
			母親の言葉に対し、言葉・声で反応をする	17
			母親の言葉に対し、言葉・声とジェスチャーで反応する	14
			母親の言葉に対し、母親の顔を見る	6
			母親の声掛けに声を出して口角を上げる	4
中カテゴリ		母親の質問に反応する	95	
小カテゴリ			母親の質問に対し、ジェスチャーや頷き・首振りで反応する	59
			母親の質問に対し、言葉・声とジェスチャーで反応する	12
			母親の質問に言葉で回答する	4
			母親の質問・言葉にサインで回答する	4
			母親の質問に声を出して反応する	2
中カテゴリ		母親の反応に対し、口角を上げる	14	
小カテゴリ			母親の行動に反応する	4
			母親の補助に反応する	4
			母親の注意に反応する	4
小カテゴリ			母親の注意に対し母親の顔を見る	2
			母親の注意に対し振り返る	2

表 11. 事例 B カテゴリ分類 (母から子) (つづき)

	交流の内容	カード数	
3	大カテゴリ 自分の意志で行動する	167	
	中カテゴリ 母親の働きに左右されない	135	
	小カテゴリ	母親の行動に関係なく、自分のペースで行動する	126
		母親の働きに関係なく、自分のペースで歩く	6
		母親の働きに関係なく、自分のペースで歩く	2
		母親の働きに関係なく、声を出しながら歩く	1
	中カテゴリ 母親から離れる	1	
	小カテゴリ 母親と離れ、行きたいところへ行く	1	
	中カテゴリ 母親に従わない	32	
		母親の指示・注意に従わない	24
	小カテゴリ	母親の注意に従わず、自分のペースで行動する	6
		母親の注意に反応せず、前方を見て横断歩道を渡る	1
		母の頼み事を断る	1
	4	大カテゴリ 母親に自分の要求を訴える	83
中カテゴリ 母親に言動で訴える・要求する		68	
		母親にジェスチャー・行動で訴える・要求する	47
		母に触れて要求する・訴える	12
小カテゴリ		母親に声・言葉で話しかける・訴える	6
		母親を見て声を出し、母親の注意を引こうとする	2
		母親の腕を触り、声を出す	1
中カテゴリ 母親に近づく・提示する		15	
小カテゴリ		母親の近くに行く	8
		母親に物を持っていく・見せる	7
5	大カテゴリ 母親の注意の対象を見る	44	
	中カテゴリ 母親の注意の対象を見る	44	
	小カテゴリ	母親の注意・言葉の対象を見る・触る	35
		母親の言葉の対象を見る	9

表 11. 事例 B カテゴリ分類 (母から子) (つづき)

		交流の内容	カード数
6	大カテゴリ	母親を見る	40
	中カテゴリ	母親を見る	40
	小カテゴリ	母親を見ている	35
		母親の質問に対し、母親の顔を見る	2
		母親と視線を合わせる	2
	母親の方を見て様子を伺う	1	
7	大カテゴリ	母親の真似をする	13
	中カテゴリ	母親の真似をする	8
	小カテゴリ	母の言葉を繰り返すが不十分	5
		母親の見本を真似する	3
	中カテゴリ	母親と同じ行動をとる	5
	小カテゴリ	母親と同じペースで歩く	3
		母親と同じ動作をする	2
8	大カテゴリ	母親以外を見ている	4
	中カテゴリ	注意の対象が母親以外の人物	2
	小カテゴリ	近くの子どもの声に反応し、子どもを見る	1
		周囲の人に声を出し、お辞儀をする	1
		注意の対象が風景	2
	子どもは周囲を見ている	2	

IV-4. 事例C

IV-4-1. 子どもの行動から起こる母親の反応について

子から母の全カード数は 455 枚であった。その内、大カテゴリは 12, 中カテゴリは 22, 小カテゴリは 78 であった。

表 12. 事例C 大カテゴリ (母から子)

大カテゴリ	カード数	割合
①子どもと歩く	108	24%
②子どもに返答する	84	18%
③子どもの行動を把握している	81	18%
④子どもに肯定的な対応をする	74	16%
⑤子どもの言動を読み取り、対応する	31	7%
⑥子どもに話しかける	25	5%
⑦子どもの行動を指示する	14	3%
⑧子どもに周囲への注意を促す	13	3%
⑨子どもと約束をする	13	3%
⑩子どもとスケジュールを確認する	8	2%
⑪子どもに否定的な対応をする	2	1%
⑫聞き取り困難	2	1%
	455	

① 子どもと歩く (108 枚)

この大カテゴリの内訳として、子どもに触れて歩く中カテゴリが最も多くを占めていた。このカテゴリでは、子供と手をつなぐ場面や、子どもの一部に触れて誘導しながら歩行する場面が観察された。続いて子どもの近くを歩行し、子どもと一緒に移動をするカテゴリも同程度観察された。また、子どもに直接触れてはいないが、子どもの前に出て歩行速度や歩行位置を誘導することで、歩行中の子どもの危険を回避するような行動も観察された。

② 子どもに返答する (84 枚)

子どもの言葉や質問に対し返答する、または質問で返答するカテゴリが多くを占めていた。続いて、子どもの言葉をそのまま繰り返す場面が多く観察された。その他子供の言葉に対し、頷きや相槌のみの場面も観察されたが、母親が子どもの言葉を無視する場面はなく、必ず何等かの反応を返していた。

③ 子どもの行動を把握している (81 枚)

子どもを見ている場面が最も多かった。これは母親が子どもを観察しているカテゴリであり、子どもに対する働きかけは行っていなかった。続いて、隣で子どもの行動を把握した状態で自分の作業を行っている場面や、ただ子どもの隣に座っている場面が多く観察された。

④ 子どもに肯定的な対応をする (74 枚)

このカテゴリでは、約7割が子どもに肯定的な返事を行っている場面であった。「よかったね」「～できたね」のように今の出来事について子どもの動作をほめる言葉と、「～できるといいね」というように未来の出来事について肯定的な言葉を述べる場面が観察された。続いて、子どもの頭をなでる場面が多く観察された。

⑤ 子どもの言動を読み取り、対応する (31 枚)

子どもがスーパーで立ち止まった様子から、「他のも飲みたいの?」と質問をする場面や、駅のベンチから子どもが立ち上がった場面で「(電車は) まだまだ」など、子どもの言動を読み取り話しかける様子が最も多く観察された。続いて子どもの行動から「疲れた?」「暑い?」など子どもの体調に関して質問をする場面が観察された。

⑥ 子どもに話しかける (25枚)

このカテゴリでは、会話がないうちから、母親が子どもに話しかける場面が最も多く観察され、続いて質問をする場面も観察された。話題は近くにある物や今日の出来事など様々であった。

⑦ 子どもの行動を指示する (14枚)

「鍵あけて」「これに入れてくれる?」「電車に乗ったら声ちっちゃく」など子どもに指示をする場面が観察された。子どもへの指示は命令ではなく、頼み事をするような口調が多かった。

⑧ 子どもに周囲への注意を促す (13枚)

子どもの行動を制する場面や周囲への注意を伝える場面が観察された。子どもに言葉で伝える方法が最も多く観察されたが、危険な場面では子どもの腕をつかむなど動作で静止行動をとる場面が観察された。

⑨ 子どもと約束をする (13枚)

「○○だけね」「おしまいだよ」と子どもに約束を提示し、子どもの返事を待つ場面が観察された。また、子どもと約束のジェスチャーをする場面も観察された。約束のジェスチャーは、母親と子どもが対面でお互いの肘を合わせるという動作であった。

⑩ 子どもとスケジュールを確認する (8枚)

母親は今日のスケジュールを事前にメモに記載をしていた。次に行く場所や後で行うことについて、メモを見ながら子どもに説明をする場面が観察された。

⑪ 子どもに否定的な対応をする（2枚）

子どもに「ダメです」など否定的な返答をしている場面が2回観察された。どちらも感染症に関する話題であった。

⑫ 聞き取り困難（2枚）

屋外の騒音により聞き取り困難な場面があった。

表 13. 事例 C カテゴリー分類 (子から母)

	交流の内容	カード数
1	大カテゴリ 子どもと歩く	108
	中カテゴリ 子どもの近くを歩く	46
	子どもの後方を歩く	18
	小カテゴリ 子の隣を歩く	24
	子供の前を歩く	4
	中カテゴリ 子どもと移動する	5
	小カテゴリ 子供と走る	3
	子供と歩きながらすれ違う人に会釈する	2
	中カテゴリ 子どもに触れながら歩く	53
	子どもと手をつないで歩く	24
	子どもの手をつなぐ	3
	子供の腕をつかむ	6
	小カテゴリ 子供の後方を子供のリュックを掴みながら歩く	3
	子供の腕を掴んだまま歩く	7
	子供の腕を引き、子供の行動を誘導する	9
	子供にくっつき、行動を誘導する	1
	中カテゴリ 子どもの周囲を確認しながら歩く	4
	小カテゴリ 子の後方を歩き、周囲を確認する	1
	子どもの危険を回避するため、子の前を歩く	3
2	大カテゴリ 子どもに返答する	84
	中カテゴリ 子どもの言葉を繰り返す	14
	小カテゴリ 子どもの言葉を繰り返す	11
	子どもの言葉の一部を繰り返す	3
	中カテゴリ 子どもに返答する	70
	子どもの言葉に返答する	24
	子どもの質問が聞き取れず、質問する	2
	子どもの質問に返答する	17
	子どもの早口に対し単語で返答する (聞き取れているか不明)	3
	小カテゴリ 子どもの言葉に相槌を打つ	2
	子どもの言葉に質問で返す	13
	子どもの言葉が聞き取れず、顔を寄せる	1
	子どもの質問に対し子どもの顔を見る	1
	子供の言葉に対しうなづく	6
	子供の質問に対し言葉とジェスチャーで返答する	1

表 13. 事例 C カテゴリー分類（子から母）（つづき）

		交流の内容	カード数	
3	大カテゴリ	子どもの行動を把握している	81	
		中カテゴリ	子どもの近くにいる	38
			子どもの隣にいる	32
	小カテゴリ	子どもの行動を把握した状態で自分のことを行っている	4	
		子供の近くで自分のことをする	2	
	中カテゴリ	子どもを見ている	43	
		子どもを見ている	38	
		子どもを見て口角を上げる	1	
	小カテゴリ	子供の視線の先をみる	1	
		子供の動作を確認して次の行動に移る	1	
		先生に挨拶する	2	
4	大カテゴリ	子どもに肯定的な対応をする	74	
		中カテゴリ	子どもの頭をなでる	14
			子どもの頭をなでる	9
	小カテゴリ	子どもの頭をなで、良い理由（または感想）を言う	4	
		子どもの頭をなでるフリをする	1	
	中カテゴリ	子どもに肯定的な返事をする	60	
		子どもの言葉に肯定的な返事をする	54	
		子供の質問に対し、NOで答える回答を肯定的に返答する	1	
		小カテゴリ	子供のうなづきに対し肯定的な返事とお辞儀をする	1
			子供の行動を見てうなづく	3
			子どもの回答に従う	1
	5	大カテゴリ	子どもの言動を読み取り、対応する	31
中カテゴリ			子どもの補助をする	7
			子どもの助けをする	2
小カテゴリ		子どもの言葉から次の要求を読み取り、手伝う	1	
		子供の行動を読み取り、分からない部分を説明する	1	
		子供の行動の補助・手伝いをする	3	
中カテゴリ		子どもの思考を読み取る	24	
		子どもの言動から思考を読み取り話しかける・回答する	8	
		子どもの行動を言葉にする	2	
		小カテゴリ	子どもの気持ちを代弁する	1
		子の様子を見て体調に関する質問をする	7	
		子供の行動から子供の要求を察し、従う	5	
	子供の行動から子供の気持ち（苦手）を察し、安心させる	1		

表 13. 事例 C カテゴリ分類 (子から母) (つづき)

	交流の内容	カード数
6	大カテゴリ 子どもに話しかける	25
	中カテゴリ 子どもに質問する	8
	小カテゴリ 子どもに質問をする	8
	中カテゴリ 子どもに話す	17
	小カテゴリ 子どもに話しかける	16
	小カテゴリ 子どもにジェスチャーで注意を促す (見て欲しい物 電車)	1
7	大カテゴリ 子どもの行動を指示する	14
	中カテゴリ 子供の行動を指示する	14
	小カテゴリ 子どもの行動を言葉で指示する	8
	小カテゴリ 子どもの行動を言葉とジェスチャーで指示する	2
	小カテゴリ 子どもの行動をジェスチャーで指示する	3
	小カテゴリ 子供の次の行動を言葉とジェスチャーで指示する	1
8	大カテゴリ 子どもに周囲への注意を促す	13
	中カテゴリ 子どもの行動を制する	7
	小カテゴリ 子どもに注意を促し、行動を制する	1
	小カテゴリ 子供の行動を言葉で制する	6
	中カテゴリ 子どもに注意を促す	6
	小カテゴリ 子どもに歩行速度を指示する	4
	小カテゴリ 子どもにジェスチャーで注意を促す (危険)	1
	小カテゴリ 子供の手をつなぎ、危険を伝える	1
9	大カテゴリ 子どもと約束をする	13
	中カテゴリ 子どもと約束をする	7
	小カテゴリ 子供とジェスチャーと言葉で約束 (指示) をする	1
	小カテゴリ 子どもと約束のジェスチャーをする	4
	小カテゴリ 子どもと言葉で約束をする	2
	中カテゴリ 子どもに約束を確認する	6
	小カテゴリ 子供に約束を確認する	1
	小カテゴリ 子供の言葉に対し終了を伝える	5

表 13. 事例 C カテゴリー分類（子から母）（つづき）

		交流の内容	カード数
10	大カテゴリ	子どもとスケジュールを確認する	8
	中カテゴリ	子どもとメモでスケジュールを確認する	3
	小カテゴリ	子どもにメモと言葉でスケジュールを指示（説明）をする	2
		子供と一緒にメモを見る	1
	中カテゴリ	子どもにスケジュールを話す	5
	小カテゴリ	子供に今日のスケジュールを説明する	1
		子供に明日以降のスケジュールに関する質問をする	1
		子供の次の行動を提案する	1
子供に次の行動を伝える		2	
11	大カテゴリ	子どもに否定的な対応をする	2
	中カテゴリ	子供に否定的な返事をする	2
	小カテゴリ	子供の要求・言葉に否定的な返答をする	2
12	大カテゴリ	聞き取り困難	2

IV-4-2. 母親の行動から起こる子どもの反応について

母から子の全カード数は 455 枚であった。その内、大カテゴリは 16, 中カテゴリは 25, 小カテゴリは 83 であった。

表 14. 事例 C 大カテゴリ (母から子)

大カテゴリ	カード数	割合
①自分のペースで行動する	80	18%
②母と一緒に歩く	65	14%
③母の言葉に返答する	61	13%
④母に従う	53	12%
⑤母に話しかける	51	11%
⑥母の隣にいる	30	7%
⑦母に要求を伝える	21	5%
⑧母の言動により体を前後左右に揺らす	18	4%
⑨母の真似をする	16	4%
⑩母に頭を寄せる	15	3%
⑪母の顔や持ち物を見る	12	3%
⑫母にスケジュールを話す	11	2%
⑬聞き取り困難	7	2%
⑭母に関係なく体を前後左右に揺らす	6	1%
⑮母に従わない	5	1%
⑯母とメモを確認する	4	1%
	455	

①自分のペースで行動する (80 枚)

母親と一緒に歩行している際に、母親のペースと関係なく自分のペースで移動をするカテゴリが半数弱を占めていた。続いて学校の先生や撮影をしている OT に対しコミュニケーションを取る場面が約 3 割観察された。その他独り言を言う場面や買い物の際に好きなものをかごに入れる場面などが観察された。

②母と一緒に歩く (65 枚)

母親と同じ速度で歩行する場面がこのカテゴリである。①「自分のペースで行動する」の大カテゴリの内、移動に関する小カテゴリは、「母に関係なく自分のペースで歩く・走る」「母より速い速度で歩く」の計 37 枚であったことに対し、この②のカテゴリは 65 枚であったため、母親と同じペースで移動をする場面の方が多く観察された。

③母の言葉に返答する (61 枚)

母親からの話しかけに対し、言葉で返答をする様子が 9 割であった。残りの 1 割 (4 枚) は頷きもしくはジェスチャーで返答をしていた。

④母に従う (53 枚)

母親の指示や誘導に従う場面がこのカテゴリの 8 割ほどを占めていた。残りは母親と言葉もしくはジェスチャーで約束をしている場面であった。

⑤母に話しかける (51 枚)

子どもから母親に話しかける場面と質問をする場面がどちらも半数弱観察された。また、「バイバイできたね」など、母親に自分のいいところを伝える場面も 3 回観察された。

⑥母の隣にいる (30 枚)

何かの作業や会話をせず、ただ母の隣にいるカテゴリである。周囲の風景や電車を眺めている場面が観察された。

⑦母に要求を伝える (21 枚)

母親に「明日からあげ」のように明日以降の食事の内容をリクエストする場面が観察された。また、「遠くからまる？ (感染症対策のため人に触れないという意味)」のように母親に許可を求める場面も観察された。

⑧母の言動により体を前後左右に揺らす (18 枚)

母親との会話や母親の言葉、ジェスチャーを見たあとに体を前後左右に揺らす動作が観察された。揺れの大きさはさまざまであった。この動作は母親から肯定的な言葉が得られた際や、頭をなでられた際に観察され、笑顔であることが多かった。

⑨母の真似をする (16 枚)

母親の言葉を繰り返し発言する様子が観察された。すべて繰り返す場面も観察されたが、特に長文の場合には、「○○になったら○○しようね」の最後の一部「(○○) しようね」のみ繰り返す場面も観察された。

⑩母に頭を寄せる (15 枚)

母に頭を寄せる場面が観察された。「バイバイできたね」と母親に伝えた後や約束を守った後など、主に何かが達成できた時に頭を寄せていた。この動作に対し、母親は子どもの頭をなでていた。母親から頭をなでてもらった後に大カテゴリ⑧の「母の言動により体を前後左右に揺らす」場面もあった。

⑪母の顔や持ち物を見る (12 枚)

会話はないが、母の顔や母の動作を見つめている場面や、母の持ち物を見つめている場面が観察された。

⑫母にスケジュールを話す (11 枚)

「○月○日○○の3年生は卒業します」のように、今日の予定や明日以降の予定を母親に伝える場面があった。予定が異なっている際には母親が訂正をしていた。

⑬聞き取り困難 (7 枚)

周囲の騒音や声の大きさにより聞き取り困難な場面があった。

⑭母に関係なく体を前後左右に揺らす (6 枚)

周囲を見て体を前後左右に揺らす場面も数回観察された。これは主に電車が通った際に観察された。

⑮母に従わない (5枚)

母親の言葉に従わない場面は5回のみ観察された。母親の制止行動に対しわざと従わず、母親の顔を見る場面も観察された。

⑯母とメモを確認する (4枚)

本日のスケジュールが書かれたメモを母親が提示した際に、一緒にメモを見、スケジュールについて母親と会話をする場面が観察された。

表 15. 事例 C カテゴリー分類 (母から子)

	交流の内容	カード数
1	大カテゴリ 自分のペースで行動する	80
	中カテゴリ 母親に関係なく行動する	57
	母親に関係なく、自分のペースで歩く・走る	36
	母より早い速度で歩く	1
	母に関係なく周囲のものを指さす	3
	一瞬歌う	1
	小カテゴリ 母に関係のなく自分のペースで行動する	8
	独り言を言う	2
	母に関係なく、次の行動をとる	5
	母に関係なくかごに欲しいものを入れる	1
	中カテゴリ 周囲の人とコミュニケーションをとる	23
	先生に手を振る	1
	先生に挨拶し、ジェスチャー（手を振る、グッド）をする	3
	先生にジェスチャーをする	2
	小カテゴリ OTにジェスチャーであいさつをする（グー）	2
	OTに話しかける	7
	OTを見ている	6
	OTに挨拶をするため近づく	1
	友達に手を振る	1
2	大カテゴリ 母と一緒に歩く	65
	中カテゴリ 母の近くを歩く	42
	母の隣を歩く	34
	小カテゴリ 母の後を歩く	7
	母と歩きながら手を自由に動かす	1
	中カテゴリ 母の位置を把握しながら歩く	23
	小カテゴリ 母と手をつないで歩く	21
	母の場所を確認する	2
3	大カテゴリ 母の言葉に返答する	61
	中カテゴリ 母の言葉に返答する	57
	母の言葉に返答する	28
	小カテゴリ 母の言葉に対し質問をする	11
	母の質問に返答する	18
	中カテゴリ 母の言葉にジェスチャーで反応する	4
	小カテゴリ 母の質問にジェスチャーで返答する	1
	母の言葉に対しうなづく	3

表 15. 事例 C カテゴリ分類 (母から子) (つづき)

		交流の内容	カード数
4	大カテゴリ	母に従う	53
	中カテゴリ	母の言動に従う	43
		母の指示に従う	12
		母の誘導に従う	14
		母のジェスチャー (指差し) の方を見る	2
		母の言葉に従う	6
	小カテゴリ	母の手伝いをする	4
		母の言葉を聞いて自分の要求を通す	1
		母の言葉に対し次の行動をとる	4
		母と約束をする	10
	中カテゴリ	母親と約束をする	4
		母と約束のジェスチャーをする	6
	5	大カテゴリ	母に話しかける
中カテゴリ		母に話しかける	25
		母に話しかける	22
小カテゴリ		母に話しているor独り言	3
		母に質問をする	23
中カテゴリ		母親に質問する	22
		母にジェスチャーと言葉で質問をする	1
中カテゴリ		母に自分の良いところを伝える	3
小カテゴリ		母親に約束を守ったことを伝える	2
		母の動作を言葉にする (自分をほめる)	1
6	大カテゴリ	母の隣にいる	30
	中カテゴリ	母の隣にいる	30
		母の隣で周囲を見ている	4
	小カテゴリ	母に関係なく周囲を見ている (隣にいる)	26

表 15. 事例 C カテゴリ分類 (母から子) (つづき)

	交流の内容	カード数
7	大カテゴリ 母に要求を伝える	21
	中カテゴリ 母に自分の要求を伝える	12
	母に自分の要求をジェスチャーで伝える	4
	母の前に手を出す	1
	小カテゴリ 母に自分の持ち物を渡す	1
	母に許可を求める	5
	母に言葉と行動で助けを求める	1
	中カテゴリ 母に明日以降の要求を伝える	9
	小カテゴリ 母に言葉で自分の要求 (明日以降のこと) を伝える	8
	母にジェスチャーと言葉で自分の要求 (明日以降のこと) を伝える	1
	8	大カテゴリ 母の言動により体を前後左右に揺らす
中カテゴリ 母の反応により体を前後左右に揺らす		18
母の言葉に対し前後左右に体を揺らす		5
母のジェスチャーに対し前後左右に体を揺らす		1
母に頭をなでられた後、体を前後左右に揺らす		1
小カテゴリ 母との会話の後、体を前後左右に揺らす		8
母にジェスチャーをしながら返事をし、体を前後左右に揺らす		1
母とのジェスチャーのあと体を前後左右に揺らす		1
母の行動を見て体を前後左右に揺らす		1
9		大カテゴリ 母の真似をする
	中カテゴリ 母の言葉をまねる	14
	母の言葉を繰り返し、先生にジェスチャーをする	1
	小カテゴリ 母の言葉を繰り返す	7
	母の言葉の一部を繰り返す	6
	中カテゴリ 母の行動を真似する	2
	小カテゴリ 母の行動を真似する	2
10	大カテゴリ 母に頭を寄せる	15
	中カテゴリ 母に頭を寄せる	15
	母に頭を寄せる	6
	小カテゴリ 母に話しかけながら頭を寄せる	6
	母の質問に返答し、頭を寄せる	2
	母に頭を寄せ、自分の行動をほめる	1

表 15. 事例 C カテゴリー分類 (母から子) (つづき)

	交流の内容	カード数
11	大カテゴリ 母の顔や持ち物を見る	12
	中カテゴリ 母を見る	9
	小カテゴリ 母の顔や動作を見ている	9
	中カテゴリ 母の物を見る	3
	母の持ち物を触る	1
	小カテゴリ 母のスマホを見る	1
	母のスマホを見る	1
12	大カテゴリ 母にスケジュールを話す	11
	中カテゴリ 母に明日以降のスケジュールを話す	7
	小カテゴリ 母に明日以降の予定を話す	7
	中カテゴリ 母に今日のスケジュールを話す	4
	小カテゴリ 母に今日の予定を話す	3
	母親に今日のスケジュールを途中まで話し、顔を見る (わからない)	1
13	大カテゴリ 聞き取り困難	7
14	大カテゴリ 母に関係なく体を前後左右に揺らす	6
	中カテゴリ 母に関係なく体を前後左右に揺らす	6
	小カテゴリ 電車を見て体を前後左右に揺らす	5
	体を前後左右に揺らす	1
15	大カテゴリ 母に従わない	5
	中カテゴリ 母の指示に従わない	5
	母の指示に返答するが、従わない	1
	母の指示に反応するが、従わない	1
	小カテゴリ 母に制された行動をとる真似をし、母を見る	1
	母の終了の合図に従わない	1
	母の回答47をNOで言い直す	1
16	大カテゴリ 母とメモを確認する	4
	中カテゴリ 母のメモを確認する	4
	母のメモを指さす	1
	小カテゴリ 母のメモを見て関連する言葉を使う	2
	母のメモを見ている	1

IV-5. 事例 D

事例 D は自宅でのマカロン作りとゲーム場面の観察を実施した。

IV-5-1. 子どもの行動から起こる母親の反応について

子から母の全カード数は 430 枚であった。その内、大カテゴリは 12, 中カテゴリは 20, 小カテゴリは 50 であった。

表 16. 事例 D 大カテゴリ (母から子)

大カテゴリ	カード数	割合
①子供の作業に関して話す	72	17%
②子供の行動を把握している	67	16%
②子供と一緒に作業する	67	16%
④子どもに話しかける	64	15%
⑤子どもに質問する	56	13%
⑥子どもの作業を手伝う	37	9%
⑦子供に助けを求める	26	6%
⑧子供の作業環境を整える	21	5%
⑨子供に返答する	12	3%
⑩子供の要求を察する	5	1%
⑪子供の作業を中断させる	2	1%
⑫子供の言葉を繰り返す	1	1%
	430	

① 子供の作業に関して話す (72 枚)

次の作業に対する指示や助言が多く観察された。母親は「～してみて」というように子どもにお願いをするような口調で話していた。続いて、「～する？」と子どもに次の作業を提案するカテゴリが多く観察された。

② 子供の行動を把握している (67 枚)

子どもの様子を把握した状態(子どもと同じ部屋で度々様子を見ながら)で母親は食器洗いなど自分の作業を行っているカテゴリと、子どもの作業を見ているカテゴリが約半数ずつ観察された。

③ 子供と一緒に作業する (67 枚)

子どもと一緒にゲームを行う様子が最も多く観察された。会話をしている場面と会話をせずにお互いゲームに集中している場面があった。また、お菓子作り(マカロン作り)を行う際に、隣で生地を形成するなど、子どもと一緒に作業をする様子が観察された。

④ 子どもに話しかける (64 枚)

母親から子どもに話しかける場面が観察された。子どもの作業に対し肯定的でも否定的でもないコメントのほかに、子どもの作業や行動に対する肯定的なコメントが観察された。否定的なコメントは撮影時間中には観察されなかった。

⑤ 子どもに質問する (56 枚)

子どもの作業や発言に対する質問が最も多く観察された。続いて、子どもに作業の意見を求めるような質問が多く観察された。また、子どもが次に何を行うのかに関する質問や、手伝いが必要かどうかを問うような質問が観察された。子どもが行っている作業に対し、母親は子どもの意見を聞いてから次の作業に移ることや子どもができない作業を交代することが多かった。

⑥ 子どもの作業を手伝う (37 枚)

子どもができない作業を代わりに母親が行う際には⑤のように質問をする場面が多かった。このカテゴリでは、器を抑える、子どもが手を伸ばしている食器を近くに寄せるなど子どもに質問をせずに作業を補助する場面が多く観察された。

⑦ 子供に助けを求める (26 枚)

ゲームに関して子どもに質問をする場面が多く観察された。その他に、泡だて器を箱にしまう作業など、「これやって」と母親よりも子どもが得意な作業をお願いする場面が観察された。

⑧ 子供の作業環境を整える (21 枚)

子どもがお菓子作りを行っている机上の物品を整理するなど、作業が行いやすい環境づくりを行っている場面が観察された。この作業に対し子どもの反応は観察されなかった。

⑨ 子供に返答する (12 枚)

子どもからの質問に対し返答をするカテゴリである。このうち 1 枚は頷きのみで返答をしていたが、その他は言葉で返答をしていた。

⑩ 子供の要求を察する (5 枚)

子どもが母親のスマートフォンを勝手に触りながら母親に近づくなど、子どもが母親に構って欲しい際にその要求を察して話しかける様子が観察された。

⑪ 子供の作業を中断させる (2 枚)

固まっていない生地を触ろうとした際など、子どもの作業によりお菓子作りが失敗してしまう可能性がある場面で子どもの作業を中断をさせる様子が観察された。

⑫ 子供の言葉を繰り返す (1枚)

子どもの言葉を繰り返す様子が1度のみ観察された。

表 17. 事例 D カテゴリー分類 (子から母)

		交流の内容	カード数	
1	大カテゴリ	子供の作業に関して話す	72	
	中カテゴリ	子供に次の作業について話す	55	
	小カテゴリ		子どもに次の作業を指示する	30
			子どもの作業に関する助言をする	18
			子供に次の作業を説明する	4
			子供に次の工程を伝える	3
	中カテゴリ	子供に作業について聞く	17	
	小カテゴリ		子供に自分のやっている作業の感想を聞く	5
		子供に次の作業を提案する	12	
2	大カテゴリ	子供の行動を把握している	67	
	中カテゴリ	子供の行動を把握している	67	
	小カテゴリ		子供の作業を把握した状態で自分の作業をする	34
			子どもの様子・作業を見ている	33
3	大カテゴリ	子供と一緒に作業する	67	
	中カテゴリ	子供と一緒に作業をする	12	
	小カテゴリ		子供と一緒に作業をする (子供がやっていた作業を行う)	3
			子供と一緒に作業をする	9
	中カテゴリ	子供と一緒にゲームをする	55	
	小カテゴリ		子供とゲームをする	39
			子供とゲームをしながらゲームに関する話をする	16
4	大カテゴリ	子どもに話しかける	64	
	中カテゴリ	子どもに話しかける	48	
	小カテゴリ		子どもに話しかける	29
			子の作業を見てコメントする	19
	中カテゴリ	子どもに肯定的な話かけをする	16	
	小カテゴリ	子供の作業を見て肯定的な話かけをする・ほめる	16	

表 17. 事例 D カテゴリー分類 (子から母) (つづき)

	交流の内容	カード数	
5	大カテゴリ 子どもに質問する	56	
	中カテゴリ 子どもに質問する	21	
	小カテゴリ 子どもに質問する	21	
	中カテゴリ 子どもの言動から質問する	14	
		子どもの言葉に対し質問する	5
	小カテゴリ	子供に手伝いが必要か問う	2
		子供の作業を見て質問する	5
		子どもの言葉に対し質問する	2
	中カテゴリ 子どもの意見を求め質問する	21	
		子供に次に何を行うか質問をする	5
	小カテゴリ	子どもの行動から要求を察し、質問する	1
		子供に作業の意見を求め質問する	15
	6	大カテゴリ 子どもの作業を手伝う	37
中カテゴリ 子どもの作業を補助する		37	
		子どもの行動を察し、作業の補助をする	3
		子どもに次の作業を指示しながら作業の補助をする	1
小カテゴリ		子供の作業を手伝う	9
		子供に作業工程が書いてあるスマホを渡す	1
		子供の作業の補助をする	23
7	大カテゴリ 子供に助けを求める	26	
	中カテゴリ 子供にお願い事をする	5	
	小カテゴリ	子供に作業をやってみたいと頼む	1
		子どもに作業の手伝い(助け)を求める	4
	中カテゴリ 子供にゲームを教えてもらう	21	
		子供とゲームをしながらゲームに関する質問をする(やり方を聞く)	11
	小カテゴリ	子供にゲームのやり方を教わる	8
		子どもにお礼を言う	2
8	大カテゴリ 子供の作業環境を整える	21	
	中カテゴリ 子どもの作業環境を準備する	11	
		子どもが作業しやすい環境を整える	6
	小カテゴリ	子どもが作業しやすい環境を整えながら次の作業を指示する	1
		子どもが次に行う作業の準備をする	4
	中カテゴリ 子どもが次に行う作業を調べる	10	
		子どもの次の作業工程をスマホで調べる	4
	小カテゴリ	子どもと一緒に次の作業工程をスマホで確認する	3
子供の作業を見て肯定的な相槌を打ち、スマホで次の工程を確認する		2	
子供の作業を見てうなづき、スマホで次の工程を確認する		1	

表 17. 事例 D カテゴリー分類 (子から母) (つづき)

		交流の内容	カード数
9	大カテゴリ	子供に返答する	12
	中カテゴリ	子どもの言葉に返答する	11
		子どもの質問に否定的な回答する	1
	小カテゴリ	子どもの言葉に返答する	9
		子どもの質問に肯定的な回答をする	1
	中カテゴリ	子どもの行動に反応する	1
	小カテゴリ	子供の作業を見てうなづく	1
10	大カテゴリ	子供の要求を察する	5
	中カテゴリ	子供の言動から子供の気持ちを察し、行動する	5
		子どもの行動から要求を察し、手伝う	1
	小カテゴリ	子供のいたづらを察し、話しかける	3
		子供の言動から次にやりたいことを察する	1
11	大カテゴリ	子供の作業を中断させる	2
	中カテゴリ	子供の作業を中断させる	2
	小カテゴリ	子供の作業を注意する	1
		子供の作業を止める	1
12	大カテゴリ	子供の言葉を繰り返す	1
	中カテゴリ	子供の言葉を繰り返す	1
	小カテゴリ	子供の言葉を繰り返す	1

IV-5-2. 母親の行動から起こる子どもの反応について

母から子の全カード数は 430 枚であった。その内、大カテゴリは 10、中カテゴリは 19、小カテゴリは 44 であった。

表 18. 事例 D 大カテゴリ (母から子)

大カテゴリ	カード数	割合
①母に関係なく自分のペースで行動する	165	38%
②母に従い行動する	82	19%
③母の質問に返答する	58	13%
④母と一緒に行動する	45	10%
⑤母に話しかける	26	6%
⑥母を助ける行動をとる	25	6%
⑦母の気を引く行動をとる	14	5%
⑧母の言動から次の作業を予測し行動する	11	3%
⑨母に手伝いを求める	3	1%
⑩母の真似をする	1	1%
	430	

①母に関係なく自分のペースで行動する (165 枚)

このカテゴリの約 8 割は母親の行動とは関係がないが、母親と同じ部屋で自分のペースで作業 (マカロン作りやゲーム) を行っている場面であった。その他母親と一緒にゲームをしているが、独り言を言う場面やゲームの声をまねる場面があった。また、母親の言葉に関係なく自分の作業を行っている場面が 6 回観察された。

②母に従い行動する (82 枚)

母親の指示や助言・補助に従う場面がこのカテゴリである。母親の言葉に関係なく作業をしているカテゴリは①の 6 場面あったが、その他母親に従わない行動は観察されなかった。

③母の質問に返答する (58 枚)

母親の質問に対し言葉で返答をする場面が約 8 割観察された。残りは返答をしないが口角を上げる様子や頷いている様子が観察された。

④母と一緒に行動する (45 枚)

母親と一緒にお菓子作りやゲームを行っている様子が観察された。また、母親と同時に作業を行っているわけではないが、母親の作業を見ている場面もこのカテゴリに含まれる。

⑤母に話しかける (26 枚)

約半数はゲームに関する話題であった。その他、現在行っている作業（お菓子作り）に関して作業があっているかを確認する際に話しかけていた。

⑥母を助ける行動をとる (25 枚)

母親にゲームのやり方を教える場面が最も多く観察された。また、泡だて器を箱にしまっ
て欲しいというような母親からの頼みを承諾し、手伝う場面も観察された。

⑦母の気を引く行動をとる (14 枚)

このカテゴリの半数は、「あたしの」と自分が作ったお菓子を指さし口角を上げるなど、自分の作業を母親にアピールする場面である。その他、母親の近くで母親のスマホを触るなど、母親に分かるようにいたづらをする場面も観察された。

⑧母の言動から次の作業を予測し行動する (11 枚)

「(生地を) 乾かして、焼いて、スタートだよ」という母親の発言を聞きタイマーをセットするなど、次の行動を母親から指示される前に行動できた場面や、作り方の説明書を読んで次の作業を自ら確認し、行動する場面がこのカテゴリである。

⑨母に手伝いを求める (3 枚)

母親に近づくことで手伝いを求める行動が観察された。

⑩母の真似をする (1 枚)

母親の行動を真似する場面が観察された。

表 19. 事例 D カテゴリ分類 (母から子)

		交流の内容	カード数
1	大カテゴリ	母に関係なく自分のペースで行動する	165
	中カテゴリ	母の近くで自分のペースで作業をする	135
	小カテゴリ	母の隣（近く）で自分のペースで作業をする	129
		母の言葉に関係なく自分のペースで作業する	6
	中カテゴリ	母とゲームをしながら母に関係なく話す	30
	小カテゴリ	母とゲームをしながら独り言を言う	17
		母とゲームをしながらゲームの字幕を読む・声をまねる	13
2	大カテゴリ	母に従い行動する	82
	中カテゴリ	母の言葉に従い作業する	57
		母の指示に従い作業をする	23
		母の助言・誘導に従い作業をする	21
	小カテゴリ	母の提案に従う	8
		母の注意に従う	1
		母の言葉・説明に従い作業する	4
	中カテゴリ	母の補助に従い、作業をする	25
	小カテゴリ	母の補助に従い、作業をする	21
		母の補助・誘導に従い次の作業をする	4
3	大カテゴリ	母の質問に返答する	58
	中カテゴリ	母の質問に回答する	43
		母の言葉に返答する	9
	小カテゴリ	母の質問に回答する	33
		母の言葉に返答する	1
	中カテゴリ	母の質問に対し質問する	6
	小カテゴリ	母の質問に質問で返し、母の顔を見る	2
		母の言葉に質問で返す	4
	中カテゴリ	母の言葉に対し言葉以外で反応する	9
		母の助言に対し頷く	1
	小カテゴリ	母の質問にうなづく	3
		母の言葉に口角を上げる	5

表 19. 事例 D カテゴリ分類 (母から子) (つづき)

		交流の内容	カード数
4	大カテゴリ	母と一緒に行動する	45
	中カテゴリ	母と一緒に作業する	32
		母と一緒に作業工程をスマホで確認する	6
	小カテゴリ	母と一緒にゲームをする	14
		母と一緒に作業をする	12
	中カテゴリ	母の作業を見ている	13
	小カテゴリ	母の作業を見ている	13
	5	大カテゴリ	母に話しかける
中カテゴリ		母に話しかける	21
		母に話しかける	4
小カテゴリ		母の作業を見てコメントする	2
		母にゲームに関して話しかける・話す	15
中カテゴリ		母に質問する	5
小カテゴリ		母に質問する	1
		母に作業に関する質問をする (これでよいか確認する)	4
6	大カテゴリ	母を助ける行動をとる	25
	中カテゴリ	母の手伝いをする	22
		母の頼みを承諾する	1
	小カテゴリ	母の作業を手伝おうとする	3
		母の助けをする (母ができないことを手伝う)	4
		母にゲームのやり方を教える・ゲームの結果を伝える	14
	中カテゴリ	母を気遣う	3
	小カテゴリ	母を励ます・労わる・気遣う	3
7	大カテゴリ	母の気を引く行動をとる	14
	中カテゴリ	母にアピールする	10
	小カテゴリ	母に自分の行った作業をアピールする	7
		母をゲームに誘う	3
	中カテゴリ	母にちょっかいを出す	4
	小カテゴリ	母の近くでいたずらする (母のスマホを見る)	3
		母を触る	1

表 19. 事例 D カテゴリ分類 (母から子) (つづき)

		交流の内容	カード数
8	大カテゴリ	母の言動から次の作業を予測し行動する	11
	中カテゴリ	母の言動から次の作業を考え行動する	10
		母の言葉から次の作業を予測し行動する	6
	小カテゴリ	母のスマホで作業を確認しながら作業をする	1
		母の質問を聞いて考える	3
	中カテゴリ	母のスマホで次の作業を確認する	1
	小カテゴリ	母のスマホで次の作業を確認する	1
9	大カテゴリ	母に手伝いを求める	3
	中カテゴリ	母に手伝いを求める行動をとる	3
	小カテゴリ	母の提案に従い、手伝いを求める	1
		母に近づく (手伝いを求める)	2
10	大カテゴリ	母の真似をする	1
	中カテゴリ	母の行動を真似する	1
	小カテゴリ	母の行動を真似する	1

IV-6. 事例 E

事例 E は大型ショッピングセンターにておやつを食べ、買い物とガチャガチャをする場面を撮影した。

IV-6-1. 子どもの行動から起こる母親の反応について

子から母の全カード数は 379 枚であった。その内、大カテゴリは 13, 中カテゴリは 24, 小カテゴリは 50 であった。

表 20. 事例 E 大カテゴリ (子から母)

大カテゴリ	カード数	割合
①子どもと一緒に歩く	77	20%
②子どもに質問する	61	16%
③子どもに話しかける	42	11%
③子どもに指示を出す	42	11%
⑤自分のペースで行動する	36	9%
⑥子どもの補助をする	27	7%
⑦子どもの行動を見守る	26	7%
⑧子どもに返答する	24	6%
⑨子どもと約束や頼み事をする	16	4%
⑩子どもの言動に頷く	9	2%
⑪子どもに注意を促す	8	2%
⑫子どもとジェスチャーや視線でやり取りをする	6	2%
⑬子どもに触れる	5	1%
	379	

①子どもと一緒に歩く (77 枚)

子どもの後を歩くカテゴリが最も多く、続いて隣を歩くカテゴリとなっていた。子どもの前方を歩く場面は観察されなかった。

②子どもに質問する (61 枚)

子どもに次の行動や要望を質問するカテゴリが最も多く観察された。子どもがチョコレート味のドーナツを指さす行動を見て「チョコ？」と質問するなど、子どもの指差しや反応を見て子どもの気持ちを質問する場面も観察された。

④ 子どもに話しかける (42 枚)

子どもに話しかける場面がこのカテゴリである。子どもの行動を見て肯定的な言葉をかける場面も観察された。否定的な声掛けは観察されなかった。

映画館に立ち寄った際には、子どもに館内のキャラクターとの写真撮影やパンフレットの閲覧に関して話しかけを行っていた。映画について、撮影後に母親から、映画館などの静かな空間が苦手であること、自宅であれば観ることができることを聴取した。その際、子どもは母親の言葉を頷きながら聞いていた。

③子どもに指示を出す (42 枚)

「～しようね」のように子どもに言葉で次の行動を伝える場面が約7割観察された。残り是指差しや指差しと言葉を併用して伝えていた。

⑤自分のペースで行動する (36 枚)

このカテゴリでは、母親は子どもの行動を把握した上で周囲の物を見るなど自分の行動を取っていた。その際、母親は子どもの行動が観察できる位置にいた。

⑥子どもの補助をする (27 枚)

本屋さんで子どもが読んだ本を元の位置に戻す際、周囲の本を避け、子どもが本を戻しやすいように補助するなど、子どもの補助をする行動が観察された。

⑦子どもの行動を見守る (26 枚)

子どもがスーパーのカートを一人で取りに行く様子や、子どもがゴミを捨てに行く様子を背後から見守っている場面のように、子どもの行動を見守る場面がこのカテゴリである。子どもがカートを取りに行く場面では、子どもからは見えない位置にも関わらず、母親がカートを指さしている様子やジェスチャーを行っている様子が観察された。

⑧子どもに返答する (24 枚)

子どもの言葉に返答している場面が最も多く観察された。子どものジェスチャーを言葉にし、返答している場面が次に多く観察された。

⑨子どもと約束や頼み事をする (16 枚)

本屋さんに入る前に「今日は本買わないからね」「誕生日とかにしようね」というように約束事をする場面が観察された。

⑩子どもの言動に頷く (9 枚)

子どもの言葉に対し頷く場面や、子どもと視線が合った時に頷く場面などが観察された。

⑪子どもに注意を促す (8 枚)

車のドアを閉める際に「危ないよ」など子どもに注意を促す場面が観察された。

⑫子どもとジェスチャーや視線でやりとりをする (6 枚)

子どもとグッドのジェスチャーをする場面や、子どもと視線があった際に口角を上げる場面が観察された。

⑬子どもに触れる (5 枚)

周囲に危険がない状態でも、子どもの腕をつかみながら歩く場面が観察された。

表 21. 事例 E カテゴリ分類 (子から母)

		交流の内容	カード数
1	大カテゴリ	子どもと一緒に歩く	78
	中カテゴリ	子どもと一緒に歩く	78
		子供の隣を歩く	30
	小カテゴリ	子供の後ろを歩く	47
		子供と一緒に行動する	1
2	大カテゴリ	子どもに質問する	61
	中カテゴリ	子どもに質問する	19
	小カテゴリ	子どもに質問する	19
	中カテゴリ	子どもの希望を質問する	25
	小カテゴリ	子どもに質問する (次の行動・要望を尋ねる)	24
		子どもに質問する (2つ提示)	1
	中カテゴリ	子どもの言動から子どもが伝えたいことについて質問する	17
		子どもの指差しを見て質問する	8
	小カテゴリ	子供の反応から子供の気持ちを推測し質問する	3
		子供の言葉に質問で返す	6
3	大カテゴリ	子どもに話しかける	42
	中カテゴリ	子どもに話しかける	27
	小カテゴリ	子どもに話しかける	27
	中カテゴリ	子どもの動作を見て話しかける	3
	小カテゴリ	子どもの行動を言葉にする	1
		子どもの動作を見て感想を言う	2
	中カテゴリ	子どもにお礼を言う	6
	小カテゴリ	子どもにお礼を言い、次の行動を伝える	2
		子どもにお礼を言う	4
	中カテゴリ	子どもの行動を見て話しかける	6
	小カテゴリ	子供の行動を見て肯定的な声掛けをする	5
子供の行動を見て感想を言う		1	

表 21. 事例 E カテゴリ分類 (子から母) (つづき)

		交流の内容	カード数
4	大カテゴリ	子どもに指示を出す	42
	中カテゴリ	子どもに次の行動を伝える	28
	小カテゴリ	子どもに次の行動を伝える	27
		子どもに質問+次の指示をする	1
	中カテゴリ	子どもに次の行動を指さしで伝える	14
	小カテゴリ	子どもの次の行動を指さしで伝える	2
		子どもの後を歩きながら道を伝える	1
		子どもに触れ、指差しで道を伝える	1
		子供に指さしで次の行動を伝える	6
		子どもに指差しと言葉で次の行動を伝える	4
5	大カテゴリ	自分のペースで行動する	36
	中カテゴリ	自分のペースで行動する	36
	小カテゴリ	子どもの行動を把握した状態で自分の作業をする	35
		子供に自分の行きたい場所を伝え、自分のペースで移動する	1
6	大カテゴリ	子どもの補助をする	27
	中カテゴリ	子どもの補助をする	27
	小カテゴリ	子どもの動作を補助する、手伝う	20
		子どもの要求を受け入れ、補助する	1
7	大カテゴリ	子どもの行動を見守る	26
	中カテゴリ	子どもの作業を見守る	26
	小カテゴリ	子の作業を見ている	21
		子供が手伝いをする様子を見守っている	5

表 21. 事例 E カテゴリー分類 (子から母) (つづき)

		交流の内容	カード数
8	大カテゴリ	子どもに返答する	24
	中カテゴリ	子どもの言葉に返答する	17
	小カテゴリ	子供の言葉に返答する	15
		子どもに肯定的な返答をする	2
	中カテゴリ	子どもの行動を見て返答する	7
	小カテゴリ	子どものジェスチャーに返答する	1
		子どもの指差しを言葉にし、返答する	6
9	大カテゴリ	子どもと約束や頼み事をする	16
	中カテゴリ	子どもにお願いをする	4
	小カテゴリ	子どもにお願いをする	4
	中カテゴリ	子どもと約束をする	7
	小カテゴリ	子どもに約束事を話す	7
	中カテゴリ	子どもの手伝いを誘導する	5
	小カテゴリ	子どもに次に行って欲しい動作を暗に伝える	5
10	大カテゴリ	子どもの言動に頷く	9
	中カテゴリ	子どもの言動に対し頷く	8
		子供の言葉に対しうなづく	3
	小カテゴリ	子の作業を見て頷く	2
		子と視線を合わせうなづく	3
	中カテゴリ	子どもの話を聞くために顔を寄せる	1
	小カテゴリ	子供の話聞くために顔を寄せる	1
11	大カテゴリ	子どもに注意を促す	8
	中カテゴリ	子どもの作業を止める	4
	小カテゴリ	子の作業を止め、先にする作業を伝える	3
		子どもの名前を呼び、子どもの動作を止める	1
	中カテゴリ	子供に注意を促す	4
小カテゴリ	子供に注意を促す	4	

表 21. 事例 E カテゴリ分類 (子から母) (つづき)

		交流の内容	カード数
12	大カテゴリ	子どもとジェスチャーや視線でやり取りをする	6
	中カテゴリ	子どもの表情やジェスチャーを見てグッドのジェスチャーをする	3
	小カテゴリ	子どもの顔 (アピール) を見てグッドのジェスチャーをする	2
		子供のグッドのジェスチャーを見て自分もグッドをする	1
	中カテゴリ	子どもと視線を交わす	1
	小カテゴリ	子と視線が合い、口角を上げる	1
	中カテゴリ	子どもの指差した方向を見る	2
	小カテゴリ	子どもの指差した方向を見る	2
13	大カテゴリ	子どもに触れる	5
	中カテゴリ	子どもの身体に触れる	5
	小カテゴリ	子供の言葉に口角を上げ、子に触れる	1
		子供の腕を掴んで歩く	4

IV-6-2. 母親の行動から起こる子どもの反応について

母から子の全カード数は 378 枚であった。その内、大カテゴリは 8, 中カテゴリは 16, 小カテゴリは 49 であった。

表 22. 事例 E 大カテゴリ (母から子)

大カテゴリ	カード数	割合
①母に従い行動する	89	24%
②母と歩く	83	22%
③自分のペースで行動する	75	20%
④母の言葉に返答する	42	11%
⑤母に話しかける	35	9%
⑥母の言葉に言葉以外で反応する	30	8%
⑦母に触れる・見る	19	5%
⑧母とジェスチャーでやり取りをする	5	1%
	378	

①母に従い行動する (89 枚)

このカテゴリでは、「お願いします」などの母の言葉によりゴミ捨てるなどの手伝いを開始し、その後もしばらく手伝いを続けるというように、母の手伝いをする場面が最も多く観察された。写真を撮る際に「もっとちっちゃく」という母の声掛けでしゃがむなど、母の言葉に従う行動も観察された。

②母と歩く (83 枚)

母親の前方を歩くカテゴリが最も多く、続いて母親の隣を歩くカテゴリが多く観察された。歩行中に時折振り返り、母親の位置を確認しながら歩く場面も観察された。

③自分のペースで行動する（75枚）

母親に関係なく自分の好きな時間を過ごす（本を読む、ガチャガチャを探すなど）場面がこのカテゴリの約8割を占めていた。その他、自分で次に行く場所を考え歩行するなど、母の指示や確認を得ずに次の行動を考えて行動する場面も観察された。

④母の言葉に返答する（42枚）

母親の言葉や質問に返答をする場面が観察された。

⑤母に話しかける（35枚）

やりたいガチャガチャなど、自分の要求や母親に見て欲しいものを指さしで伝える場面が最も多く観察された。言葉のみまたは言葉とジェスチャーを併用して母親に話しかける場面も観察された。

⑥母の言葉に言葉以外で返答する（30枚）

母親の言葉や質問に対し、頷きで返答する場面が最も多く観察された。その他、指差しや母親の顔を見るという返答の表現も観察された。

⑦母に触れる・見る（19枚）

母親の顔を見る場面が観察された。母親の腕や背中に触れる場面も観察された。母親は、普段はもっとボディタッチが多いと述べていた。

⑧母とジェスチャーでやりとりする（5枚）

母親とグッドのジェスチャーをする場面が観察された。グッドを合わせる場面もあった。

表 23. 事例 E カテゴリ分類 (母から子)

		交流の内容	カード数
1	大カテゴリ	母に従い行動する	89
	中カテゴリ	母の言葉に従い行動する	79
		母の言葉に従い行動する	11
		母の指示に従う	17
	小カテゴリ	母との約束事を守る	1
		母の言葉で次の行動に移る	7
		母の手伝いをする	43
	中カテゴリ	母の補助に従う	10
	小カテゴリ	母の補助に従う	10
	2	大カテゴリ	母と歩く
中カテゴリ		母と歩く	83
		母の前を歩く	32
		母の位置を確認しながら母の前を歩く	8
小カテゴリ		母の動きに合わせて移動する	10
		母の隣を歩く	25
		母に進む方向を指さしで伝え、歩く	2
		母の指示・指差しに従い歩く	6
3	大カテゴリ	自分のペースで行動する	75
	中カテゴリ	自分のペースで行動する	60
		自分のペースで行動する	48
		母の言葉を聞きながら自分のペースで行動する	6
	小カテゴリ	母の顔を見ながら自分のペースで行動する	3
		母の隣で周囲を見る	1
		母の隣で自分のペースで行動する	2
	中カテゴリ	自分で次の動作を考え行動する	15
	小カテゴリ	自分で次の動作を考え行動する	14
		母の行動から次にすべき動作を読み取り行動する	1

表 23. 事例 E カテゴリ分類 (母から子) (つづき)

	交流の内容	カード数	
4	大カテゴリ 母の言葉に返答する	42	
	中カテゴリ 母の言葉に返答する	40	
	小カテゴリ 母の質問に返答する	21	
	母の言葉に返答する	17	
	母の言葉を繰り返す	1	
	母に言われた約束事を繰り返す	1	
	中カテゴリ 母の言葉に対し質問する	2	
	小カテゴリ 母の言葉に対し質問する	2	
	5	大カテゴリ 母に話しかける	35
		中カテゴリ 母に話しかける	10
小カテゴリ 母に話しかけながら (独り言?) 次の行動を取る		1	
母に次の動作を伝える		2	
母に話しかける		4	
母に指さしを交えて話しかける		3	
中カテゴリ 母に希望を伝える		1	
小カテゴリ 母に希望を伝える		1	
中カテゴリ 母に希望や欲求をジェスチャーで伝える		21	
母に自分の要求を指さしで伝える		8	
母にゴミを渡す		2	
小カテゴリ 母に次の行動 (進む方向) を指さしで伝える		2	
母に見て欲しいものを指さしで伝える		8	
母に指さしで次の動作を伝える		1	
中カテゴリ 母に自分の行動をアピールする		3	
小カテゴリ 母に終了を伝える (アピール)		1	
母の顔を見て終了を伝える (アピール)		2	

表 23. 事例 E カテゴリ分類 (母から子) (つづき)

	交流の内容	カード数	
6	大カテゴリ 母の言葉に言葉以外で反応する	30	
	中カテゴリ 母の言葉に対し言葉以外で反応する	25	
		母の言葉に頷く	14
		母の質問に対し頷く	7
	小カテゴリ 母の質問に対し母の顔を見る	1	
		母の質問に指差しで返答する	2
		母に名前を呼ばれ、動作を止める	1
	中カテゴリ 母のジェスチャーに対し反応する	5	
		母の動作を見てうなづく	1
	小カテゴリ 母が頷き、子も頷く	1	
		母の指差しを見て、次の行動を言葉にする	1
		母の指差した方向を見る	2
7	大カテゴリ 母に触れる・見る	19	
	中カテゴリ 母に触れる	2	
	小カテゴリ 母に触れる	2	
	中カテゴリ 母を見る	17	
	小カテゴリ 母を見る	17	
8	大カテゴリ 母とジェスチャーでやり取りをする	5	
	中カテゴリ 母とグッドのジェスチャーをする	5	
	小カテゴリ 母にグッドのジェスチャーをする	3	
		母とグッドのジェスチャーを合わせる	2

V. 考察

V-1. 事例 A

V-1-1. 子どもの行動から起こる母親の反応について

「子どもを見守る」というカテゴリが最も多く観察された。観察が外出場面であったことが、カテゴリ数が多くなった要因のひとつであると考えられる。母親は過去の経験から、外出時に気を付ける点を把握し、子どもに気を配り、常に存在を確認できるように子どもを見守る行為が多かったと考えられた。子どもを見守る行為の中には、子どもに反応を求め、訴えを理解するために子どもを見ている行為も含まれていた。また、子どもが無意識に近づく行動を見守ったあとに次の行動に移る場面や、子どもが頷きなどの動作で母親に対して返事をする行為を見守ったあとに次の行動に移る場面が観察された。これは、母親の見守り行為が、母親の次の行動のきっかけに繋がったと考えられた。そのため、子どもに対して積極的な働きかけを行うばかりではなく、見守る事にも重要な役割があると考えられる。以上より、見守りには子どもの反応や訴えを観察すること、子どもを待つこと、子どもが何を行っているか観察することなど様々な種類があることが分かった。

母親が「子どもに注意を促す」カテゴリは2番目に多く観察された。母親は子どもに物や進む方向を指さすなど、視覚的に注意を向ける行為が多く、特に移動時の注意の促しが多かった。移動中に見られた指さしは無意識に行っていると述べており、今回の観察中には母親が指差しをする行動が多くあった。母親が注意を喚起することで、子どもの危険を回避する行動に繋がっていると考えられた。日常的に行われている行動は無意識に行っていることを面接時に述べており、指差しの動作は日常的に行われている無意識の行動であると思われる。今回の観察場所は、ショッピングセンターで買い物と食事をする場面であったため移動が多く、移動時の注意の促しが多く観察される一因となっていたと思われる。先行研究⁶²⁾によると、自閉症スペクトラムにおける視覚性事象関連電位 P300 および聴覚性事象関連電位 P300 を健常児と比較検討した結果、視覚性 P300 潜時は健常児とほぼ同様であり、視覚

優位性が示された等の報告がなされており、「視覚優位」は自閉症の特性の一つとされている。母親は ASD 児の苦手さであるコミュニケーションを補う一つの方法として、指差しを用いて注意を向けるというような、視覚的情報を用いた危険を回避させる働きかけを行っていたと考えられる。また、ASD 児には共同注意の苦手さがあると報告されており、共同注意は共同注意への応答と共同注意の開始に分けられる⁶³⁾。事例 A では母親の指差しを追従することが可能であったため、共同注意への応答が可能であることが分かった。母親はこの行動を無意識に行っていると述べていたが、共同注意への応答が可能であるという子どもの能力を無意識の中で自然と見極め、日常生活に反映させていたと思われる。そのため、事例 A の親子には、子どもの特性を生かしたコミュニケーション方法が日常生活で自然と育まれていたと考えられる。

さらに「子どもに話しかける」というカテゴリは 3 番目に多いカテゴリであった。母親は子どもに行動の促しや選択肢のある質問、要求の確認等の意味を含めて話しかける行為を行っていた。母親は、次の行動に移る際には、子どもの混乱を避けるために事前に行動を伝えていると述べていた。母親が子どもの特徴を理解していること、子どもの特徴に合わせて事前に行動を話すことで子どもの混乱を防ぐことに繋がっていると考えられる。また、母親は子どもに選択肢のある質問をしていた。大まかな質問から徐々に絞っていくことで、子どもの要求を理解しようとしていると母親は述べている。質問をする際にも、漠然と子どもに聞くのではなく、質問する内容を選択肢にするなど、子どもの能力や特徴に合わせて意思を伝えやすいような工夫をすることが有効であると考えられた。また、母親は子どもに確認をしていた。母親は同じ問いを繰り返す行為や「ねえ」と問いかける行為が見られた。「ねえ」は繰り返し出てきた言葉でもある。「ねえ」という声かけには同意・質問・確認といった多様の意味を含んでおり、親子の日常生活で構築されていった言葉であると考えられる。子どもの訴えが分からない場合には、繰り返し確認する場面が観察された。繰り返し聞く行為や質問の方法を変えることでお互いに理解を深めることができているのではないかと考えら

れる。質問以外にも繰り返し確認をする行為が、子どもの要求を理解する方法の一つとなっている可能性があると考えられた。

「子どもの行いたいことを察し補助する」というカテゴリも観察された。ASD 児の特徴として社会的コミュニケーションの苦手さが挙げられるため、子どもの苦手さを母親が察し、理解または補うことにより親子のコミュニケーションが成り立ち易くなり、子どものストレスの軽減にもつながると考えられる。見守りや選択肢の提示など、上記で述べたような母親の工夫が、子どもの意思を察すること、コミュニケーションの成り立ち、そして親子関係の良好さに繋がっていると考えられる。

V-1-2. 母親の行動から起こる子どもの反応について

「母親のジェスチャーに YES・NO で反応を返す」というカテゴリが最も多く観察された。子どもは母親に話しかけられた時、Yes・No の反応を、頷くこと、手を挙げること、首を横に振る動作といった様々な行動で示していた。その他にも、態度やジェスチャーを用いて子どもは母親に意思を伝えようとしている様子が観察された。ジェスチャーは大人から教わったサインではなく子ども独自の表現となっている場合もあると考えられる。事例 A の母親は子どもの行動を見逃している割合は 3%のみであったため、子どものサインを見逃さないように注意することも、親子の関係性に必要な要素の一つである可能性がある。また、子どもの表現を見逃さないことで、子どもが新しい表現を行った際にその表現に気づくことができ、子どもが日常的に使用するコミュニケーションの手段が増えることや、子どもの表現の幅が広がっていくことに繋がると考えられる。さらに、子どもは指差しにて母親に欲求を伝えようとする場面も観察された。指差しは共同注意の一種である。共同注意の種類として、共同注意への応答と共同注意の開始について先に述べたが、さらに先行研究において、共同注意はその行動の動機づけに基づき、命令的共同注意と叙述的共同注意に分けられる⁶⁴⁾と言われている。命令的共同注意は、自分が欲しいものを他者に伝えようとする要求の意味を持った指差しなどの行動である。叙述的共同注意は、自分が他者に見てもらいたいものを伝えようとする叙述の意味を持った指差しなどの行動である。最近では、命令的に代わり要求、叙述的に代わり共有という用語も使われている⁶⁵⁾。社会性・コミュニケーションに困難を抱える自閉症スペクトラム障害を持つ者では、共同注意にも困難を抱えることが示されており、特に、命令的共同注意ではなく、叙述的共同注意の出現が遅れる、または、見られないということが報告⁶⁶⁾されており、事例 A の子どもにも共同注意、特に叙述的共同注意の未熟さが認められたと考えられる。母親の指差しによる注意の促しや子どもの意思に関する質問、確認などの話しかけは親子で子どもの意思や次の行動を共有し一緒に行動をすることにもつながるため、叙述的共同注意の未熟さを補完するコミュニケーション

の一つとなっている可能性が考えられる。

2番目に多く観察されたカテゴリは「自身の意思で行動する」である。子どもは母親の働きかけがない場合でも、周囲や子どもの興味があるものに視線を向けて行動していた。子どもの興味があるものに対しては、母親の働きかけに反応せず、態度で自身の意思を伝えていた。また、母親に理解されなかった際に、子どもの意思表示は繰り返し実施され、母親に意思を伝えようとしている場面が観察された。子どもが母親に伝えたいことは何度も繰り返し行われている可能性があるため、事例 A の母親のように、子どものサインを見逃さず、理解していくことが必要であると考えられた。この表現は子どもの特徴や親子によって様々であるため、個別に評価し、援助していく必要があると考えられる。

さらに、「母親が注意を促す対象を見る」というカテゴリは3番目に多く観察された。子どもは母親の視覚的な働きかけに対して、反応し行動をしていた。これは共同注意への応答が可能であり、母親の注意喚起に反応することができているためであると考えられる。子どもは母親の働きかけをよく見て行動しており、母親はそのことを理解し、子どもに働きかけていると考えられた。また、子どもは母親の働きかけをよく見るという習慣が付くことで、親の働きかけへの気づきとなり、親子のコミュニケーションが構築、発展していく可能性がある。子どもはよく母親の働きかけを見ている可能性があること、子ども一人ひとりの特徴を把握し、さらにその特徴を伸ばす働きかけをしていく必要が示唆された。

V-2. 事例B

V-2-1. 子どもの行動から起こる母親の反応について

事例Bでは、「子どもの行動を管理する」カテゴリが最も多く観察された。「靴をそろえなさい」「うがいしよう」など子供に次の行動を指示・提案する母親の行動により、子供が動作をスムーズに行うことに繋がったと考えられる。子供の体に触れて誘導することや、子供が次にすべき行動を指さしやジェスチャーにて伝える場面、こどもの行動を制する動作は、192 枚中 10 枚と少数であった。そのため、母親は子どもの行動の枠組みを示すことで子どもが次にすべき動作を理解しやすくなるように工夫をしているが、決して子どもの行動は制限していないと考えられた。枠組みを作成することは、子どもの困惑や混乱を防ぐことに繋がると考えられる。これは、子供が混乱し、母親が怒ることやお互いにストレスが生じる原因を防ぐ事にもつながっていると考えられる。

「子どもの行動を管理する」に次いで多く観察された「子どもに話をする」カテゴリでは、ほとんどが子どもに関連する話題を提供していた。全てが肯定的な声掛けであり、否定的な声掛けは観察されなかった。しかし、危険が生じる場面では子どもの行動を注意する言動が観察された。

その他、子どもからのアクションの有無に関わらず子供の助けをする行動や、言動を察し、補助や回答する行動が観察された。このカテゴリから、母親が子どもの気持ちや要求を読み取ることができていると考えられる。これは子どもとの生活の中で培われたコミュニケーション方法の一つであると思われる。

また、母親が子どもの行動を観察していないカテゴリも少数観察された。しかし、このカテゴリはすべて自宅内で観察されたものである。そのため、子どもの行動を予測できていることや子どもを信頼していることから発生したカテゴリであると考えられる。

V-2-2. 母親の行動から起こる子どもの反応について

「母親に従う」カテゴリが最も多く観察された。母親の行動として、「子どもの行動を管理する」カテゴリが最も多く観察されていることが一因となり、子どもは「母親に従う」行動が多く観察されたと考えられる。3番目に多いカテゴリが「自分の意思で行動する」であったが、その内、母親の指示や注意に従わない場面は約2割と少数であった。この結果より、母親の指示に従う場面の方が圧倒的に多く観察されたことを読み取ることができる。母親の指示に従う行動は、母親の指示を理解できているために取ることができる行動であると考えられる。さらに、「母親に応答する」が2番目に多いカテゴリであり、「母親に要求する」が4番目に多いカテゴリとなっていた。この応答や要求の方法はどちらもジェスチャーが9割程であった。これらの結果から、子どもは発語が未熟であるものの、母親の指示を理解し、母親に自分の意思や要求を伝える手段を持っていると考えられる。つまり、親子間でコミュニケーション方法が確立しているといえる。

V-3. 事例C

V-3-1. 子どもの行動から起こる母親の反応について

「子どもと歩く」というカテゴリが最も多く観察された。これはほかの事例でも観察されたカテゴリであり、観察場面によってカテゴリ数が左右される可能性が考えられる。事例Cでは、子供を誘導するように、手つなぎなどで子どもに触れて歩く場面が多く観察された。また、子どもの少し前方を歩行する場面も観察されたことから、「子どもと歩く」は、移動だけでなく、子どもの危険回避の意味を含んだ行動であると考えられる。これは年少児の母親にも観察される行動であり、子どもの能力に合わせて母親が取っている行動であると考えられる。

「子どもの行動を把握する」では、子どもを見ている場面のほかに、子どもの近くで自分の作業をしている場面も含まれていた。子どもの行動を予測できているために出現したカテゴリであると考えられる。

「子どもに肯定的な対応をする」は4番目に多く観察されたカテゴリである。子どもに注意をしていた場面は感染症対策に関する内容の2回のみであった。子どもの行動を制限する言動は、周囲への注意と電車乗車時のマナーとして声を小さくするように伝える場面のみであった。子どもの危険やマナーに関する事象のみを統制し、その他は肯定的対応を取るか、子どもの自由にさせていると考えられる。

「子どもとスケジュールを確認する」はメモを用いてスケジュールの説明や確認を行っていた。これは視覚優位であるという子どもの特徴を生かした工夫であると思われる。また、このメモを用いた工夫は「構造化」であると考えられる。ASD児者に対し高い有効性が確認されている指導教育方法の1つにTEACCHプログラムの「構造化された指導」が挙げられる⁶⁷⁻⁷⁰。構造化とは、「自閉スペクトラム症のある子どもに周囲で何が起こっているのか、そして彼ら一人ひとりの機能に合わせて、何をすればよいのかを分かりやすく提示する方法」⁷¹である。さらに構造化された指導とは、時間と空間の意味を、自閉症児者に対して

視覚的に理解可能な形で伝えていくための「合理的配慮」であり、これを個別に適用するためのアイデアである⁷²⁾。事例 C の母親は、自宅でもカレンダーに写真を貼り、スケジュールが視覚的に分かるような工夫をしていると話していた。また、これは子どもとの生活の中で生まれた工夫であると聴取したことから、構造化された指導が親子の日常生活で自然と育まれたのだと考えられた。

V-3-2. 母親の行動から起こる子どもの反応について

「自分のペースで行動する」が最も多いカテゴリであった。このカテゴリには、自分のペースで歩行する行動のほかに、周囲の先生や撮影者に話しかける様子や独り言を話す場面が観察された。母親は子どもの危険やマナーに関する事象のみ統制していたため、その他については、子どもは行動制限を受けることなく、自由に活動できていたと考えられる。これは子どものストレスの軽減にもつながっていると考えられる。

また、事例 C の特徴として、身体を前後左右に揺らす行動や母親に頭を寄せる行動が観察された。身体を前後左右に揺らす動作は母親から肯定的な言葉が得られた時や、母親に頭を寄せ、頭をなでられた時、電車が通った時に観察された行動であり、喜びの表現であると思われる。そのため、言葉やジェスチャー以外にも感情を表現する動作を持っていると考えられた。この動作の大きさや長さはさまざまであったが、母親に止められる場面は観察されなかったため、子どもは感情を自由に表現できていると思われる。頭を寄せる表現について、母親は「ほめてほしい時に頭を近づけてくるようになった」と述べており、「この行動が見られた時にはなるべく頭をなで、ほめるようにしている」と発言していた。子どもの独特な表現を母親が理解していることで、子どもの欲求を満たすことにつながっていると考えられる。

V-4. 事例D

V-4-1. 子どもの行動から起こる母親の反応について

最も多く観察されたカテゴリ「子どもの作業について話す」では、次に行う作業に関する指示や助言を行っていたが、母親は子どもにお願いをする口調で話しをしていた。次の作業についてあらかじめ話すことは子どもの混乱を防ぐことにつながっていると考えられる。さらに、口調を工夫することは、子どもが指示や助言を受け入れやすくなる効果や、ストレスを与えないようにする工夫の意味が込められていると思われる。また、スマートフォンで作りの説明や写真を見せながら次の作業を提示する場面もあった。他の事例でも観察されたように、視覚的に提示することで子どもの理解を深めやすくする効果があると考えられる。また、「子どもの作業環境を整える」は事例Dのみで観察されたカテゴリである。環境を整えることで子どもが行っている作業が遂行しやすくなるため、子どもの作業（お菓子作り）の失敗を防ぎ、成功体験につながる可能性が考えられる。

先に述べた構造化の主たる方法は視覚的構造化と物理的構造化である。視覚的構造化とは、子どもに、自分は今、どこで何をどれだけすることが期待されているのか、それが終われば次に何が期待されているのか、あるいは自分は何をすることを希望できるのか、など、環境への積極的な適応のしかたを自覚することができるように援助するものである⁷³⁾。事例Dで観察されたスマートフォンによる文字や絵による次の作業の提示は、この視覚的構造化に含まれると考えられる。また、物理的構造化とは、住宅の内部や学校の教室内を、家具、ついでに、カーペットなどを用いて、その配置に工夫を凝らして、子どもが各場所や場面の意味を視覚的に理解しやすくすることである⁷⁴⁾。お菓子作りで母親が実施していた環境づくりは物理的構造化の一つであると考えられる。次の作業を視覚的に確認する視覚的構造化と、周囲から不必要な物を片付ける物理的構造化は、子どもの作業の遂行しやすさに繋がっていると考えられる。

V-4-2. 母親の行動から起こる子どもの反応について

「母に関係なく自分のペースで行動する」が最も多く観察されたカテゴリであり、このカテゴリの一部で独り言を話す場面が観察された。独り言は ASD 児の特徴の一つであるため、この ASD の特性を制限されないことが子どものストレスの軽減につながっていると考えられる。

「母を助ける行動をとる」というカテゴリは事例 C の特有のカテゴリであった。これは、「子どもに助けを求める」という母親のカテゴリに対し派生したカテゴリであると考えられる。子どもは母親からの働きかけを拒否する場面はなく、親子で助け合う関係性が築かれていると思われた。「母の気を引く行動をとる」というカテゴリでは母親にいたずらをする様子が観察された。これらは ASD の特性に関わらず、親子のコミュニケーションの一つとなっている行為であると考えられる。

V-5. 事例E

V-5-1. 子どもの行動から起こる母親の反応について

「子どもと一緒に歩く」が最も多いカテゴリであった。屋外の撮影であったため、場所もカテゴリ数に影響を及ぼしていると考えられる。事例Eの特徴として、母親が子どもの前方を歩く場面は観察されなかった。これは子どもが行き先を理解していることや、子どもの行動を予測できている可能性、子どもの自由度を高めている可能性が考えられる。2番目に多く観察された「子どもに質問する」のカテゴリでは、否定的な言葉は1度も観察されなかった。肯定的な行動はほかの事例でも観察されており、親子関係に重要な要素の一つである可能性がある。

「子どもの行動を見守る」カテゴリでは、母親の頼み事や手伝いをする様子を後方から見守り、応援している様子が観察された。また、「子どもと約束や頼み事をする」というカテゴリもあった。子どもの行動を見守ることで行動を把握しているだけでなく、手伝いを通して挑戦させ、子どもの成長を促していると考えられる。つまり教育の一環としての見守り行為であると考えられ、補助をしないことが子どもの成長を促すことに繋がっていると考えられる。この行動が観察された場面は買い物とごみ捨てであり、手段的日常生活動作（以下IADL）に必要な練習を、日常生活を通して実施していると考えられた。

「子どもに触れる」というカテゴリに関して、他の事例においても子どもに触れる行動が観察されたが、事例Eに特徴的な要素として、危険場面以外でも、子どもに触れる行動が観察された。母親は「普段はもっと多い」と述べており、愛情表現として行われていることが分かった。

撮影後に母親から、子どもの苦手（映画館などの静かな空間や感覚過敏）について聴取したが、その際、子どもは母親の言葉を頷きながら聞いていた。観察中に映画館に立ち寄った際には、館内のキャラクターとの写真撮影やパンフレットの閲覧にとどめており、映画館で観ることについては質問をしていなかった。聴取の際には、「自宅であれば観ることができ

る」とも述べており、子どもの特性を理解できていること、さらにその特性を子どもと共有し、親子で一緒に特性に対する工夫をしている可能性が考えられた。買い物のように実際に練習をする作業と、映画館は自宅で観るというように、苦手を無理に克服させようとせず、環境面の工夫を母親が併用していることで子どもの特性を考慮した関わり方ができている可能性が考えられる。

V-5-2. 母親の行動から起こる子どもの反応について

「母に従い行動する」というカテゴリが最も多く、中でも手伝いをする場面が最も多く観察された。拒否をする場面は観察されなかったため、手伝いが子どもにとって嫌いな作業となっていないと考えられた。「母親に触れる・見る」では、子どもから母親に触れる場面も観察され、母親にとっても、子どもにとっても愛情表現となっていると思われた。

撮影後に母親が子どもの苦手について話した際には頷きながら聞いており、自分の特性を子ども自身も理解していると考えられる。子ども自身が理解することで、自分自身で苦手に対する工夫ができるようになると考えられる。

V-6. 研究2（事例A～E）全体考察

V-6-1. 子どもの行動から起こる母親の反応について

今回、研究2の協力者として親子関係が良好である親子を設定し、ビデオ分析を実施した結果、作成されたカテゴリは多様であり、事例毎に異なっていた。つまり、子どもに対する母親の対応は親子によって多岐にわたることが示された。

5組の母親に共通しているカテゴリとしては、「子供を見守る」「子供に話しかける」であった。そのため、子どもに対する見守り行為と話しかける行為は親子関係を良好に保つ上で重要であると考えられる。

また、どの母親も子どもに対する否定的な言動はごくわずかもしくは全く観察されなかった。子どもを見ていない、または子どもの行動を把握していない場面もごくわずかもしくは全く観察されなかった。これらの行動を取らないことも親子関係の良好さの一要因となっている可能性があると考えられる。

V-6-2. 母親の行動から起こる子どもの反応について

母親同様、子どもも事例によって作成されたカテゴリは多様であった。つまり、子どもの反応や行動も親子によって多岐にわたることが示された。母親に対する返答の方法や意思の伝え方は、子どもの特性や表現方法、言語レベルにより異なるカテゴリとなっている場合がある。母親のカテゴリが親子毎に異なっていた理由として、子どもの表現方法に差があることが一要因であると考えられる。

5組の子どもに共通しているカテゴリとしては、「自分のペースで行動する」「母親に返答する・反応を返す」「母親に従う」であった。母親の共通点として、子どもに対する見守り行為が共通して観察されたこと、子どもに対する否定的な言動が少ないことにより、子どもは自分のペースで行動できていたと考えられる。また、母親への返答が共通事項であったことから、今回対象となった子どもは全員、母親に対する何らかの意思を伝える手段を持っていたといえる。母親に従う行動からは、母親の子どもに対する言動を理解できていることが読み取れる。さらに、母親との良好な関係性がこの行動からも示唆されていると考える。

VI. 本研究の限界

今回、1事例約1時間ずつで合計5事例の日常生活場面の観察を実施した。1時間という時間は日常生活の一部を切り取った観察時間であるため、全ての日常生活場面を観察することはできていない。そのため、観察時間数の増加や他の観察場面を追加することにより、さらなる親子のコミュニケーション方法に対する知見を得ることができる可能性がある。

VII. 結語

子供は「自分のペースで行動する」「母親に返答する・反応を返す」「母親に従う」、親は「子供を見守る」「子供に話しかける」というカテゴリが5組すべての親子に共通していた。子どもは親からの話かけに対し、何らかの言動を返す場面が多く認められた。この結果から、子どもが親に意思を伝える手段を持っていることが、親子が良好な関係性を築いている一要因であると考えられる。また、親の見守り行為も共通事項であった。これは、親が子どもの特性を理解し、行動を予測できていることが要因であると考えられる。このような共通点を日常生活で活用することが、良好な親子関係を築くための一助となると考えられる。しかし、5組それぞれ異なる結果も出現したことから、親子に応じてコミュニケーション方法は異なり、支援方法にも個別性が必要であることが示された。

第四章 研究3. ASD 児の適応行動能力と母親の養育力の関係性について

I. 背景

日常生活における親子の交流を分析することは、ASD児と家族のコミュニケーションや社会参加への一助となると考える。そのため、研究2ではASD児と母親の日常生活場面のビデオ分析を実施した。結果、コミュニケーションが良好な親子の特徴として、子供の「自分のペースで行動する」「母親に返答する・反応を返す」「母親に従う」、親の「子供を見守る」「子供に話しかける」というカテゴリがすべての親子に共通していた。一方で親子毎に異なる結果も多々あった。ASDの症状や苦手さは子どもによって異なるものであり、その違いによって母親の行動も異なるものであった。

研究2の対象児の選定方法としては、ASDの診断が付いていることを基準の一つと設定した。そのため、子どもの適応行動能力にはASDの特性が出現していると予測される。しかし同時に、親子が良好な関係性を築くことができていることも選定基準として設定している。そのため、親子の属性にバイアスが生じている可能性がある。具体的には、良好な親子関係を築くことができている要因として、ASD児の中でも比較的適応行動能力が高い子どもが選択されている可能性があると考ええる。親子関係を築く要因として、子の適応行動能力が高い場合と低い場合では、研究2で得られた結果の解釈に異なる部分が生じる。さらに、親子関係を知るためには、子どもだけでなく、親の特性を知ることも重要である。研究2では、ASD児と良好な関係性を築くことができている親が選定されているため、研究2で対象となった親にはASD児を育てる中で培われたASDの知識や捉え方、子どもに対する感情、周囲のサポート等、良い親子関係を築くために参考となる親の養育力に関する特徴が出現する可能性があると考ええる。加えて、親子それぞれの背景について調査することで、ASD児を支援する作業療法士が持つべき視点に関する示唆を得ることができると考えられる。

以上より，ASD児の適応行動と親の養育力との関係を調査し，さらに自由記載にて主観的な親の工夫を調査することで，親子それぞれが持つ背景と，親子指導の在り方に関する知見を得ることができると考える。

Ⅱ. 目的

本研究の目的は、知的障害を伴うASD児の適応行動とその母親の養育力、育児における親の工夫を半構造化面接およびアンケートにて調査することで、親子指導の在り方を提言することである。

Ⅲ. 方法

Ⅲ-1. 対象者の選定

12歳から18歳の知的障害の伴うASD児を持つ養育者であり、研究2の対象者である。口頭と書面にて研究概要を説明し、書面にて同意が得られた親を対象とする。

Ⅲ-2. 測定方法

対象者全員に以下3つの半構造化面接およびアンケート調査を実施する。

①Vineland- II

Vineland適応行動尺度はSparrow⁷⁴⁾ 75) らによってアメリカで開発された標準化適応行動尺度である。2005年には再標準化と改訂を加えたVineland適応行動尺度第2版(以下、Vineland- II)⁷⁴⁾ が出版された。日本で唯一の国際基準の適応行動評価尺度であり、英語版・日本語版ともに信頼性・妥当性の検討がなされている。さらに、Vineland- II面接フォームを用いて評価する適応行動の領域および下位領域は、適応行動に関する現行の研究に一致しており、アメリカ精神遅滞学会および「DSM-IV-TR精神疾患の診断・統計マニュアル」の基準に対応していることから、信頼性・妥当性が担保されている評価尺度であると考えられる。

Vineland- II では、適応行動は「個人的、また社会的充足に必要な日常活動の能力」と定義されており、適応行動尺度と不適応行動尺度の2つの構成に分けられている。

Vineland- II の下位領域は、コミュニケーション、日常生活スキル、社会性および運動スキルの4領域に分類される。評価対象者の年齢または発達水準に応じて、20～60分程度の半構造化面接を実施し、採点される。研究2では日常生活場面のビデオ分析を実施しており、研究3では子どもの適応行動を調査することが目的の一つである。以上の理由から、子どもの適応行動尺度の評価として、日常生活場面の能力を評価することが可能なVineland- II を選択した。

②養育レジリエンス要素質問票^{76) 77)} (PREQ) (添付資料1)

発達障がいのある児に関連する課題や困難に適応するのに役立つ要素を母親がもつ度合いを測定する質問紙である。レジリエンスの尺度は多岐にわたり、領域に特化した定義を用いて尺度開発が行われることがある。研究3にて使用する「養育レジリエンス要素質問票」は発達障害児(者)を持つ養育者に特化して開発されており、信頼性・妥当性の検討がなされた評価尺度である。「子どもの特徴に関する知識(4.6.9.11.14.15)」,「社会的支援(2.3.5.7.10.16)」,「肯定的な捉え方(1.8.12.13)」の3つの分類から構成されている。1点「全く当てはまらない」～7点「非常によく当てはまる」の7段階で養育者自身が評価する。

③自由記載(添付資料2)

アンケート項目は「情緒面, 行動面の問題に対する対処法」「日常生活における困り感について」「ADL, IADLのどの項目に困難さが強い(特に工夫が必要な動作・場面・場所はあるか)」「研究1の結果より検討(コミュニケーションを取る上で心掛けていること等)」等の自由記載である。親が記載し, 研究2で得られた結果と比較する。

III-3. データ生成

Vineland-IIとPREQの結果を事例ごとにまとめる。この結果から, 各事例の子どもの適応行動レベルや母親の養育力が研究2の結果に影響を与えている可能性について質的に検討をする。自由記載に関しては, 研究2の結果と併せて, 母親が行っている主観的な工夫に関する知見を得る。

IV. 結果

IV-1. 事例 C

IV-1-1. Vineland - II

Vineland - II の結果を表 24 に示す。先行研究で示されている点として、ASD 児は適応行動の「コミュニケーション」、コミュニケーションの中の「表出言語」、日常生活スキルの中の「地域生活」、社会性の中の「遊びと余暇」、不適応行動のうち「内在化」において顕著な障害がみられるとされている。

事例 C の強みは「受容言語」「身辺自立」、弱みは「コミュニケーション」「地域生活」「遊びと余暇」という結果であり、ASD の特徴と一致していた。

表 24. Vineland - II 適応行動尺度 結果 (事例 C)

Cさん (17:8)	適応行動 総合点	コミュニケーション			日常生活スキル			社会性			不適応行動	
		受容 言語	表出 言語	読み 書き	身辺 自立	家事	地域 生活	対人 関係	遊び と余 暇	コー ピン グス キル	内在 化	外在 化
V 評価点		11	1	1	8	6	1	6	1	5	21	20
標準得点	20	20			31			31				
(不)適応 水準	低い -5SD	やや 低い	低い	低い	低い	低い	低い	低い	低い	低い	高い	やや 高い
		-1SD	-4SD	-4SD	-2SD	-3SD	-4SD	-3SD	-4SD	-3SD		
		低い (最重度)			低い (重度)			低い (重度)			やや高い	
		-5SD			-4SD			-4SD				
相当年齢		4;6	3;8	6;0	6;7	7;1	6;8	2;0	1;10	6;9		
強み(S)と 弱み(W)		S			S		W		W			
			W									

IV-1-2. 養育レジリエンス要素質問票

次に、養育レジリエンス要素質問票の結果を表 25 に示す。「子どもの特徴に関する知識 (4.6.9.11.14.15)」の得点率は 79%、「社会的支援 (2.3.5.7.10.16)」の得点率は 76%、「肯定的な捉え方 (1.8.12.13)」の得点率は 71%であった。

項目 7.10 は逆転項目である。最低点は「10.一人きりで子育てをするしかないと思う」であった。最高点は 6 点または 2 点 (逆転項目) であり、「3.子育てについて相談できる人がいる」「4.子どもが問題を起こした時、その原因が分かる」「6.子どもの特徴を理解している」「7.子どもについて一人で悩んでいる」「14.子どもがやりやすそうなことが分かる」「15.子どもの苦手なところを理解できる」「16.子どもに関することで頼りにできる人がいる」となった。中央得点の 4 点を下回る項目はなかった。

表 25. 養育レジリエンス要素質問票 結果 (事例 C)

Cさん	全く当てはまらない 1	当てはまらない 2	どちらかという当てはまらない 3	どちらでもない 4	どちらかという当てはまる 5	当てはまる 6	非常によく当てはまる 7
1.子どものためなら、どんなことでもできる					○		
2.子どもが困ったときに、助けてくれる人がいる					○		
3.子育てについて相談できる人がいる						○	
4.子どもが問題を起こした時、その原因が分かる						○	
5.子どもを将来助けてくれそうな人がいる					○		
6.子どもの特徴を理解している						○	
7.子どもについて一人で悩んでいる		○					
8.子どもと話しをしたり、遊んだりすることを楽しんでいる					○		
9.子どもが向いていること (教科、遊び、仕事など) を分かっている					○		
10.一人きりで子育てをするしかないと思う				○			
11.子どもの特性に関する知識は豊富な方だ					○		
12.子どもとの関わりを大切にしている					○		
13.子どもが私に活力を与えてくれる					○		
14.子どもがやりやすそうなことが分かる						○	
15.子どもの苦手なところを理解できる						○	
16.子どもに関することで頼りにできる人がいる						○	

IV-1-3. 自由記載

感情面の困り感や苦手な点として、母親は「先の見通しが立たないと不安になる」「大きな声や否定的な言葉が苦手」「興奮しすぎる」こと、得意な点は「行事や予定を記憶できる」を挙げていた。その対処法や工夫点としては、「文字や写真などで伝える」「2-3語文で伝える」「肯定的な表現をする」との回答であった。

行動面では、困り感や苦手な点は「独り言が多い」「早起きをする」「引掻く、爪を立てる、髪を引っ張るといような他害がある」こと、得意な点は「朝の身支度など、ルーティン化しているとスムーズ」であることを挙げていた。対処法や工夫点としては、「大きな声になりすぎないようにする」「情緒面を安定させる」との回答であった。

日常生活動作（ADL）では、偏食や服薬の苦手さから、食事に困難さがあること、手段的日常生活動作（IADL）では、受診が苦手であると回答していた。

子どもとのコミュニケーションについては、「うまくコミュニケーションをとることができていると感じる」と回答しており、そのために「分かりやすく話すこと」を心掛けていると述べていた。

母親は感情面・情緒面・日常生活面における子どもの得意不得意について理解しており、それぞれの苦手に対し視覚的な提示や話し方というような対処法や工夫点を持ち合わせていた。

IV-2. 事例 D

IV-2-1. Vineland - II

Vineland - II の結果を表 26 に示す。事例 D の弱みは「表出言語」「地域生活」「社会性」「遊びと余暇」であったため、事例 D も ASD の特徴と一致しているという結果であった。

表 26. Vineland - II 適応行動尺度 結果 (事例 D)

Dさん (14:6)	適応行動 総合点	コミュニケーション			日常生活スキル			社会性			不適応行動	
		受容 言語	表出 言語	読み 書き	身辺 自立	家事	地域 生活	対人 関係	遊び と余 暇	コー ピン グス キル	内在 化	外在 化
V 評価点		11	7	11	12	12	3	8	1	9	21	20
標準得点	40	56			59			39				
(不)適応 水準	低い (中等度) -4SD	やや 低い	低い	やや 低い	やや 低い	やや 低い	低い	低い	低い	低い	高い	やや 高い
		-1SD	-2SD	-1SD	-1SD	-1SD	-4SD	-2SD	-4SD	-2SD		
		低い (軽度) -2SD			低い (軽度) -2SD			低い (中等度) -4SD			高い	
相当年齢		4;6	6;6	11;6	9;1	10;6	7;8	4;3	5;2	8;3		
強み(S)と 弱み(W)			W				W		W			
								W				

IV-2-2. 養育レジリエンス要素質問票

次に、養育レジリエンス要素質問票の結果を表27に示す。「子どもの特徴に関する知識（4.6.9.11.14.15）」の得点率は71%、「社会的支援（2.3.5.7.10.16）」の得点率は71%、「肯定的な捉え方（1.8.12.13）」の得点率は82%であった。

項目7.10は逆転項目である。最低点は中央得点の「5.子どもを将来助けてくれそうな人がいる」「7.子どもについて一人で悩んでいる」であった。最高点は6点であり、「1.子どものためならどんなことでもできる」「2.子どもが困ったときに、助けてくれる人がいる」「3.子育てについて相談できる人がいる」「12.子どもとの関わりを大切にしている」「13.子どもが私に活力を与えてくれる」となった。中央得点の4点を下回る項目はなかった。

表 27. 養育レジリエンス要素質問票 結果（事例 D）

Dさん	全く当てはまらない	当てはまらない	どちらかという当てはまらない	どちらかという当てはまる	当てはまる	非常に当てはまる	
	1	2	3	4	5	6	7
1.子どものためなら、どんなことでもできる						○	
2.子どもが困ったときに、助けてくれる人がいる						○	
3.子育てについて相談できる人がいる						○	
4.子どもが問題を起こした時、その原因が分かる					○		
5.子どもを将来助けてくれそうな人がいる				○			
6.子どもの特徴を理解している					○		
7.子どもについて一人で悩んでいる				○			
8.子どもと話しをしたり、遊んだりすることを楽しんでいる					○		
9.子どもが向いていること（教科、遊び、仕事など）を分かっている					○		
10.一人きりで子育てをするしかないと思う			○				
11.子どもの特性に関する知識は豊富な方だ					○		
12.子どもとの関わりを大切にしている						○	
13.子どもが私に活力を与えてくれる						○	
14.子どもがやりやすそうなのが分かる					○		
15.子どもの苦手なところを理解できる					○		
16.子どもに関することで頼りにできる人がいる					○		

IV-2-3. 自由記載

情緒面の困り感や苦手な点として、「特定の人物からの拒絶や暴力でスイッチが入り、パニックに近い状態になる」こと、「怒りで物を投げたり、攻撃的になる」ことを述べていた。得意な点としては、「気持ちの折り合いが難しいことを自覚し、自分でも折り合いがつくものをみつけようとする」「人が困っていたり泣いていると声をかける優しさがある」を挙げていた。対処法や工夫点として、「紙を破ることは見守る」を挙げており、「攻撃的になるときには相手を遠ざけたり、好きな動画で本人の気をそらせ、落ち着かせる」と回答していた。

行動面では、困り感や苦手な点として「テンションが上がるとキャラクターの叫び声を真似して声が大きくなる。」「場所を問わず自分の世界で独り言を言う。」こと、得意な点は、「トラブルがあった翌日もちゃんと学校に行く。」を挙げていた。対処法や工夫点として、「夜は小さい声でと注意をするが、5分持たない時があるため、布団の中で叫ぶ。」と回答していた。

日常生活動作（ADL）では、整容が苦手であるため、「鏡を見せたり、実際に見せて手順を確認する。」と回答していた。手段的日常生活動作（IADL）では、人との距離感、公私の区別が付きづらく、先生に親と同じように接することや、男の子との距離感が女の子と同じように近くなってしまうことを回答していた。

子どもとのコミュニケーションについては、うまくとることができていると感じると述べており、「小学1年生程度の分かりやすい言葉で話しかける。」「～してほしい、～したら？と否定や命令にならないように気を付けている。」「ゲームが終わらない時には終了時間を設定する。」というような工夫を行っているとは回答していた。

母親は感情面・情緒面・日常生活面における子どもの得意不得意について理解していた。事例Dの母親も子どもの苦手に対し、視覚的な提示などの対処法や工夫点を持ち合わせていた。さらに、「紙を破る動作は許容する」「布団の中で叫ぶ」というような許容の基準も

設定されていた。

IV-3. 事例E

IV-3-1. Vineland - II

Vineland - IIの結果を表28に示す。事例Eの強みは「受容言語」「家事」、弱みは「地域生活」「遊びと余暇」であった。事例EもASDの特徴と一致しているという結果となった。

表28. Vineland - II 適応行動尺度 結果 (事例E)

Eさん (16:7)	適応行動 総合点	コミュニケーション			日常生活スキル			社会性			不適応行動	
		受容 言語	表出 言語	読み 書き	身辺 自立	家事	地域 生活	対人 関係	遊び と余 暇	コー ピン グス キル	内在 化	外在 化
V評価点		12	5	5	8	10	1	9	1	8	20	14
標準得点	27	36			40			44			22	
(不)適応 水準	低い (重度)	やや 低い -1SD	低い -3SD	低い -3SD	低い -2SD	やや 低い -1SD	低い -4SD	低い -2SD	低い -4SD	低い -2SD	やや 高い	平均 的
	-4SD	低い (中等度) -4SD			低い (中等度) -4SD			低い (中等度) -3SD			高い	
相当年齢		5;1	5;6	9;0	6;7	9; 8;1	8;1	6;4	5;7	8;5		
強み(S)と 弱み(W)		S				S	W		W			

IV-3-2. 養育レジリエンス要素質問票

次に、養育レジリエンス要素質問票の結果を表 29 に示す。「子どもの特徴に関する知識 (4.6.9.11.14.15)」の得点率は 83%、「社会的支援 (2.3.5.7.10.16)」の得点率は 100%、「肯定的な捉え方 (1.8.12.13)」の得点率は 89%であった。

項目 7.10 は逆転項目である。最低点は 5 点の「11.子どもの特性に関する知識は豊富な方だ」であった。最高点は 7 点または 1 点（逆転項目）であり、「2.子どもが困ったときに、助けてくれる人がいる」「3.子育てについて相談できる人がいる」「5.子どもを将来助けてくれそうな人がいる」「13.子どもが私に活力を与えてくれる」「16.子どもに関することで頼りにできる人がいる」となった。中央得点の 4 点を下回る項目はなかった。

表 29. 養育レジリエンス要素質問票 結果 (事例 E)

Eさん	全く当てはまらない 1		どちらかという当てはまらない 2		どちらかという当てはまる 3		どちらかという当てはまる 4		どちらかという当てはまる 5		非常に当てはまる 6		非常に当てはまる 7	
1.子どものためなら、どんなことでもできる														○
2.子どもが困ったときに、助けてくれる人がいる														○
3.子育てについて相談できる人がいる														○
4.子どもが問題を起こした時、その原因が分かる														○
5.子どもを将来助けてくれそうな人がいる														○
6.子どもの特徴を理解している														○
7.子どもについて一人で悩んでいる		○												
8.子どもと話しをしたり、遊んだりすることを楽しんでいる														○
9.子どもが向いていること（教科、遊び、仕事など）を分かっている														○
10.一人きりで子育てをするしかないと思う		○												
11.子どもの特性に関する知識は豊富な方だ										○				
12.子どもとの関わりを大切にしている														○
13.子どもが私に活力を与えてくれる														○
14.子どもがやりやすそうなのが分かる														○
15.子どもの苦手なところを理解できる														○
16.子どもに関することで頼りにできる人がいる														○

IV-3-3. 自由記載

情緒面では、困り感や苦手な点として、「強い口調で注意したり同じ言葉を繰り返し伝えるとパニックになる」「大きな声が苦手である」こと、得意な点として、「お笑いが好き」「人が好き」「穏やかで優しい」を挙げていた。対処法や工夫は「絵を見せたり、ゆっくり落ち着いて伝えること」「目を見て伝えること」「好きなアニメのセリフで伝えること」と伝え方を工夫していた。

行動面では、困り感や苦手な点として、「やっていないことも、やった？と聞くとうんと言ってしまうこと」、得意な点・利点として、「夫婦喧嘩（なるべくしないが）をしてしまうと、仲良くするように声をかけてくれること」を挙げていた。対処法や工夫としては、「本人確認は『本当に？』と聞いたり、個室でじっくり聞くなど慎重に行うこと」「周囲の人に確認を取ること」と回答していた。

日常生活動作（ADL）では、苦手として「整容が苦手で、歯ブラシ・洗髪・髭剃り・爪切りを言わないとしっかりやらない」こと、対処法として、「姉が手袋をして歯科ごっこで歯ブラシをしてくれる」ことを挙げていた。IADLでは、「体型的に運動は苦手だが、頑張っている」「整理整頓が苦手」と述べていた。

子どもとのコミュニケーションはうまくとることができていると感じると回答しており、「目を合わせる、ハグをする」「言葉のキャッチボールが続くように言葉を選ぶ」「好きなアニメや食べ物のお話を振る」ことを心掛けていると述べていた。また、「思春期に入り、言葉や行動をお互いに気を付けている。これから大人になり、どのように成長していくのか、心配であり、楽しみである。」とも述べていた。

母親は感情面・情緒面・日常生活面における子どもの得意不得意について理解していた。事例 E の母親も子どもの苦手に対し、視覚的な提示などの対処法や工夫点を持ち合わせていた。母親は「子どもの成長が楽しみである」と述べており、ASD 児の子育てを楽しんでいることも、自由記載の回答から読み取ることができた。

V. 考察

V-1. 事例C

Vineland-IIの結果、事例Cの対象児は「受容言語」が他の項目と比較してわずかに高い結果となっていた。受容言語とは、対象者がどのように話しを聞き、注意を払い、理解しているのかを表す項目である。適応行動総合点は3事例の中で最も低い水準であったが、相手の話を聞き、理解する力の高さが事例Cの強みであると考えられる。

PREQにおいては、それぞれの項目で70%以上の得点率であり、中央得点の4点を下回る項目はなかった。母親は「子どもが問題を起こしたときに、その原因がわかる」「子どもの苦手なところを理解できる」等の項目を「当てはまる」にチェックしていた。

自由記載では、子どもの苦手に対する対処法や工夫点として、「文字や写真などで伝える」「2-3語文で伝える」「肯定的な表現をする」を挙げており、子どもの受容言語の能力を補完するようなコミュニケーション手段を用いていた。また、朝の身支度を「ルーティン化」するなど、子どもの強みである受容言語を伸ばすような工夫も行っていた。受容言語は子どもの強みであるが、年齢の標準値から考えると「やや低い」に分類されるため、母親は子どもの強みを補完しつつ伸ばす取り組みを行っていたと考えられる。これは、日常生活上のコミュニケーション場面で子どもの強みとして生かすことができる取り組みとなっていると考えられる。

事例Cの親子におけるコミュニケーションの良好さの理由は、「母親が、子どもの問題行動の原因、苦手さを理解していること」、「子どもの受容言語の能力を補完する対処を行うことができていること」、「ASDの特性を利点として活かしていること」が背景にあると考えられた。

V-2. 事例D

Vineland-IIの結果、事例Dの対象児は「身辺自立」や「家事」が他の項目と比較して高い結果となっていた。事例Dの親は、研究2でお菓子作りの場面を選択したが、これは子どもの強みを理解していることにより決定された場面設定であると考えられる。さらに、研究2は子どもの自然な日常生活場面が観察できる場所として選択してもらったため、子どもの強みが発揮される場面で日常的にコミュニケーションを取っていることも読み取ることができる。

PREQでは、それぞれの項目で70%以上の得点率であり、中央得点の4点を下回る項目はなかった。「子どものためならどんなことでもできる」「子どもとの関わりを大切にしている」「子どもが私に活力を与えてくれる」等の項目が「当てはまる」であった。これらの項目から、子どもが母親にとってポジティブな存在となっていることが読み取れる。

自由記載では、子どもの得意・不得意が記載されており、さらに、「紙を破ることは見守る」「布団の中で叫ぶ」のように、子どもの苦手に対して許容する基準を持ち合わせていた。母親は子どもの苦手を理解した上で、苦手に対する対処法・許容の基準を持ち合わせていることで、子どものストレスが軽減されている可能性があると考えられる。

以上より、事例Dの親子におけるコミュニケーションの良好さの理由は、「母親が子どもの得意な場面を理解し、子どもの強みが発揮されやすい環境で日常的にコミュニケーションを取っていること」、「子どもの苦手を理解し、それを許容する基準を持ち合わせていること」が背景にあると考えられる。

V-3. 事例E

Vineland-IIの結果、事例Eの対象児は「受容言語」「家事」が他の項目と比較して高い結果となっていた。この結果は事例Cや事例Dと同様である。

PREQでは、事例Eの親は全ての項目で80%以上の得点率であり、他の事例と比較しても特に高得点という結果であった。また、中央得点の4点を下回る項目はなく、社会的支援の項目は100%の得点率であった。この結果から、事例Eの親子にとって、周囲の存在が大きな役割を果たしており、親の養育力そして親子関係にも影響を及ぼしている可能性が示唆された。さらに「子どもが私に活力を与えてくれる」にも最高得点が付けられており、子どもの存在が母親にポジティブな影響を与えていることも読み取ることができた。

自由記載の結果からは、子どもの得意不得意が述べられており、苦手に対する対処法として「姉の協力があること」を挙げており、母親だけでなく、対象児に対する家族の理解もあると考えられる。また、「ハグをすることを心掛けている」という回答があった。これは双方の合意により成り立つコミュニケーション方法であることから、自由記載からも、親子関係が良好であることが示されていた。さらに、「子どもの成長が楽しみである」という回答もあり、PREQの結果同様、子どもが母親にとって良い影響を与える存在であり、母親は子どもの得意不得意を理解した上で、楽しみながら育児を行っていると考えられる。

以上より、事例Eの親子におけるコミュニケーションの良好さの理由は、「周囲に頼りになる存在がいること」、「母親が子どもの特性を理解した上で、楽しみながら育児を行っていること」であると考えられる。

V-4. 研究3（事例C～E）全体考察

Vineland-II 標準化適応行動尺度の結果、3事例全てがASDの特徴と一致する結果となった。研究2と研究3では、良好な関係性を築くことができている親子を対象者として設定したが、この設定によるASD児の適応行動能力に関するバイアスは生じていないことが分かった。つまり、子どもの適応行動能力は、親子関係の良好さとは関係していない。言い換えると、子どもの適応行動能力が高い場合であっても、低い場合であっても、親子が良好な関係性を築くことは可能であると考えられる。

PREQの結果、「子どもの特徴に関する知識（4.6.9.11.14.15）」、「社会的支援（2.3.5.7.10.16）」、「肯定的な捉え方（1.8.12.13）」の3つの分類による傾向は現れなかった。しかし、「3.子育てについて相談できる人がいる」は3事例すべての親が最高得点を付けている項目であった。そのため、周囲に相談できる存在がいることがASD児の親子の関係性に必要な要素の一つである可能性が示唆された。

自由記載では、3事例全員の母親から、「子どもとうまくコミュニケーションを取ることができていると感じている」と回答を得た。無回答の項目は3事例全体で1箇所のみであり、子どもの特性や得意不得意、その対処法をそれぞれの母親が持ち合わせていた。母親の工夫は子どもの特性や親子の関係性に合わせさまざまであったため、研究3の結果からも、相互作用には親子毎に個別性があり、支援にも個別性が求められることが示された。さらに、母親は子どもの苦手に対し視覚的な工夫を行っていることや、肯定的な表現で話しかけていること、言葉以外の表現をコミュニケーションの一種として用いていることと、研究2の結果で観察された結果と重なる工夫を意図的に日常生活に取り入れていることが分かった。子どもの特性に対する対処法として、子どもの得意なことや好きなもの・興味のあるものを取り入れた工夫がなされていたことから、これらの対処法は専門家から学んだものだけでなく、日常生活で親子関係が構築される中で自然と育まれたものもあると思われる。また、紙を破る動作は許容するというように、親が許容の基準を定

め、子どもも親の提示する代償方略に適応することも、親子関係の良好さと関係していると考えられる。加えて、子どもの成長を楽しみにしているという回答があったことや、関係性が良好であることが全ての親から聴取できていることから、親が子どもの特性を受け入れ、楽しみながらASD児の子育てを行うことも、親子関係に重要な要素であると考えられる。

VI. 本研究の限界

今回は研究2の結果と併せて質的に分析を行ったが、対象者が3名と少数であった。今後事例数を増やすことで、量的な分析も可能となり、一般化を目指すことができると考える。

VII. 結語

今回、研究2のビデオ分析、研究3のアンケート調査では関係性が良好なASD児と親を対象に研究を実施した。研究2の対象者の選定において、子どもの適応行動能力にバイアスが生じている可能性について検討をする必要があると考え、研究3ではVineland-II標準化適応行動尺度を実施した。その結果、3事例全てがASDの特徴と一致したことから、対象児の選定段階においてバイアスが生じていないことが分かり、適応行動能力の程度に関わらず、良好な親子関係を築くことができる可能性があることが示された。さらに、親子関係を知るためには、子どもだけでなく親の特性を知ることも重要であると考え、親の養育力を調査した。その結果、すべての親が「3.子育てについて相談できる人がいる」の項目に最高得点を付けていたことから、周囲に相談できる存在がいることがASD児の親子の関係性に重要であると考えられた。自由記載では、親が子どもの得意不得意を理解していること、そして親が子供の苦手に対する対処法を持ち合わせているという共通点があることが分かった。さらに、子どもの行動の許容範囲を設定していること、子育てを楽しんでいるという記述も見られた。

以上より、親が子どもの特徴を理解し、子どもの苦手に対する対処法そして許容範囲を設定していること、親の子育てを楽しむ力、さらに周囲のサポートの有無が、ASD児と親が良好な関係性を築くために必要な要素であることが示唆された。

第五章 総括

I. 総合考察

研究 1 の ASD 児と親の相互作用に関するスコーピングレビューの結果、青年期の ASD 児を対象とした研究や、日常生活場面で実施されている先行研究が少ないことが示された。そのため、今後日常生活場面における青年期の ASD 児と親の相互作用に関する研究を実施していく必要があると考えられる。研究 1 の対象論文で少数確認された青年期の ASD 児と親の相互作用に焦点をあてた研究²⁵⁾には、「健常児（以下 TD）の青年における親子の相互作用と社会的機能との関連は既に示されているが⁷⁸⁾、ASD の青年においてもこの関連が再現された」ことが記載されていた。つまり、先行研究²⁵⁾において、青年期の ASD 児と親の相互作用が社会的スキルを予測することが示されている。

研究 2 では、良好な関係性を築くことができている青年期の ASD 児と親の相互作用について分析した。その結果、「自分のペースで行動する」「母親に返答する・反応を返す」「母親に従う」、親の「子供を見守る」「子供に話しかける」が共通点として示された。一方で、親子毎に異なる結果が多く、支援には個別性が求められることも示された。さらに、子どもと良好な関係性を築くことができている親は、ASD 児の特性に応じたコミュニケーション手段を理解し、様々な代償方法を身につけていることが分かった。それに対し子どもは、親に提示された代償方法に適応していることが分かった。

以上より、研究 2 で示された共通点や親子のコミュニケーション手段を日常生活に取り入れることで、良好な親子関係の構築、そして、ASD 児の社会的スキルの向上につながる可能性があると考えられる。

青年期の ASD 児と親に関する知見として、以下のような報告もなされている。Hutchison ら⁷⁹⁾は、青年期の ASD 児を持つ親は、TD 児の親と比較して、より寛容な子育てを行い、子どもに対するコントロールが少ないことを報告している。また、最近の研究⁸⁰⁾では、青

年期の ASD 児の母親は、TD 児の母親と比較して、子どもとの葛藤を扱う際に、より繊細で共感的な関わり方をすることも明らかとなっている。この先行研究⁸¹⁾は、半構造化課題（例：工作のおもちゃで未来の乗り物を発明・製作）と構造化課題（例：ビー玉迷路を解く）中の母子相互作用の観察を行い、12 歳から 16 歳の ASD 児と TD 児の母親の育児行動を比較したものである。

本研究においては、研究 2 より、良好な関係性を築いている青年期の ASD 児の親は、子どもに対し肯定的なカテゴリが多く、否定的な言動が少ないことや、子どもが自分のペースで行動している場面が多いことが示された。さらに研究 3 のアンケートからも、子育てを楽しんでいるという記述が見られた。そのため、本研究はこの先行研究^{80) 81)}を支持する結果となっていると考えられる。先行研究は構造化場面における量的研究であることにに対し、本研究は非構造化場面（自然な日常生活場面）の質的研究である。そのため、日常生活場面においても、親は子供に対するコントロールが少なく、寛容的で共感的・肯定的な関わり方をすることが示されたといえる。しかし本研究は、良好な関係性の親子のみを抽出し、分析しているため、その他の親子についても研究をしていく必要があると考える。

続いて、ASD 児に対する親の関与について、先行研究²⁵⁾では以下の様に述べられている。「青年期の ASD 児に対するソーシャルコーチとして親が関与することは、様々な先行研究で有効性が示されている⁸¹⁻⁸⁴⁾。しかし、我々の知見は、相互作用のレベルに基づいて、親と青年期のダイアドを介入前にスクリーニングすることの重要性も強調している。相互作用の低さ、または親の批判的、判断的な立場によって特徴づけられるダイアドは、治療プロセスにとって有害ともなりうる。」。つまり、ASD 児と親に関わる際には、子どもだけでなく親を知ること、そして親子の関係性や親子の背景について知った上で親の関与について検討することが必要である。

本研究においては、研究 3 より、親が子どもの特徴を理解し、子どもの苦手に対する対

処法そして許容範囲を設定していること、親の子育てを楽しむ力、さらに周囲のサポートの有無が、ASD児と親が良好な関係性を築くために必要な要素であることが示唆された。ASD児のこだわりの内容と子どもが適応する過程への親の取り組みは、親子のライフスタイルに直結する。そのため、ASD児のこだわりや行動様式に対する親の受け入れや感じ方は重要であると考え。さらに親のストレスは子どもに影響を及ぼすため、親の感じ方や態度は子どもの生活態度にも影響を与える。ASD児と過ごすライフスタイルを親が受け入れ、親、そして子どもが楽しんでいる様子を見ることで、周囲は親子関係が良好であるという印象を受けると思われる。これは、先行研究²⁵⁾の結果を支持する結果であり、加えて、親子の周囲のサポートの必要性を示唆する結果であると考え。

以上より、「ASD 児の特性に応じたコミュニケーション手段を理解し、親が代償方法を獲得すること」「ASD 児が親の代償方略に適応すること」「親子のライフスタイルの築き方」が良好な親子関係を築く上で大切な要素であると考え。

II. 今後の展望と研究の限界

本研究の限界として、研究 2 の観察には 1 時間の時間を設けたが、全ての日常生活場面を網羅できたわけではない。研究環境をさらに広げることで、新たな知見を得ることができ
る可能性がある。また、研究 3 のアンケート調査は 3 名であり、少数の結果となった。アンケート調査に関しては、今後事例数を増やすことで量的な分析を実施することができ、一般化を目指すことも可能であると考えられる。

Ⅲ. 結語

今回、研究1のスコーピングレビューの結果から、日常生活における養育者とASD児の相互作用の特徴を把握する上で、非構造化場面において研究を進めていく必要性があること、また、親子のコミュニケーション方法がある程度確立されている青年期における研究を進めていく余地があることが示唆された。そのため青年期のASD児と親を対象に日常生活のビデオ分析を実施し、質的研究を行った。その結果、子供の「自分のペースで行動する」「母親に返答する・反応を返す」「母親に従う」、親の「子供を見守る」「子供に話しかける」というカテゴリがすべての親子に共通していた。一方で親子毎に異なる結果も多々あり、親子毎に個別に評価を行うことの必要性や、親子に合わせた支援方法の重要性が示された。研究3のアンケート調査では、研究対象となった子どもの適応行動能力はASD児の特徴と一致していたこと、そして、養育者の周囲に相談できる存在がいることが、ASD児の親子の関係性に必要な要素の一つである可能性が示唆された。

以上より、青年期のASD児と良好な関係性を築いている親子の特徴として、個別性を重視した支援を実施していくことの重要性や、親の周囲に相談できる存在を作ることの重要性が示された。また、上述の共通事項も作業療法を提供する際の視点として参考となると考えられる。

IV. 謝辞

本研究の趣旨に賛同し、研究の協力者の募集にご協力頂いた特別支援学校の教員の皆様、自閉症親の会の皆様、そして研究にご協力いただいた被験者の皆様に心から感謝申し上げます。本研究を実施するにあたり、養育レジリエンス要素質問票の利用許可を下さった稲垣真澄先生をはじめとする作成者の先生方にも感謝申し上げます。

国際医療福祉大学大学院の藤本幹教授、平野大輔講師、牛腸昌利助教には、研究指導員、副研究指導員として、本研究の研究計画立案から博士論文を執筆する過程まで多大なるご指導を頂きました。先生方に頂くご助言には、いつも、厳しさの中にも優しさが込められており、先生方の温かいご指導のおかげでここまでたどり着くことができました。また、国際医療福祉大学小田原保健医療学部作業療法学科の先生方には、論文執筆に関するご助言だけでなく、仕事面や精神面においてもサポートして頂き、恵まれた環境で博士課程を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

そして、家族、友人をはじめ、博士課程在籍中に支えて下さった全ての皆様に感謝の意を表します。誠にありがとうございました。

引用文献

1. American Psychiatric Association. Diagnostic and statistical manual of mental disorders. 5th edition. Washington DC: American Psychiatric Association, 2013
2. Koegel RL, Schreibman L, Loos LM, et al. Consistent stress profiles in mothers of children with autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders* 1992; 22: 205-216
3. Breen MJ, Barkley RA. Child psychopathology and parenting stress in girls and boys having attention deficit disorder with hyperactivity. *Journal of Pediatric Psychology* 1988; 13(2): 265-80
4. Lovejoy MC, Graczyk PA, O`Hare E, et al. Maternal depression and parenting behavior: a meta-analytic review. *Clinical Psychology Review* 2000; 20(5): 561-592
5. Maccoby EE. Parenting and its effects on children: on reading and misreading behavior genetics. *Annual Review of Psychology* 2000; 51(1): 1-27
6. 横谷祐輔,田部絢子,石川衣紀ら. 「発達障害と不適応」問題の研究動向と課題. *東京学芸大学紀要* 2010;61(1), 359-373
7. 宮本信也.発達障害と子ども虐待. *発達障害研究* 2008;30(2),77-81
8. 白石雅一.発達障害と児童虐待—予防と早期介入に関する実践報告と考察—. *宮城学院女子大学発達科学研究* 2005;(5),31-43
9. 柳谷聡子, 中島そのみ, 中村裕二ら. 青年期の高機能広汎性発達障害における対人コミュニケーション行動の評価と特性-応用行動分析学の視点から-. *作業療法* 2011;30(4),432-444
10. 岩永竜一郎, 伊藤斉子, 清水信之ら. 小集団作業療法が高機能広汎性発達障害児の心の理論に及ぼす効果-パイロットスタディ-. *作業療法* 2005; 24(5), 474-483

11. 山本真実,浅野みどり.自閉症スペクトラム障害の子どもと母親のコミュニケーションに関する国内文献レビュー. 家族看護学研究 2012; 17(2): 75-85
12. O`Rourke JF. Field and laboratory: the decision-making behavior of family groups in two experimental conditions. Sociometry 1963; 26(4): 422-435
13. Moustakas CE, Sigel IE, Schalock HD. An objective method for the measurement and analysis of child-adult interaction. Child Development. 1956; 27(2): 109-134
14. 総務省. 2017. 発達障害者支援に関する行政評価・監視結果に基づく勧告.
https://www.soumu.go.jp/main_content/000458761.pdf 2018.12.29
15. Arksey H, O'Malley L. Scoping studies: towards a methodological framework. International journal of social research methodology 2005; 8(1): 19-32
16. Peters MDJ, Godfrey C, McInerney P, et al. 2017. Chapter 11: scoping reviews (2020 version): JBI Reviewer 's Manual. JBI. <https://jbi-global-wiki.refined.site/space/MANUAL/3283910770/Chapter+11%3A+Scoping+reviews> 2021.11.1
17. Baker JK, Messinger DS, Lyonset KK et al. A pilot study of maternal sensitivity in the context of emergent autism. Journal of Autism and Developmental Disorders 2010; 40(8): 988-999
18. Wan MW, Green J, Scott J. A systematic review of parent-infant interaction in infants at risk of autism. Autism 2019; 23(4): 811-820
19. Baker JK, Fenning RM, Howland MA, et al. Brief Report: A Pilot Study of Parent-Child Biobehavioral Synchrony in Autism Spectrum Disorder. Journal of Autism and Developmental Disorders 2015; 45(12): 4140-4146

20. Flippin M, Watson LR. Fathers' and Mothers' Verbal Responsiveness and the Language Skills of Young Children With Autism Spectrum Disorder. *American Journal of Speech-Language Pathology* 2015; 24(3): 400-410
21. Fusaroli R, Weed E, Fein D, et al. Hearing me hearing you: Reciprocal effects between child and parent language in autism and typical development. *Cognition* 2019; 183: 1-18
22. Hudry K, Rumney L, Pitt N et al. Interaction Behaviors of Bilingual Parents With Their Young Children With Autism Spectrum Disorder. *Journal of Clinical Child & Adolescent Psychology* 2018; 47(sup1): 321-328
23. Wicks, Rachelle, Paynter J, Westerveld MF. Looking or talking: Visual attention and verbal engagement during shared book reading of preschool children on the autism spectrum. *Autism* 2020;24(6):1384-1399
24. Hirschler-Guttenberg Y, Golan O, Ostfeld-Etzion S, et al. Mothering, fathering, and the regulation of negative and positive emotions in high-functioning preschoolers with autism spectrum disorder. *Journal of Child Psychology and Psychiatry* 2015; 56(5): 530-539
25. Rabin SJ, Bamberger E, Mor-Snir I, et al. Parent-Adolescent Reciprocity in a Conflictual Situation Predicts Peer Interaction in Adolescents With ASD. *Autism Research* 2019; 12(2): 263-273
26. Flippin M, Watson LR. Parental Broad Autism Phenotype and the Language Skills of Children with Autism Spectrum Disorder. *Journal of Autism and Developmental Disorders* 2018; 48(6): 1895-1907
27. Baker JK, Fenning RM, Howland MA, et al. Parental criticism and behavior problems in children with autism spectrum disorder. *Autism* 2019; 23(5): 1249-1261

28. Boorom O, Muñoz V, Xin R, et al. Parental Responsiveness During Musical and Non-Musical Engagement in Preschoolers with ASD. *Research in Autism Spectrum Disorders* 2020; 78: 101641
29. Bontinck C, Warreyn P, Meirsschaut M, et al. Parent-Child Interaction in Children with Autism Spectrum Disorder and Their Siblings: Choosing a Coding Strategy. *Journal of Child and Family Studies* 2018; 27: 91–102
30. Hudry K, Aldred C, Wigham S, et al. Predictors of parent-child interaction style in dyads with autism. *Research in Developmental Disabilities* 2013; 34(10): 3400-3410
31. Strid K, Heimann M, Tjus T. Pretend play, deferred imitation and parent-child interaction in speaking and non-speaking children with autism. *Scandinavian Journal of Psychology* 2013; 54(1): 26-32
32. Bottema-Beutel K, Oliveira G, Cohen SR, et al. Question–response–evaluation sequences in the home interactions of a bilingual child with autism spectrum disorder. *International Journal of Language & Communication Disorders* 2020; 55(2): 216-230
33. Ostfeld-Etzion S, Feldman R, Hirschler-Guttenberg Y, et al. Self-regulated compliance in preschoolers with autism spectrum disorder: The role of temperament and parental disciplinary style. *Autism* 2016; 20(7): 868-878
34. Patterson SY, Elder L, Gulsrud A, et al. The association between parental interaction style and children's joint engagement in families with toddlers with autism. *Autism* 2014; 18(5): 511-518
35. Costa AP, Steffgen G, Vögele C. The role of alexithymia in parent-child interaction and in the emotional ability of children with autism spectrum disorder. *Autism Research* 2019; 12(3): 458-468

36. Brigham NB, Yoder PJ, Jarzynka MA, et al. The sequential relationship between parent attentional cues and sustained attention to objects in young children with autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders* 2010; 40(2): 200-208
37. Plumet MH, Veneziano E. Typical and atypical pragmatic functioning of ASD children and their partners: a study of oppositional episodes in everyday interactions. *Journal of Autism and Developmental Disorders* 2015; 45(1): 53-67
38. Goldberg MC, Allman MJ, Hagopian LP, et al. Examining the reinforcing value of stimuli within social and non-social contexts in children with and without high-functioning autism. *Autism* 2017; 21(7): 881-895
39. Wang H, Suveg C, West KB, et al. Synchrony of Respiratory Sinus Arrhythmia in Parents and Children with Autism Spectrum Disorder: Moderation by Interaction Quality and Child Behavior Problems. *Autism Research* 2021; 14(3): 512-522
40. Beurkens NM, Hobson JA, Hobson RP. Autism severity and qualities of parent-child relations. *Journal of Autism and Developmental Disorders* 2013; 43(1): 168-178
41. Westerveld MF, Paynter J, Wicks R. Shared Book Reading Behaviors of Parents and Their Verbal Preschoolers on the Autism Spectrum. *Journal of Autism and Developmental Disorders* 2020; 50(8): 3005-3017
42. Zaidman-Zait A. The contribution of maternal executive functions and active coping to dyadic affective dynamics: Children with autism spectrum disorder and their mothers. *Autism* 2020; 24(3): 645-657
43. Haven EL, Manangan CN, Sparrow JK, et al. The relation of parent-child interaction qualities to social skills in children with and without autism spectrum disorders. *Autism* 2014; 18(3): 292-300

44. Saxbe DE, Golan O, Ostfeld-Etzion S, et al. HPA axis linkage in parent-child dyads: Effects of parent sex, autism spectrum diagnosis, and dyadic relationship behavior. *Developmental Psychobiology* 2017; 59(6): 776-786
45. ワトソン LR, E ショプラー, 佐々木正美ら. 自閉症のコミュニケーション指導法: 評価・指導手続きと発達の確認. 東京: 岩崎学術出版社, 1995
46. ジョン T ネイスワース, パメラ S ウルフ(萩原拓監修, 小川真弓, 徳永優子ら訳). 自閉症百科事典. 東京: 明石書店, 2010
47. 加藤哲文. 自閉症児のコミュニケーション支援: 反応形態の形成から機能獲得の援助へ. *発達障害研究* 1996; 18(1): 12-20
48. 白井利明. よくわかる青年心理学. 東京: ミネルヴァ書房, 2006: 4-5
49. 野邑健二, 金子一史, 本城秀次ら. 高機能広汎性発達障害児の母親の抑うつについて. *小児の精神と神経* 2010; 50(3): 259-267
50. Lai MC, Lombardo MV, Baron-Cohen S. Autism *Lancet* 2014; 383(9920): 896-910
51. Fombonne E. Epidemiological surveys of autism and other pervasive developmental disorders: an update. *Journal of Autism and Developmental Disorders* 2003; 33(4): 365-382
52. Werling DM, Geschwind DM. Sex differences in autism spectrum disorders. *Current Opinion in Neurology* 2013; 26(2): 146-153
53. Benson PR. The impact of child symptom severity on depressed mood among parents of children with ASD: the mediating role of stress proliferation. *Journal of Autism and Developmental Disorders* 2006; 36(5): 685-695
54. Dabrowska A, Pisula E. Parenting stress and coping styles in mothers and fathers of pre-school children with autism and Down syndrome. *Journal of Intellectual Disability Research* 2010; 54(3): 266-280

55. Lovejoy MC, Graczyk PA, O'Hare E. Maternal depression and parenting behavior: A meta-analytic review. *Clinical Psychology Review* 2000; 20(5): 561-92
56. Maccoby EE. Parenting and its effects on children: on reading and misreading behavior genetics. *Annual Review of Psychology* 2000; 51: 1-27
57. Byungmo Ku, Stinson JD, MacDonald M. Parental Behavior Comparisons Between Parents of Children with Autism Spectrum Disorder and Parents of Children Without Autism Spectrum Disorder: A Meta-analysis. *Journal of Child and Family Studies* 2019; 28:1445-1460
58. 能登真一, 山口昇, 玉垣努ら. 作業療法評価学. 第3版. 東京: 医学書院, 2017, 40
59. 鯨岡峻. エピソード記述入門—実践と質的研究のために. 東京: 東京大学出版会, 2005
60. 藤本幹, 八田達夫, 武藤真理. 遷延性意識障害患者と主介護者が共に過ごす時間の援助を目的とした介入-介入による交流の質的变化の分析-. *新潟県作業療法士会学術誌* 2015; 9: 57-68
61. 松田祥子, 津田望, 上野一彦. 改訂日本版マカトン・サイン線画集. 東京: 日本マカトン協会, 2000
62. 稲垣真澄, 羽鳥誉之, 井上祐紀ら. 発達障害のモダリティ別事象関連電位: 自閉症スペクトラムにおける特徴. *臨床脳波* 2007;49(1):12-17
63. Mundy P, Newell L. Attention, Joint Attention, and Social Cognition. *Current Directions in Psychological Science* 2007; 16(5): 269-274
64. Bates E, Camaioni L, Volterra V. The Acquisition of Performatives Prior to Speech. *Merrill-Palmer Quarterly of Behavior and Development* 1975; 21(3): 205-226
65. Bullinger AF, Zimmermann F, Kaminski J, et al. Different social motives in the gestural communication of chimpanzees and human children. *Developmental science* 2011; 14(1): 58-68

66. Curcio F. Sensorimotor functioning and communication in mute autistic children.
Journal of autism and childhood schizophrenia 1978; 8(3): 281-292
67. 黒木八重子, 納富恵子, 斉藤瑞恵ら. 知的障害児通園施設への TEACCH プログラムの
アイデアの導入①導入のプロセスと構造化の効果について. 福岡教育大学障害児治療
教育センター年報 1999; 1: 25-37
68. 田川元康, 川口章恵. 自閉症児の構造化による指導法の研究 (1) . 和歌山大学教育学
部教育実践指導センター紀要 1994; 4: 95-104
69. 佐々木正美, 内山登紀夫ら. 自閉症の TEACCH 実践. 東京: 岩崎学術出版社, 2002
70. 佐々木正美, 矢野理絵ら. 自閉症の TEACCH 実践②. 東京: 岩崎学術出版社, 2005
71. 佐々木正美. 自閉症児のための TEACCH ハンドブック. 東京: 学研, 2008
72. 梅永雄二. TEACCH プログラムに学ぶ自閉症の人の社会参加. 初版, 東京: 学研教育出
版, 2010
73. 佐々木正美, 宮原一郎. 自閉症のための絵で見る構造化. 東京: 学研, 2004
74. Sparrow SS, Balla DA, Cicchetti DV, et al. Vineland Adaptive Behavior Scales.
America: American Guidance Service, 1984
75. Sparrow SS, Cicchetti DV, Balla DA, et al. Vineland Adaptive Behavior Scales. Second
Edition, Survey Forms Manual. Minneapolis: National Commercial Services, 2005
76. Suzuki K, Kobayashi T, Moriyama K, et al. Development and Evaluation of a Parenting
Resilience Elements Questionnaire (PREQ) Measuring Resiliency in Rearing Children
with Developmental Disorders. PLOS ONE 2015; 10(12)
77. 鈴木浩太, 稲垣真澄. 発達障害児 (者) をもつ養育者のレジリエンス: 尺度の開発と適
用について. 精神保健研究 2017; 30: 63-71

78. Feldman R, Bamberger E, Kanat-Maymon Y. Parent specific reciprocity from infancy to adolescence shapes children's social competence and dialogical skills. *Attachment & Human Development* 2013; 15(4): 407–423
79. Hutchison L, Feder M, Abar B, et al. Relations between parenting stress, parenting style, and child executive functioning for children with ADHD or autism. *Journal of Child and Family Studies* 2016; 25(12): 3644–3656
80. van Esch L, Vanmarcke S, Ceulemans E, et al. Parenting adolescents with ASD: A multi method study. *Autism Research* 2018; 11(7): 1000–1010
81. Karst JS, Van Hecke AV. Parent and family impact of autism spectrum disorders: A review and proposed model for intervention evaluation. *Clinical Child and Family Psychology Review* 2012; 15(3): 247–277
82. Laugeson EA, Frankel F, Mogil C, et al. Parent-assisted social skills training to improve friendships in teens with autism spectrum disorders. *Journal of Autism and Developmental Disorders* 2009; 39(4): 596–606
83. Yoo HJ, Bahn G, Cho IH, et al. A randomized controlled trial of the Korean version of the PEERS[®] parent-assisted social skills training program for teens with ASD. *Autism Research* 2014; 7(1): 145–161
84. Rabin SJ, Israel-Yaacov S, Laugeson EA, et al. A randomized controlled trial of the Hebrew adaptation of the PEERS[®] intervention: Behavioral and questionnaire-based outcomes. *Autism Research* 2018; 11(8): 1187–1200

添付資料 2

自由記載：アンケート用紙（研究 3）

このアンケートでは、子育てについてお伺いします。養育者である皆様が感じていらっしゃるお子さんの状態や、日常生活でされている工夫をお教え下さい。

お子さんの年齢 _____ 歳 性別 男 / 女

診断名 _____

・医療福祉機関で知能検査等を受けたことがございましたら、差し支えなければ分かる範囲でその結果をご記載下さい。

検査時の年齢 _____ 歳

検査名 _____

結果

--

1. お子さんの情緒面（感情）と行動面で困っている点やお子さんが苦手とする点がありますか？また、お子さんが得意な点がありますか？また、それぞれに対する対処法や工夫点についてご回答ください。

情緒面（感情）について困っている点・苦手な点

--

対処法や工夫

--

得意な点・良いところ

--

行動面について困っている点・苦手な点

--

対処法や工夫

--

得意な点・良いところ

--

II. 日常生活動作（整容・食事・更衣・トイレ・入浴）の中で特に苦手とする項目は何ですか？

整容 / 食事 / 更衣 / トイレ / 入浴

・その理由、内容や工夫している点をご回答下さい

--

・その他家事のお手伝いや学校生活、外出先などで苦手とする項目は何ですか？

--

・その理由、内容をご回答下さい

--

III. お子さんとうまくコミュニケーションが取れていると感じますか？

はい / いいえ

・お子さんとコミュニケーションを取る上で心掛けていることはありますか？

--

IV. その他何かございましたらご記載下さい

--

ご協力頂き、誠にありがとうございました。